
あなたの匂いが嗅ぎたいっ！

ころみごや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたの匂いが嗅ぎたいっ！

【Nコード】

N7529X

【作者名】

ころみこや

【あらすじ】

高校進学のために地元を離れて上京した釣枝比念は、居候先となる古ぼけた骨董屋にて、架織乃姉妹の訓夏と胡桃の二人と再会する。昔交わした約束を憶えていなかったことに腹を立てる妹の訓夏と、人をからかうことを生きがいとするかのような性格をしている姉の胡桃、この二人と共に一つ屋根の下で暮らしていくことになった。だが、妹の訓夏には、とある秘密があつて――…。

【0・1】

わたしは——…、

「——××が、好きです」

あの日以来、ずっと好きなんです。

二人きりで誓い合い、繰り返し繰り返し確かめてみました。

そばにいただけで、わたしの全てをくらくらにするほどに好きなんです。

「——××が、忘れられません」

忘れるはずがありません。

いつも、いつでも、いつだって、わたしは憶えています。

たとえ離れ離れになったとしても、忘れることなんてできるはずがありません。

「——××が、恋しくて我慢できません」

一秒でも早く、欲しいんです。

心も体も何もかも全てを奪われてしまうほどの存在感が、愛おしくてたまりません。

時には我慢しなければならぬことを恐れ、それがとても哀しくて泣きそうになります。

でも、わたしは——…、

「——××が、好きです」

誓い合った言葉に嘘や偽りはありません。
この想いを叶えるために、ずっとずっと、言葉にして伝え続ける
ことを約束します。

……そう、わたしは、あなたの――

「――匂いが、大好きです」

【1・1】

『とつとくたばれ、この変態紳士ッ』

まず、否定させてもらうけど、オレは別に変態ではない。それを踏まえた上であえて言わせてもらうわけだが、変態と言う名の紳士淑女に罪はない。憎むべきは変態的な存在を糾弾するべきであると声も高々に言つてのける自称変態ではない人々と、その意見に何ら疑問を抱くこともなく同調してしまうような、如何にも周囲の空気に流されやすい愚かな奴らだけなんだ、と口早に説明してみた。

その結果、もれなく同じクラスの女の子（仮にHさんと名づけよう）から急所に蹴りを戴き、ついではばかりに嫌悪感丸出しの辛辣なお言葉を頂戴したのはまだ記憶に新しい。

確かにHさんは同じクラスの中でも飛びつきりに可愛い女の子であることは言われなくとも理解しているつもりだ。それどころか学年で、いやいやこの学校に通う女生徒全体で見ても頭一つ飛びぬけて可愛いのではないだろうか。オマケに性格も明るく、どんな奴にだって別け隔てなく接してくれる天使のような存在だ。この世に男として生まれたのであれば勿論、たとえそれが彼女と同じ女性であったとしても、是非ともお近づきになりたいと考えるのは当然と言えるだろう。

しかしまあ、だからといって何らかのアクションが起こるのではないかと期待して話しかけたわけでは、決してない。Hさんが恥ずかしそうに俯きながら困っている姿を見てしまったオレが、下心（は多分）無く、善意を持って行動してみたが故の結末が、コレだ。

水泳の授業が終わった後、彼女の下着が無くなったとの噂を耳にしたオレは、Hさんが今現在スカートの下に何も穿いていないのではないかというあからさまにエロい展開が待ち受けていそうな偏った妄想をしつつ、と同時にその悩みをあつという間に解決できるのはオレの他には存在しないであろうことを早々と理解し、早速行動

に移してみる。

それでだ、無事にHさんの下着を見つけ出すまでには至ったわけだが、なんていうべきか、ほんの少しだけ解決を急いたのが原因で、なんとも残念な誤解をされてしまった。

『そ、そこで何してるの……？』

無くなった下着は、女子更衣室にあった。無人の更衣室にお邪魔し、Hさんが使用したと思われるロッカーを開けてみると、二段組になっている棚の裏に引っ掛かっていた。よく見ればすぐに気づくはずなのに、どうやらHさんはおっちょこちよいのようだ。

やれやれ、これで問題解決だな、と思ったのも束の間、後ろから声をかけられて振り向いてみれば、そこにいるのはHさん。そしてその背後には同じクラスの奴らの姿がちらほらと確認できる。……

ああ、死んだな。社会的に存在を抹殺される数秒前、では今からカウントダウン開始です、と愚痴りたい気分だ。

ここで冒頭に戻り、言い訳じみた台詞を口にしてみた甲斐も空しく、僅か半日足らずでオレの変態との公式が校内において正式に認定されることになってしまったわけだ。

いやちよつとまで、Hさんはオレのことをただの変態とは呼ばずに変態紳士と呼んでいたよな。それはつまり『わたしの下着を見つけてくれてありがとう、でも皆の前では恥ずかしくて素直になれないからせめて紳士と呼ばせてほしい』といった隠しメッセージが込められてい……るわけがない。オレは阿呆か。否、変態紳士の間違いだ。

というわけで翌朝には学校に行きたくないから家に引きこもってゲームしたり漫画読んだりネットサーフィンしたりするんだ病（通称ニート、じゃないか。一応学生だし）にかかってしまったオレは、その日を境に不登校となりましたとさ。めでたしめでたし。

ちくしょう、一度でいいから彼女が欲しかったぜ……。

(3)

とはいえ、そう簡単には終わらないのが人生って奴だ。中学三年生の夏の時点で引きこもりになってしまったとしても、これはこれで引きこもりになる時期がよかったのではないかと今更ながらに思い返してしまいそうになる今日この頃だったりもする。

オレだって人並みに人生の墓場って奴をこの身を持って体験してみたいと思っているし、そうなるまでは絶対に死んでたまるもんかと息巻く予定だ。たとえそれが後に後悔しか生み出さないと断言されようがな。

中学校を卒業すれば、人は皆、高校生になる。そうなれば今まで同じ学校に通っていた奴らとは異なる、県外の高校に進学する道を選択することも可能だ。

まあなんだ、これは別に変態紳士と罵られることに耐えられなくなつて逃げるわけではなく、いわゆる高校生デビューというものを実践してみるのも面白いかもしれないな、と考えてみただけなので勘違いしないように。

実際のところ、オレの両親は父さんも母さんも仕事の関係で一年のほとんどを海外で過ごしている。日本に帰ってくるのはお盆と正月、あとはゴールデンウィークに限られ、県外の高校を受験することに反対はしなかった。因みにオレには妹が一人いるのだが、兄で

あるオレを差し置いて、既に県外の有名進学校で寮生活をしているので、妹もまた顔を合わせる機会は春休みと夏休み、そして冬休みに限定されている。

兄弟の仲は良くない（妹が一方的にオレを嫌悪している）から、オレが実家を離れようが別段、問題はないだろう。そんなわけで引きこもりを始めてから数ヶ月、都内の高校に無事合格することができた。が、その過程において裏技っぽい手を駆使したことは家族以外に感づかれないように細心の注意を払うことにしよう。

というわけで三月下旬。卒業式でさえも出席を拒否して引きこもり生活を最後の最後まで満喫してみるという墮落の選択肢を選んできましたオレは、実家暮らしの人間であれば誰もが一度は憧れたことのある（かもしれない）、一人暮らしと言う名の自由を手に入れるために単身、上京するのだった。まあ、ぶっちゃけ今の今まで一人暮らしっぽい生活を送っていたわけだがな。しかしながら両親の思惑にまったく気づいていなかったオレは、それが一人暮らしをするためのアパートではなく、大学時代の知り合いの家に居候する形であったことを、つい今しがた理解することになる。

だってほら、よく見てみるよ。オレを出迎えてくれたのはアパートやマンションといった類ではなく、誰がどう見ても一軒家にしか見えないじゃないか。目を凝らしたら形が変わるわけでもあるまい。今この場所に辿り着くまで、オレはこれから三年の間お世話になるであろうアパートが実はアパートではありませんでした、という事実をまったく知らされていなかった。というか何一つとして聞かされていなかったわけか、オレは。両親の信頼度は限りなくゼロに近いつてことを無理矢理に実感させられたぞ。両親に一杯食わされたことに溜息を吐き、改めてオレは目の前に佇む一軒家を観察してみることにした。

二階建ての一軒家は、一階を店舗とした住居兼雑貨屋っぽい。いや、雑貨屋というよりは何でも屋の方がしっくりくるか。

硝子窓から店内の様子を確認してみたところ、種類問わず様々な

物が無造作に置かれている。『閉店してないね』と書かれた札のかけられたドアの前に立ち、商品によって築かれた山々の最奥に存在すると思われる、未だ姿の見えぬ店員に気づかれないようにゆつくりとドアノブを回して、中に入ってみた。ふと、視界に捉えた本棚の奥を見てみれば、埃をかぶった漫画本が巻数順に並べられている。以前はきつちりと陳列していたであろう形跡が見られたが、長い年月をかけて地層を生み出すかのように、値札の貼られていない商品が空いたスペースを侵略していったのか、今では見る影も無い。なんでしょう。いいのか悩む必要すら皆無、正にここは？ごみ屋敷？と称するに相応しかった。

「やあ、いらつしゃい。今日は何をお探しで？」

眉根を寄せたまま店内を見渡していると、何処からともなく声をかけられる。

声の主を捜そうにも商品が邪魔で何処にいるのか見当もつかない。天井には防犯カメラも設置されていないみたいだし、これじゃ万引きされ放題だぞ。

「商品が多すぎてどこにいるのか分からないんですけど」

商品が邪魔で、とはさすがに言わないことにした。仮にも売り物だからな。

するとオレの声に反応し、声の主がくつくと喉を鳴らす音が聞こえた。

「おおい、キミの耳は節穴かい？ 私のいる場所が分からないとは困ったものだね」

初対面の人間に、それもお店に入ってきたお客に対して随分な言い様だ。この家の住人はこんな無礼な奴を雇っているのかよ。ただのバイトかもしれないけど、どう考えても人選ミスとしかいえないぞ。

「くふふつ、……ほら、こっちだよこっち。キミのすぐ後ろにいるじゃないかい」

「うわっ」

ふー、と首筋に息を吹きかけられた。ぞぞぞつ、と不意打ちに肩を震わせる。

「いいいいきなり何しやがるっ」

「んー？ 鈍感なキミに一刻も早く私の存在に気づいて欲しくて背後から忍び寄りそつと息を吹きかけてあげただけだが、果たして今の一連の動作に何か問題でもあるのかな？」

「大有りだ！」

店内であることを忘れ、人目を気にせずに大声を上げてしまい、オレは慌てて口を閉じる。そんなオレの姿をじつくりと値踏みし、意地悪そうな笑みを浮かべながら店員が呟く。

「心配は無用さ、店の中にいるのは私とキミの二人だけだからね」

「そ、そっか……」

他のお客に迷惑をかけていないと知って安堵した。

「そつ、キミと私の二人きり。……興奮、する？」

可愛らしく小首をかしげ、訊ねてくる。

する、とは言えまい。というかいったい何なんだこの店員の態度は。人をおちよくつて楽しそうに口元を緩めるなんて性格が悪いにもほどがあるぞ。

「まあそんなに怒らずにこっちに来るといいさ。客商売は笑顔が一番だからねえ」

質問の答えを聞く前に、店員は店の奥へと隠れてしまふ。後を追うと、商品の山に埋もれたレジカウンターを発見した。椅子に座って栞の挟まった読みかけと思しき漫画を手取る店員に、半ば呆れながらオレは口を開くことにした。

「あのさ、この家の人に用事があるから呼んできて欲しいんだけど」「どんな用事があるんだい？」

くいつ、と左手の中指で眼鏡の位置を調整し、上目遣いにオレの顔を瞳に映し出す。

「……いや、だから用があるのはこの家の人であってキミではないんだけど」

「ふむう、キミは耳だけでなく目も節穴のようだね?」

どういう意味だ。何度も何度もオレの心を少しずつ抉り取るような言葉をぶつけてきやがって、性格だけじゃなくて口も悪い奴だな。この店員と出会った途端、精神的ダメージが限界値を振り切らんばかりに蓄積されていくぞ。

「いいさ、おバカさんなキミのために私が一から説明してあげようじゃないか」

漫画本を閉じて、ゆらりと立ち上がる。オレよりも身長が低いのか、視線は少しばかり下を向けることになった。

「店の名前は架織乃骨董屋^{かおりの}。家の表札は架織乃。そして私の名前は架織乃胡桃^{こうづ}。つまりは私がこの家の住人だってことさ。ちゃんと理解できたかな、おバカさん?」

「えっ、……キミが?」

俄かには信じられない、とは言えないか。家主ならなんとなく納得できないこともない。

仮に、彼女がただのバイトであった場合の方が大問題だ。……勿論、家主だろうがバイトだろうが態度がすこぶる悪いことに変わりはないんだけどさ。

「そうだとも、私が架織乃骨董屋の責任者ということになるわけさ。ところでキミはいつたいいつになったら私の質問に答えてくれるんだい?」

「質問? って、何か訊かれたっけ」

「キミは記憶力も乏しいのかい? キミと私のファースト・コンタクトにおいてキミが何を探しに架織乃骨董屋に足を踏み入れたのかについて訊ねたじゃないか」

ああ、そういえば確かにそんなことも言われたかもしれない。声の主が何処にいるのか捜していたから忘れていたよ。だがオレは別にお客として此処を訪ねたわけじゃないんだ。

「ええっと……、キミが家主ならさ、今日からオレが此処に住まわせてもらうことを両親から聞いていると思うんだが……何も聞いて

ないか？」

そう言つて、オレは彼女の姿を視界に捉える。

家主と呼ぶには随分と歳が若いように見えるのは気のせいではないはずだ。下手したらオレと同じ年なんじゃないだろうな。

真っ直ぐな黒髪を腰まで垂らした彼女は、口角を上げて意地悪そうに笑みを浮かべている。ほんの少し丸みを帯びた四角い眼鏡は、フレームの上半分が赤、下半分が黒に染まり、彼女の表情に奇抜さを加えているように感じた。身長はそれなりに高いほうで、すらっとした体型だ。つまり何が言いたいのかというと、胸はでかくない。勿論、小さいわけではないのだが、顔を埋めるほどの大きさではないってことだ。肉付きが悪いのかな、抱きしめても折れてしまいそうな印象が残る。自己紹介をされた時にピンときたが、胡桃って名前からして骨董品っぽく（ああそうだよダジャレだよ悪いか）、性格や口調は頗る悪いってことが分かったけど、もし、将来的に彼女と付き合うことになるとすれば、さながら骨董品であるかの如く大事に大事に接しなければ壊れてしまいそうな脆さを持ち合わせている。

「キミの疑問に対する返事をするべきなんだろうけど……、んー、なんだろうね、キミの視線が物凄く失礼に見えるわけだが、もし良ければ目を潰してもいいかい？」

「やめろ」

即、拒否する。潰されたら目の保養ができなくなるから勘弁してもらいたい。

「ははは、冗談だよ冗談。と言っておけば何を言っても許されるから便利な言葉だね」

どうでもいいからとつと話を進めてくれ。彼女と言葉を交わすだけで精神的な疲労がとんでもないことになりつつある。

「で、返事をする前にだ、まずはキミの名前を教えてもらえないかな？ そうしなければ私はキミが信頼に足る人物か否か理解することすら困難だからねえ」

片目を閉じ、右の掌を向けて促してくる。そういえばまだ自己紹介をしていなかったな。

コホンッ、と小さく喉を鳴らし、口を開く。

「オレの名前は釣枝比念。つりえだ ひねん 四月から虹ヶ丘高校にじがおかに通うために上京してきたんだ」

「ふんふん、キミが噂の釣枝比念か。まあ自己紹介されなくともキミの両親から今日の午後には我が家に着く予定だと連絡が来ていたから初めから分かっていたんだけどね」

連絡が来ていたことに一安心だ。しかし回りくどいな。第一印象が微妙になっただぞ。

「そういえばなんとなく覚えのあるような顔だねえ。でもやっぱり憶えてないから見覚えはないってことで一つよろしく頼むよ。因みに私の名前を呼ぶ時は胡桃でいいさ」

彼女、胡桃はレジカウターの引き出しを開けて写真らしきものを一枚取り出して、オレの顔と写真とを、交互に視線を向けて呟く。「なんだ、その写真にオレが写ってんのか？」

一步、胡桃に近づいて、写真を覗いてみる。写っているのは小さい男の子と女の子だ。

「これ、キミだろう？ 随分と前に釣枝家が我が家に遊びにきた時の写真だよ」

「……すまん、憶えてないな」

窮地に追い込まれた悪徳政治家ってわけではないが、まったく記憶に御座いません。

「ってことは、胡桃はオレとは初対面じゃないのか」

「そんな分かりきったことを訊ねられても困るさ」

恥ずかしそうに視線をそらし、頬を染め……ていない。そりゃそうだよな、誰がどう見ても演技なんだから。何が困るんだかお訊ねしたいものだ。

「見るかい」

写真を手渡される。片方はオレだ。昔の写真とはいえ、さすがに

自分自身の顔が分からないほど間抜けじゃない。んで、その隣でオレと手を握って満面に笑みを咲かせた女の子は誰なのか。……もしかして胡桃か。いやいや、もしかしなくても胡桃なのか。

「なあ、この女の子は——」

「妹さ」

「あ、……そっか」

少し残念に思ったのは隠しておこう。胡桃にバレたら冷やかされそうだからな。というか写真の中のオレは随分と胡桃の妹と仲が良さそうだな。昔の自分をぶん殴りたくなるぞ。

「胡桃にも妹がいるんだな」

「そっというキミにもいるじゃないか。ええっと、名前は確か……」

「どうせ会うこともないから憶えなくていいぞ」

少なくとも今の時点では出番がなさそうだから。なんてな。

「まあいいさ。とにかく今日は早々に店じまいしないといけないね」
高く積み上げられた商品を倒さないように、足元に気をつけながらオレの横を通り抜け、お店の入口へと軽やかに進みゆく。『閉店してないね』の札を引っくり返して『開店してないね』が表を向くようにすると、ドアの鍵を閉めた。

「さて、ほんの少しだがそこで待っていてくれたまえ、ちと部屋の中が散らかっていて恥ずかしいものでね、迅速に片付けてくるさ」

肩を竦める仕草を披露し、暖簾のれんに隠された未知なる領域——更にお店の奥へと姿を消してしまった。トントントン、と軽快に階段を上がる音が響く。結構短めのスカートを穿いていたからな、暖簾が無ければ後姿を拝みたくなくなるところだった。やがて足音が聞こえなくなると、一人取り残されたオレは手持ち無沙汰で、改めて店内を見渡してみる。

「骨董屋ねえ……」

このお店のいったい何処に骨董品が置いてあるというのかね。

商品の種類があまりにも多すぎて、何を専門に取り扱っているのかさえ不明だ。そもそもお客が来るのかどうかさえ甚だ疑問だ。

「いや、ちょっとまで、店内が荒れ放題なのに部屋の中を片付けてくる……？　これ以上に足の踏み場がないってことなのか……？」

店内がまるでごみ屋敷だというのに、部屋の中はそれ以上に散らかっているとも言うつもりか。架織乃家にオレが住める場所が存在するのか不安になってきたぞ。

【 1 - 2 】

「……ん？」

椅子に座り、胡桃が姿を現すのを店内で待っていると、お店の入口付近でガタガタと音が聞こえてきた。こんなお店（酷い呼び様だが、他にはごみ屋敷としか言い様が無い）にお客が来るとは驚きだ。何を求めて足を運んだのか興味が沸く。だが残念なことに、つい先ほど胡桃がドアの鍵を掛けて閉店しやがったから店内を見て回ることは不可能だ。

「しかし粘るな……」

椅子から腰を浮かせ、恐る恐る入口へと近づいてみる。

お店のドアには『開店してないね』の札がかかっているわけだし、暫くすればお店が閉まっていることに気づいて諦めるだろうと考えていたが、一向に帰る気配がない。それどころか、ドアをノックしながらも店内を確認しようと硝子窓からひょっこりと顔を覗かせているじゃないか。そんなに欲しいものがごみ屋敷にあるのか。どれだよ、教えてくれ。

「お、わっ」

胡桃は二階から下りてくる気配はないし、どうすりゃいいんだと眉根を寄せていると、硝子窓越しに目が合った。どうやら女の子のようだが、オレや胡桃と同じくらいか、それかもう少し幼く見える。てつきりじいさんばあさんが客層の大半を占めると考えていたんだが、架織乃骨董屋がますます理解できなくなってきた。と、その瞬間、女の子はまるで時が止まったかのように動かなくなる。やべえ、居留守使っているとも思われたか。

「おい、胡桃。お客が来てるぞー」

「まーただよー」

かくれんぼか。

いつまでたっても胡桃は下りてこない。視線をお店の入口へと戻

してみると、女の子はオレの顔を見つめたまま固まっている。どうすりゃいいんだよ、おい。

「……ったく、仕方ねえな」

女の子の様子を見るに、これは直に会って閉店していますと言わなければ納得しないだろう。下宿先に着いて早々なんで店員の真似事をしなくちゃならないんだかな。

商品を倒さないように入口へと移動し、鍵を開けてドアの外に出る。お店の前にいたのは、学生服に身を包んだ可愛い女の子だった。

「あー、すみません。今日はもう閉店しちゃってるみたいで……、いやあの、オレは別に店員ってわけじゃないんですけど、なんていうかその、お店の人が勝手に閉めちゃったんで……って、聞いてます?」

「……ね、ん」

ぽつりと呟く。

オレの顔を瞳に映しこみ、ぶるぶると震えている。なんだなんだ、オレの顔は見るに耐えないってか。Hさんから変態紳士と呼ばれたオレでもさすがにこりや傷つくぞ。

が、女の子は予想外の行動に出る。

「うわえおあつ」

あるうことか、お店の前で堂々と抱きついてきやがった。

何打コレは、いやなんだこれは、いきなりフラグが発生しましたっけか。

「比喩!」

ぎゅうつと、あらん限りの力を振り絞って抱きしめる女の子は、オレの名前を呼んだ。

「ちよつ、あの、えええつ?」

意味が分からないよ、これ。誰か助けて——いやごめんやっぱ助けなくていいや。

とてもいい匂いがオレの鼻孔をくすぐる。別に香水をつけている

わけでもないのに、なんでこんなに脳を刺激するような匂いがするんだ。これが女の子特有の匂いつて奴か。それだけでなく、これでもかと言わんばかりに膨らんだ胸の感触が思考を停止する。抱きついたらままオレの顔を見上げる女の子は、嬉しそうに口元を緩め、「会いたかった」と呟いた。変態紳士にも遂にモテ期到来か。

「おや、お帰り。今日は早かったんだねえ」

軽めのトリップを満喫していると、いつの間にやら胡桃が店の入口に立っていた。

「こ、胡桃！ この子……知り合いか？」

「くくつ、知り合いもなにも愛すべき私の妹だが？」

「いつ、妹だと？」

そつえばさつき見せてもらった写真にオレと一緒に写っていたのは妹だったな。仲睦まじく手を握っていたつけ。なんだか更に恥ずかしくなってきた。

意地悪そうに微笑する胡桃から、その妹へと視線を戻してみる。

オレの反応を見た胡桃の妹は、何故か眉根を寄せた。

「比念……？」

胡桃とは異なり、妹の方はオレの顔を憶えているらしい。

だが残念かな、オレは彼女の名前はおろか、顔すら憶えていない。写真に写る姿から推理するに、幼い頃は懷かっていたんだろうなとは思っていたが、まさか現在進行形でいきなり抱きついてくるほどの間柄だったとはな、想定外だ。

「こんばんは、えつと……」

次に行く言葉が出てこない。だってオレは胡桃の妹の名前を知らないんだから、なんて呼べばいいのか分からないからな。どうすりゃいいんだ。

「名前、憶えてないの？」

と、そんなオレに向けられたのは、疑念の込められた一言だ。

「あつ、……ごめん」

相手は憶えていて、こっちは憶えていない。逆の立場になれば分

かと思うが、相手に対して申し訳ないという気持ちが罪悪感へと変貌しそうだ。

「じゃあ、約束も？」

「約束？ あー、うーん……」

目が泳ぐ。オレはこの子と何か約束を交わしていたのか。

小さな脳みそ以外何も入っていない頭をフル回転して記憶の引き出しを探ってみるが、それは無駄な足掻きのようだ。まったく思い出せない。

オレの様子を見て、胡桃の妹は明らかに落胆していた。

「訓夏^{くんか}……わたしの名前は、架織乃訓夏です」

哀しそうに瞳を潤ませて、胡桃の妹——訓夏はオレから一步距離を取る。柔らかな感触が遠ざかってしまったことに心残りが生まれてきた。彼女の名前さえ憶えていれば抱きしめ返すこともできたかもしれないというのに、オレはなんて勿体無いことをしてしまったんだ。自らの手でフラグを一つへし折っちまった。

「く、訓夏ちゃんか」

慌てて名前を呼んでみるが時既に遅し、気づけば一定の距離を保たれているじゃないか。

「どうだね、可愛い妹だろう？ この世で私よりも可愛らしい生き物が存在するというのであれば、それは間違いなく、くんかたん以外にはありえないさ。……キミ、惚れる？」

「お姉ちゃん、うるさい」

オレから距離を取る訓夏とは対照的に、胡桃はオレの肩に手を置いて耳元ではそぼそと囁く。とはいえ最後の一言しか声のトーンは小さくなかったので訓夏には丸聞こえだ。案の定、怒られてやがる。そして何故喜ぶ、胡桃。

「へえ、くんかたんって呼ばれてるんだ？」

「忘れん坊には何も教えるつもりはありませんね」

うわ、態度が一転、冷たくなったぞ。フラグへし折ったらバッドエンド直行かよ、おい。

「そ、そっか」

「……ですが、どうしても比念が知りたいのなら、教えてあげないこともありませんが、そもそも比念はわたしのことをくんかたんなどとは一度も呼んだことがありませんから特に知る必要はないと思いますけど、でもそれを言うなら比念が何も憶えていないことの方が問題であり原因に当たるわけですから自覚するべきだと思います」

「え、あー、……うん？」

「ごめん、何を言いたいのがよく分からなかった。オレが、何を、自覚すればいいんだ。」

すぐ横から、胡桃の苦笑する声が聞こえてくる。横目に確認してみれば今にも吹き出しそうになった胡桃の姿があった。こいつはこいつで何がおかしいんだよ。

「というわけでだね、今此処に我が？ごみ屋敷？の住人が勢ぞろいしたわけだよ」

さつきから？何が？を連発している気がするが、だから何がというわけなんだよ。

「ってか、今こいつ自分の家をごみ屋敷って言いやがったぞ。オレは自分が何を自覚しなくちゃなんのか分かつちやいないが、胡桃本人はどうやら架織乃骨董屋がごみ屋敷さながらな現状を把握し、現実から目をそらしてはいないようだ。が、直視しておいてこの調子なわけだから、なお悪いような気がする。せめて掃除してくれ。」

「此処は両親が開いたお店なのだがねえ、見ての通り、架織乃骨董屋の店内はごみ屋敷と化しているさ。近隣住民にもその名で通っているよ」

「一度見れば誰でも納得しちまうわな」

ごみ屋敷とはいっても匂いがきつかったりカラスが集ったりごみを放置したりするわけじゃないだけまだ良心的といえよう。自分の敷地内にしか被害を出していないからな。

「さあて、堅苦しい挨拶は抜きにしようじゃないか」

「ん？」

胡桃はオレのそばを離れて訓夏の横に並び立つ。

悪戯っぽい笑みを浮かべ、ゆっくりと深呼吸をしてみせる。胡桃の性格を理解しつつあるオレは、声に出して指摘するつもりはないが、如何にも大根役者的な演技をしていますよって空気をもし出す。間を置いて、チラツとオレの様子を確認しているのがあからさますぎて笑えない。きっと、指摘すれば嬉々として反応するんだろうな。勿論、面倒だから黙秘だが。

「釣枝比念、ごみ屋敷へようこそ！」

そう言つて、胡桃は右手を差し出して来る。握手か。

「おう、ありがとよ」

罌を仕掛けられているわけでもないのに、オレは素直に胡桃との握手に応じる。その手はとても温かい。そして柔らかかった。……いや、別に興奮はしていない。

次に、視線を訓夏へと移してみる。しかしながら訓夏は、何故だか頬を膨らませたままそつぽを向いていた。

「えーっと、訓夏ちゃん？ 握手は……」

「しません、比念なんか嫌いですから」

ぐはっ、面と向かつて……ではなくそつぽを向いたままだが、女の子から嫌いだなんて言われるのはこれが初めてだ。こいつは精神的ダメージがとんでもないことになるぞ。限界値をあつという間に振り切りやがる。なんかこう胸の辺りがぐぎゃああんって擬音を発しながら締め付けてくるようだ。意味不明とか言つなよ。でもそれだと肉体的にもダメージがあるってことになるな。これから先しっかりとやっていけるのか一抹の不安ががが。

「ちゃん付けは、子供っぽいので拒否なんです」

「あ、そういうことね」

嫌われていないっぽいのでホッとした。……いやいや、違つだろ阿呆が。わざわざオレの名前を呼んだ上で嫌い宣言されたわけだから安堵している場合じゃねえぞ。

「……それじゃあ、訓夏？」

胡桃と同じように、訓夏の名前も呼び捨てにしてみた。すると効果覷面って奴かどうかは分からないが、訓夏は正面を向いてオレと目を合わせる。それから、おずおずといった様子で右手を差し出した。

「……握手、します」

少々強引に、訓夏はオレの手を握る。

いきなり抱きついてきて微笑んだかと思えば、一転して距離を取り、可愛らしい瞳を潤ませてみせる。そして最後には、握手を交わすためにオレの手を握ってくれた。

「胡桃、訓夏。これから暫くの間、お世話になるよ」

「うむ、扱き使うから楽しみにしておいてくれよ、キミ」

まあ、とりあえずは、というわけで今日から架織乃家と言う名のごみ屋敷での新しい生活が始まるわけだ。そう考えると今にも心が弾んでくる気が……やっぱりしないか。

不安だ……。

【幕間（くんかたん劇場？）】

「部屋の片付けもほんの少しばかりではあるが済んだからね、ほらこんなところで立ち話もなんだ、二階に上がるといい」

「おお、そんじゃあお言葉に甘えることにするか」

店内に戻ってドアの鍵を閉め直した後、お姉ちゃんと比念は暖簾をくぐって階段を上っていく。そしてその後を、わたしは無言のままついていく。

あつという間に階段を上りきり、比念は居間に案内された。

「麦茶を持ってくるから、キミとくんかたんは二人仲良くソファーにでも座ってのんびりまったりイチャイチャしながら待っているといいさ」

と言に残し、お姉ちゃんは台所へと足を向ける。とはいえカーテンを引いてしまえば台所からわたしと比念の姿は丸見えだ。たとえ面白いことを期待されていようと、わたしはその期待に応えるつもりはない。だって、バレたくないから……。

きたです北ですキタです着たです喜多ですキタデス！……遂に
来たです！

比念がうちにやって来たです！ くふううつうつ！

神様よくやりました！ ずっとずっとずっと祈って信じて良い子にして待っていた甲斐があつたてもんです！ ありがとうございますです！ いったいどれだけこの時が訪れるのを待っていたことでしょうか！ 今この瞬間に辿り着けた自分を褒めてあげたいです！ いやいや当然のように褒めちぎってやるです！ 自分ッ、よく耐え抜いたですっ、比念がいない間ずうっと我慢し続けていた自分をべた褒めしてあげなきゃこの想いは爆発するに違いないですよ！

うちに同居するって話を聞いた時から毎日毎日胸がドキドキしつ放しで破裂しちゃうようになってましたけどこれでようやく一安心できそう……なわけないじゃないですか！　むしろ比念がそばにいるっただけで心肺停止状態に陥りそうて今からむちゃくちゃ不安と期待で胸が満員電車並みに窮屈になってるですよ！

それよりはは早く座ってください、比念が座るまでわたしが座れないんですからね！

ソファ―？　それとも座布団？　んなもんソファ―一択に決まってるです！

ソファ―に座ればわたしと密着することができんですから考える意味もないし時間も勿体無いですよね？　ああもうっ、さっきはお姉ちゃんの言いなりになるつもりはないとかやせ我慢してみせただけど無理です！　やっぱ無理なんですっ！

比念がそばにいてるだけで倒れそうだからソファ―に座らなくちゃ死んじゃうです！

だからほら早く座れてっんです！　優柔不断な態度がマイナスになるのが比念には分らないですかっ？

『さて、どっちだ？』

……は？　殺しますよ？　いやいきなり意味不明なこと言い出さないで下さいよ、そうしないと比念の寿命が縮む可能性がなきにしもあらずですからね、わたしの手によって！

どっちとか言われなくてもソファ―に決まってますよね？

……え、……あ？　……いや、いやいや、なんで？　ねえなんで？　ななななんで比念はソファ―じゃなくて座布団に座ってんですっ？　わたしと密着するのが嫌だからですか？　ももも勿論そんなわけないですよ？　単に恥ずかしいだけですよね？　分かってます、分かってますからそんなに恥ずかしがらなくても大丈夫ですよ。比念。座布団を選択された以上、仕方ないけどわたしも諦めます。ソファ―に二人仲良く座るのは、ね。

だから我慢して座布団に座ってあげますよ、比念の隣でね！　そ

うつと、さり気なく、感づかれないように座ってあげるんです！
わたしのことを思い出してくれるまでは笑顔なんて見せてあげない
んですから早く気づいてください。わたしだってものすごく辛いん
ですから！ でもまあ座布団についていうのも案外いいかもしれないで
すね、座布団を置く位置によってはソファ―に座るよりも密着する
ことが可能ですし、ひよっとしたら比念は予めこうなることを予期
していたですか？ ううつ、やはり比念は何を考えているのか分か
らないですね、表面は紳士っぽい態度で繕っていますけど、わたし
には既に裏の顔を見抜かれていることをお忘れなく！ 既にあの時、
比念の変態性について理解しているんですからね！ ええそうです
とも、紳士とは名ばかりの変態野郎ですよ！

変態ッ！ 変態ッ！ この変態ッ！

でも好きッ！ わたしも変態になる！ なります！ なってやり
ます！ 比念と一緒になら変態になって変態的な人生を謳歌してみせ
ますとも！

うぬぬうつ、はう、嬉しすぎて息ができません。比念の隣に
座る前に窒息死したら笑えませんかから息を整えなきゃですつ、とり
あえず深呼吸！ 新しい空気を肺の中に、そして比念の匂いをわた
しの体の一部につ！

スーハー、スーハー、スー……ゴフツ、ごほつ、ごふうつ、かは
つ、うつ！ がっ！

ぐっ、微妙に二人きりな空間に緊張しすぎて空気を吸いすぎ、た、
です……。比念が心配そうにこつちを見ているのがなんともいえま
せんね。しかも『訓夏、大丈夫か？』って声をかけてくれるなんて
優しすぎて恥ずかしいじゃないですか比念ッ！

『なんでこつちを見るんですか、バカですか。余計なお世話ですよ』
そしてわたしはもつとバカですか。なんで言いたいことは言えな
いのに酷いことは言えるんですか。それもこれも比念が何にも憶
えていないのが原因に違いありません！

言っておきますがこれは責任転嫁じゃないです、比念がわたしの

ことを憶えていてくれれば問題なかっただけですし、比念はもつと頭の中をかき混ぜて思い出してみればいいですよ。そうすればきつとわたしと再会できたことに頬を緩ませるはずですから！ まったくもう、間抜けなところと朴念仁なところはあの頃とまったく変わリませんね。

……ん、まあ、でも、でも、やっぱりですが、相変わらずかっこいい……です。他の人から見れば普通かそれ以下かもしれないと思いますが、というかむしろそういう風に見えてもらわないとライバルが増えて困ります。もし比念を狙う奴がわたしの前に現れたら、バレないように殺る。ええ、そうです、殺つてやるです！ 主観的に見れば勿論のこと、客観的に見てもかっこよくしか見えないわたしの目は、比念のせいで節穴にされましたか？ 比念色に瞳の色を染められちゃったですか？ 残念？ いいえ、だがそれがいいです！ 比念以外の異性なんかどうでもいいですし興味ないから比念さえ見えていれば万事オーケーですよ！ とにかくわたしから見れば比念は特別で特大級にかっこよく見えるわけですから何も問題はないです！ 全てはわたしと比念を中心に回ればいいです、ていうか回れっ。

そういえば比念に抱きついた時に、ものすごい匂いがわたしの脳を刺激してきやがったですね。……うむう、やはり比念の匂いは反則です、犯罪です、むしろ比念は犯罪者です！ わたしの鼻はちよつとだけ特殊だから比念の匂いに目眩がするだけで済みましてけど、あの匂いを嗅がされたら一般人は一発ノックダウンされちゃうから警察を呼ばれて危うく逮捕されるところだったですよ！

でもなんで？ なんで比念はわたしのことを憶えていないのですか？ わたしの名前を忘れちゃうなんてただの忘れん坊どころじゃないですよ、ぶっ殺しますよ？

一体全体何の冗談かと思って危うく抱きしめたままついうっかり殺したくなっちゃったじゃないですか。ひょっとして比念はわたしに会えない日が続いて遂に頭がおかしくなっちゃったのですか？ それともわたしの顔を見た瞬間に嬉しすぎて脳が一時的に障害を起こ

したとか？ …… うん、どれもありえそうで怖いですね。ていうか比念が鈍感なせいで面と向かって嫌いつて言っちゃったじゃないですかっ！ どうやら本当の愚か者は自分自身だったってわけですね、分かります。思ってもいないことを何故口にしてしまうのですかね、そこら辺の事情について比念はもっとよくわたしを観察してみることをお勧めしますよ。そうですね、たとえばわたしの体の隅々まで知らないところがなくなるまで！ そうです、あんなところまでも比念は触るんです、そしてわたしはただじっと体を震わせて我慢して、でも我慢できなくて比念と！ でもどうせ比念は気づかないですよ、表情を見ればすぐに理解できますから。はあ。駄目だこいつ、早くなんとかしなければですよ。既にわたしがなんとかされているですが。

とにかく悔しいです。絶対に思い出させてやりますから覚悟しておくですよ、比念ッ！

【2・1】

「……えと」

架織乃家の居間に案内されたオレは、さてこれからどうすればいいのかと思案する素振りを見せてみる。居間には、薄型テレビと向かい合うようにコタツを挟み、二人掛け用のソファアが置かれていた。真ん中に穴の空いた座布団がカーペットの上に二つほど並んでいるが、さてオレに突きつけられた選択肢はどちらが正しいか。

一、胡桃に言われたとおり、二人仲良くソファアに座ってイチヤイチヤしてみる。

二、んなことすれば訓夏に十中八九罵倒されるからチキン野郎よろしく座布団だ。

「さて、どっちだ？」

「……何がですか？」

うげっ、本人に聞かれてるじゃねえかバカ野郎。つかテレビでけえな、何インチあるんだよこれ。テレビから三メートルは離れて見やがって下さいって言われるぞ。いやまてよ、ということは距離感的にソファアに座るのが正解ってことになるのか……とかなんとか考えている場合じゃないよな。

「いや、独り言だよ独り言、ははは」

「気持ち悪いって言ってもいいですか？」

「言ってもいいですかじゃなくて既に言ってるよねっ」

嫌いだと言われ、更には気持ち悪いとまで言われてしまった。…

泣いてもいいかな。

「どうでもいいですけど、早く座って下さい」

「うっ、そうだな」

とつとと座れこの優柔不断野郎とでも罵られているかのような気分だぜ。こんな状態でソファアに座れるほどオレの心は強くできていない。たぶん、硝子っぱいね。

というわけでオレが座ったのは座布団でした。チキン野郎で悪かったな、胡桃。

「……では、わたしも」

小声で囁くように言葉を紡ぎ、訓夏は深呼吸をする。

「……ごふっ、かはっ……くっ……っ」

と、何故か咳き込んでいる。っていうかどうして深呼吸を始めたのか意味不明だぞ。

「訓夏、大丈夫か？」

苦しそくに口元を押さえ、訓夏は喉を鳴らした。まさか重い病氣にかかっているなんてことはないだろうな。変態と罵られるだけならともかく、そんなバッドエンドは御免だぞ。

「なんでこっちを見るんですか、バカですか。余計なお世話ですよ」
目を細め、オレの顔を睨みつける。心配したのにこの仕打ち、オレはマゾじゃねえ。

「そ、そっか」

心配する必要がないなら、まあそれはそれでいい。健康な方がいいからな。

ようやく落ち着いてきたのか、訓夏はオレに隠すことなく溜息を吐いてみせる。それから小さく頷いて、何事かを自分に言い聞かせるかのように座布団を手に取った。

「えっ、あの……訓夏？」

驚愕すべきは、その後の不可解な行動だ。

訓夏は、座布団をわざわざオレのすぐ隣に並べ直して、ソファに座るのと同じぐらいの距離感で体操座りする。ドウィウコト、ねえこれどういうこと？　もしかして期待してもいいってことなのか。いやいや何をだよ。オレは変態か。

「……なんですか、麦茶が来るまで黙る甲斐性もないんですか」

「すみませんっ、黙りますっ」

どんなキーワードが訓夏の逆鱗に触れるか分からない現状において話し掛けるのは災いの元になりそうだ。せつかく可愛い子がすぐ

隣に座っているというのに黙っていることしかできないなんて情けない、というよりは勿体無い。おあずけ状態の犬になった気分だよ。一方、麦茶はまだ来ない。訓夏と二人きりによる気まずい空気が居間に流れつつあるわけだが、胡桃はいい加減に台所から姿を見せたらどうなんだ。出待ちしてんじやねえだろうな。オレが我慢できなくなつて訓夏に手を出したところに、シニカルな笑みを口元に張りつけたまま「さあ、そろそろキミを殺そうかねえ」とか言いながら包丁を持ってきたような性格をしている奴だからな。突飛な言動には行動もついてくる。慎重になれ、自分。

とりあえず、話題を見つける。数秒前に黙れと言われたことは都合よく記憶の中から消去することにしよう。手を出すのは我慢する（というよりもそんなことは絶対にしない。何故ならばオレはチキン野郎だからなっ）が、口を出すのは我慢できない。これから暫くは一つ屋根の下で暮らすことになるんだから、今のうちに訓夏と打ち明けていなければ後々の生活に影響が出そうな気がしないでもない。んじやあ、まずは天気の話でも振ってみるか。……うん、晴れですがそれが何か？ で終わるな。ついでに「黙ることもできない屑野郎なんですか」とか追撃されそうだな。もう少し話を膨らませることができるとは話はないものか、たとえば……、ああ、これでもいいか。

「訓夏、今って春休みだよな？　もしかして部活にでも入ってるのか」

すると、訓夏はオレの言葉に肩を揺らした。反応はしてくれないみたいだ。

トレーディング・カード・ゲーム
「……TCG研究会に、入っています」

「TCG研究会？　ひょっとして、カードゲームが好きなのか」
「こくん、と頷く訓夏。……おお、素直な姿を見ると思わずぎゅつと抱きしめたい衝動に駆られるな。だが今は耐えろ、胡桃がどこにいるのか分からない。……いや、台所か。」

「へえ、奇遇だな、オレもTCGは好きなんだよ。訓夏はどのTC

Gで遊んでるんだ？」

焦らずにじっくりと時間をかけるように話題を作り、オレは訓夏の表情を確認してみた。

少しばかり赤みがかった黒髪は、姉の胡桃とはまったく異なる印象を与えてくれる。グラデーションボブって言うのかな、なんか後ろ髪が短くて、前下がりに髪の水が長くなっているのが印象的だ。

俯けば前髪で表情が隠れ、顔を上げれば元通りになる。その髪型がとてもよく似合っていて、存在感を一際際立たせているようだ。無論、容姿端麗なのは一目瞭然で、姉と二人並んで外を歩くだけで注目の的になることは間違いないだろう。ぱっちりとした瞳を長い睫が化粧するかのようには整わせ、目元に力強さも加えている。

日焼けしないのかそれとも肌を露出しないように気をつけているのか、訓夏の肌は不健康な印象を与えかねないほどに真っ白に澄んでいた。そのせいか、それほど運動が得意なようには見えない。ほんの少し走っただけで息が上がってしまい、頬に赤みが差す姿が容易に想像できる。

身長は百四十五から百五十センチぐらいで、年相応と言ったところだろう。胸の膨らみ具合は服の上からでもはっきりと認識できる……でかい、とてつもなく。姉の胡桃が悔しそうに下唇を噛んでいる姿が脳裏に浮かんでくるほどに、めちゃくちゃ大きい。抱きつかれた時にあの胸の感触を味わったが、あれは悪魔の実だ。理性を破壊する殺人兵器だ。

そういえば、まだオレは二人が何歳なのかすら知らないんだよね。幼さが残る顔立ちの訓夏はオレよりも年下だと思いが、胡桃は想像がつかない。話の種に聞いてみるか。

「……奇遇じゃ、ありません」

「え？」

妄想に身を焦がしていると、訓夏が眉を潜める。

なんだ、オレの視線が厭らしすぎて視姦と間違われたか。せめて目の保養と言ってくれないかな、男には必要不可欠な行動だからさ。

はあ、と溜息を吐いた訓夏は、諦めたように言葉を続ける。

その際、学生鞆の中からデッキケースを一つ取り出した。

「?トキの迷宮?ですよ」

T C Gの名前を聞いて、オレは「ああ、」と頷いた。

「懐かしいな、子供の頃に遊んでたよ。昔はずっとカードゲームばかりしてたっけ……」

「……もう一つデッキがありますから、やってみますか?」

思わぬお誘いに身を乗り出しそうになったが、どうにか堪えてみせる。

「あー、いや、遊んでたのは何年も前のことだし、ルールを忘れちゃったからさ」

「そう、ですか。……残念です」

学生鞆からもう一つデッキケースを手にとって、コタツの上に置く寸前で手が止まってしまった。ううむ、悪いことしちゃったかな。でもだからといって遊んでみるわけにもいかないし、苦渋の選択だよな。

「ああ、ところでさ、訓夏は何歳なんだ?」

このままじゃ気まずいので、話題を変えることにしよう。だが、つまらなそうにデッキケースを仕舞いこむ訓夏は、オレと視線を合わせることなく呟く。

「十四歳ですよ。虹ヶ丘中学校の三年生になります」

ということはオレより一つ年下ってことか。

「……比念は虹ヶ丘高校ですよね、四月からわたしと一緒に登校できますよ」

虹ヶ丘は中高一貫校だ。実際にはまだこの目で見たことがないからどんなもんか分からないが、同じ敷地内に校舎が建てられているらしい。多少の不安もあったわけだが、訓夏が虹ヶ丘中学校の生徒でよかった。知り合いが一人でもいると胸が軽くなる。

「おう、そういうことになるな。朝寝坊しないように毎日起こしてくれると助かるよ」

冗談混じりに笑いながら言ってみる。が、

「比喩が、そう言うなら……」

ぼそりと、訓夏は視線を合わせないまま返事をする。

……うん、空耳かな。でなければ今この瞬間、オレは毎朝（胡桃の）妹が起こしに来てくれるフラグを地力で勝ち取ったことになるぞ。よくやった、オレ！

「くくつ、残念ながらくんかたんは私のものだ。キミには渡さんよ、釣枝」

話が盛り上がっているのか否か不明だが、ようやっと胡桃が姿を現した。御盆にコップを三つ、麦茶を持ってきてくれた。こいつ出待ちしてやがったな。

「さあ、私が丹精込めて注いだ麦茶を飲んで疲れを癒すといいさ」

コタツにコップを置いて、胡桃はソファーに腰掛ける。隣には訓夏、そして背後には胡桃がいる。モチ期ゲージが振り切れてないよな、これ。

「戴くよ」

コップを掴み、麦茶を一口。此处に来るまでに随分と道に迷ったからな、喉を潤すことができて一息つけた。

「……飲んだね？ 私が注いだ麦茶を飲んだね、釣枝？」

にへらつ、と表情を緩めたのは胡桃だ。

「飲んだけど、それがどうした？ 意味深な台詞でオレを驚かせるのが目的か？」

「ははは、またまたご冗談を。驚かせるのはついでに決まっているだろう？」

ついでかよ。それとは別に何か目的があるみたいだが、いったい何を企んでいるのやら。

「風の噂という名の私の両親から聞いた話によるとだがね、キミは超常現象的な能力を扱えるらしいじゃないか？」

胡桃の台詞に、オレはコップをコタツに置いた。

「……それは漫画の話か？」

「だとすればキミに質問することは何もないんだがね、嬉しいことに現実の話だよ」

釣枝、この話題に関してはキミが一番理解しているはずだろう、と付け加えて、胡桃は美味しそうに麦茶を飲んだ。

「どうやらこいつに隠し事はできそうにないな。まったくもって食えない性格をしていやがる。誰に似たんだかな。……ああ、そりや胡桃の両親に決まってるか。」

「誰から聞いたって？」

「風の噂という名の私の両親だが？」

「直訳するとお前の両親ってことか」

胡桃の両親が知っているということはだ、つまりオレの両親が秘密を喋りやがったってことになるわけだ。家族以外に知られるのは面倒だからとあれほど口を酸っぱくして言い聞かせたのにこのざまか、がっかりだよ。此処に住まわせてもらっ代わりにネタを提供したとか言われたらグレちまいそうだ。

「それで？ キミはどんなことができるんだい？ さあ、ほら、早く教えたまえよ」

「……サイコメトリーって知ってるか」

これ以上粘っても無駄だ。いずれは言わなきゃならないだろうからな。

胡桃の口撃に観念し、オレは自分の秘密を暴露する。

「ふむ、聞いたことがあるね。とある漫画の主人公がそんな能力を持っていたかな？」

胡桃と訓夏に向き合い、オレは左手の袖を捲くってみせる。左腕には、色や大きさの異なるカラフルな数珠を嵌めていた。

「釣枝、キミにとって最近の流行は数珠ってことを私たちに言いたいのかい？」

「違う、そうじゃない。この数珠がなければオレは頭がおかしくなっちゃうんだよ」

「既におかしい……いや、失敬。……で、何がどうして数珠を嵌め

「ているって？」

今、さらっと酷いこと言いやがったよな、オレの耳は節穴じゃねえぞこんちきしょう。

「サイコメトリーって言ったけど、正確には？接触反応？って能力なんだ。対象となる物体に左手で触れるだけで、その物体に関するデータが映像として脳裏に浮かび上がってくるわけだ。……人間や動物のように命ある生き物には行使することができないんだが、無生物であればどんな物でもオレは能力を行使することが可能だ」

右手で数珠を触りながら、更に説明を続けていく。

「んで、オレが未熟なのが原因かもしれないけど、この能力を行使するのを抑えることができないんだ。我慢ができないってわけじゃない。左手で触れると、まるでそれが自然の摂理であるかのようにオレは接触反応によって視ちまうんだ……」

ある意味、この能力は呪いのようなものだ。こんな能力があるから、オレは人と接するのが苦手になっちまったんだからな。……いや、苦手になったというよりは意図的に避けていたという方が正しいか。

「……では、今もその左手で何かに触れれば、視えてしまうのかい？」

胡桃の問いに、オレは首を横に振ってみせる。今はもう、心配することはない。

「いや、それがそうでもないんだ。何故かっていうと、これを嵌めているおかげだな」

左腕に嵌めたカラフルな数珠がよく見えるように、二人の顔に近づける。

一見、何の変哲もない数珠に見えるが、実はこれ、凄い効力を持っているんだよな。

「何でもかんでも視えちまうせいで気づけばノイローゼ寸前にまで陥ったオレを見かねた両親がな、どっかの神社でお坊さんに頼んで作ってもらったんだよ。その時のオレはまだ五歳ぐらいだったの

によ、視えないようにするには左腕にこの数珠を嵌めろって言われてな、まあ初めは半信半疑だったけど、嵌めてみると、途端に何も視えなくなつて大喜びだ。これでようやく普通の生活が送れるってな？」

二人の前から腕を引き、肩を竦めてみせた。まるで冗談のような話をしているのだから、おどけてみせたくもなる。全てが事実なんだけどもな。

「ふむう、……ということは釣枝、キミはひよつとして、既にサイコメトリーなどできない人間になつてしまつたのかい？」

否定する。それは解釈の違いだ。

「言つたろ？ 数珠を嵌めていなけりや、オレは頭がおかしくなりそうだってさ」

「いやだからキミの頭がおかしいのは言われなくとも知つているのだが？」

「泣くぞこら」

「どうぞご自由に、キミが泣く姿などぞくぞくしそうだねえ」

真面目な話をしているつてのに、ほんの少し気を抜いただけで話が脱線する。オレの隣に座る訓夏は一言も喋らずに黙つて話を聞いてくれてるつてのによ。マジで泣きたくなる。

「とにかく、今まで説明したことをまとめれば理解できると思つがよ、オレの能力は、この数珠を嵌めている時は抑えることが可能……というか完璧に視えなくなつちまつて、逆に数珠を腕から外せば、触れたものを接触反応で視ることが可能つてわけだ」

「なるほどなるほど、つまりその数珠はキミの能力を一時的に封印しているわけだね？」

「そういうことになるな」

ようやく話が繋がつた。冗談でもオレの頭がおかしいだなんて言われたくないつての。

「……ああ、因みにもう二つほど聞きたいのだがね、数珠を外した時のキミは、今でも無差別にサイコメトリーをしてしまうのかい？」

あと、視えるものの有効範囲……つまり時を遡って過去を視ることはどの程度可能なかねえ？」

何かを思い出したかのように、胡桃は質問を追加する。

「いや、それはないぞ。長いこと数珠を嵌めていたのが原因か分らないけどよ、数珠を外してる時に接触反応するには精神を集中する必要があるんだ。それと二つ目の質問についてだが、やろうと思えば一年前でも十年前でも視ることができな。まあ、当然のことながら過去に遡れば遡るほど時間も掛かるし、精神的な負担も大きいがな」

「……ふむ、では特定の場所において特定の記憶を映像として映し出そうとするには、果たして如何程の時間を必要とするのかな？」

「なんか随分と限定的な質問だな？ ……えっと、視たい記憶が初めから決まってるって、その記憶が過去に残っているとすれば、ものの数秒で視ることができるぞ」

「よし、分かった。キミは今日から死ね」

「えっ」

「それが嫌なら死ね。——じゃなくて高校卒業までの三年間、私と共に湯船に浸かり同じ部屋で寝るがいい。さあ、どっちがいいか選択したまえ」

いきなり何を言い出すんだ、こいつは。

オレと会話してる最中に頭の螺子が取れちゃったんじゃないだろうな。

「おい、胡桃。いきなりどうしたんだよ」

「おやおや、説明を所望すると？」

当然だ。説明を省かれても意味が分からない。

出会ってまだ一時間も経たない相手から？死ね？と言われるなんて、想定範囲外に決まってるだろうが。オレはまだ人生を謳歌してないからな、死ぬなんてとんでもない。いつかオレのことを理解してくれる女性と出会えるまで死んでたまるかってんだ。だとすれば後者を選択することになるわけだが……おっと、誰か来たようだ。

ゲフンゲフンツ。

ニヤリと意地悪そうに口角を上げ、胡桃が口を動かす。

「くくつ、まるで空っぽのような頭で考えてもみるがいいさ？　これから先、キミは我が架織乃家で生活していくつもりなのだろう？　つまりそれはだね、私やくんかたんにとって、何時如何なる時もキミに襲い掛かられて純潔を奪われやしないかと冷や冷やしながら一つ屋根の下で過ごさなければいけないという意味になるわけだよ。勿論、仮にキミがくんかたんに襲いかかるものならば、私の全存在を賭けてキミを亡き者にする算段なので問題はないのだがね。但し、たとえキミが私やくんかたんに襲い掛かる度胸も甲斐性もない情けない野郎だとしても、残念なことにキミにはサイコメトリーがある。数珠を外してお風呂に入る時、ちよつとした気の迷いから、その力を乱用でもしてみたまえ？　すると驚くことにキミの脳裏には私とくんかたんのあられもない姿がモザイク無しでこれでもかと映ってしまうわけだよ。さて、キミはそんなことが我が架織乃家において許されるとでも思うかね？　否、断じて許すまじ行為だ！　私のあられもない姿は視られても構わないというかむしろ視るがいいが、くんかたんのあられもない姿を見てもいいのは私だけだ！　だから今から見せてくれくんかたgかpつえざつ」

絶賛、キアラが崩壊してる姉が此処に一名。

そして、姉の口を塞いで窒息死させようと目論む妹が一名。お前から仲いいだろ、絶対。

「つまり胡桃、お前は変態ってわけか」

「そういうことさ」

「そういうことさ、じゃねえよっ」

清々しそうな笑顔できっぱりと肯定するんじゃない。対応に困るだろうが。

【2・2】

説明が終わり一段落したところで、胡桃はブツブツと呟きながら頷いている。時折、口元が緩んでいるのは気のせい、ではないか。絵的に怖いぞ、胡桃。その一方、訓夏はというと——おわっ、オレの顔をずっと見てるじゃねえか。眉間に皺を寄せちゃって可愛い顔が台無しだ、と言いたところだが、不公平なことに可愛い奴はやっぱ可愛い奴のままだ。

「な、なんだ、訓夏？ オレの顔に何かついて——」

「ません。お姉ちゃんの戯言に鼻の下を伸ばす比喩を観察してるだけです」

「うぐっ、面目ない……」

これは軽蔑されちまったかな。いやいや、それ以前に訓夏の名前を憶えていなかった時点でオレに対する好感度は大暴落済みか。

「……お、お姉ちゃんには……譲らないんです……」

「ん？ ごめん声が小さくて聞こえな——」

「死ねと言いました」

「酷いっ」

姉妹揃ってオレを亡き者にするつもりかよ！

こうなったら意地でも胡桃と一緒に風呂に入ってやるんだからな！
……あれっ。

因みに、オレが二人に説明した内容には、二つだけ嘘が混じっている。それは接触反応における対象の有無と、その行使力についてだ。

サイコメトリー可能なのは無生物のみと説明したが、実際には命ある生き物にも行使することができる。……だが、それだけは絶対に言えない。家族にさえ秘密にしている。

——何故かって？ そんなもん、人の心を覗きたくないからに決まってるんだろ。

人間って生き物は、誰しも二つの顔を持っている。表と裏、それぞれに異なる顔を張りつけていやがるんだ。上辺では、如何にも親切で頼りがいがあるって誰にでも優しく接するような万人が認める完璧な人間を演じていたとしても、それは表の顔でしかない。

そう、誰でも裏の顔は酷いもんさ……。

接触反応を好きな時に行使できるようになったオレは、その能力を遊び半分で同じ学校の奴らを対象に何度も試してみた。

バレないように、ちよつとだけでいいんだ。指先が触れるだけで相手の心の中を全て丸裸にできる。何でもお見通しのオレには、もはや誰も隠し事なんてできなかった。

幼い頃、オレの周りにいた奴らもまだガキだったから裏表がない奴も多かった。でもそれは小学校までだ。中学生になったら、クラスメイトはおるか学校中の奴らが全て嘔吐きで腹黒い人間にしか見えなくなっちゃった。

好奇心ではなく、相手の秘密を見つけるのが目的で、接触反応を行使する。その度に、オレはどす黒いものを見せつけられてきた。自業自得だってことは理解しているさ。

好きになった女の子の心の中を覗いてみたくて能力を行使してみれば、表面上ではいつも笑顔を振りまいていたというのに、裏では嫌悪しか生み出さないような素顔を見てしまうことがあった。視なけりゃよかったよ、人の心の中なんて……。

クラスで一番仲がいいと思っていた奴が、オレのことをどう思っているのか知りたくて接触反応を試みたこともあったな。結果は勿論、裏切りだ。心の中ではオレの存在を鬱陶しいと思っていたのを知ってしまった。

まあ、なんだかなと言っても全てオレの責任なわけだし、人の心を覗くような人間が聖人君子であるはずもない。オレは自分自身が人間として腐ってやがることに気づいていたし、同時にそれは誰にでも持ちえる感情であることを悟った。

最後にサイコメトリーしたのは、中学一年生の頃だったかな。そ

れ以降、一度だってオレは人の前でこの数珠を取ったことはない。家族の前でもな。……ああ、いやまてよ、そういえば一度だけ行使したことがあったか。

中学三年生の夏に、紛失物を見つげるために久しぶりに数珠を外して、Hさんに変態紳士と罵られて不登校になったことがあった。入学して間もない時期にHさんの本性を知って、幻滅して、そんな自分自身にも吐き気がして……、今となつてはいい思い出よ、バカらしいけどな。

そしてもう一つ、接触反応の行使力についてだ。

二人には、数珠を嵌めてさえいればオレが接触反応を試みても完璧に視えなくなると説明したが、それは嘘だ。数珠の効力とはつくの昔に無くなつてゐるんだからな。

数珠を嵌めたおかげで、初めのうちは何不自由ない生活を送ることができていたんだが、いつまでもこのままではいられないからな。数珠を外した状態でも生活していけるように、訓練することに決めた。それは数年がかりになったが、感覚的に少しずつ習得していくのが徐々にではあるが実感できるようになった。精神を集中させてみたり無意識の状態でも接触反応を行使しないように限定的に意識してみたり、正直、言葉で説明するのは難しいんだが、とにかくオレは無意識的な接触反応の行使を克服し、そして意識的に行使可能になったってわけだ。つまりは、訓練さえすれば、この能力を鍛え上げることも可能だ、ということになる。……まあ、精神的にも肉体的にもとんでもなく疲労しちまうから最近はやめてゐるんだだけだな。

話の続きだが、接触反応を無意識に行使しないようになった頃、オレが通っていた小学校で？トキの迷宮？が流行り始めた。そういやオレも遊んでたっけな、と思い出して、オレの玩具を没収しては隠す専用の押し入れの中からデッキケースを探し出した。小学生になったオレは身長が伸びて、押し入れの中に上って入れるようになっていた。

だが、何故かな。デッキケースに仕舞ってあったカードの束は、水浸しにでもなったんじゃないかと疑りたくなるほどに皺くちやになっていた。川にでも落つことされたのかもしれないが、対戦には支障がないので我慢するしかない。

クラスメイトの奴と対戦するためにデッキを調整する必要があったオレは、皺くちやのカード一枚一枚をチェックすることにした。が、これがいけなかった。

山札を切る時、どのカードがどの位置にあるのか、接触反応を行使すれば全てを知ることができるんじゃないか、と考えたオレは、それがイカサマよりも卑怯な手であることを知りつつ、実行に移してみる。そして、数珠の紐が切れた。

紐を結び直しても、数珠の効力は戻らなかった。きつと、紐が切れた瞬間に効力を失ってしまったんだろう。

それから月日が経ち、オレは高校生になったが、数珠の紐が何故、切れたのか。その理由は今もまだ不明だ。まあ、日常生活する上で不便なことはなくなったから、どうでもいいんだけどな。

オレの家族には、数珠の効力が切れたことを教えているが、同時に数珠がなくとも能力を抑えられるようになったことも知っている。で、見た目以上に影響はなさそうなのが救いか。それも全てはオレが一つ目の嘘を吐いている故、なんだけどさ。

「釣枝、キミがどういう人物なのかこれで理解することができた。

……なるほどね、だから我が両親はキミの同居に賛成したんだねえ」
頷き終わったのか、またもや意味深な言い方で胡桃が興味を齎す。
こいつと一緒にいるだけで反応に困らないな、まったく。

「どういう意味だ」

「我が架織乃家がアンティークな品物を暴利な値段で売りさばく骨董屋もとい、ごみ屋敷であるのは周知の事実だが、それは表の姿でしかないのだよ。……実はだね、此処には怨念やら呪いやら悪霊やらが取り憑いた曰くつきな品物がたくさん眠っているのさ」

胡桃はオレの説明に対抗するかのように、あくまで現実っぽさを

欠いた話を進める。

「両親はそういった類のものが好物でね、海外へと出向いては購入し、家に持ち帰ってくるのさ。そのほとんどが元々は高価な品物なわけだが、曰くつきのせいで買い手がつかない。そのままでは売り物にもならないし経営を悪化させるだけだが、両親は？ 被い？ を生業としていてね、憑いているものを被い、高額で売りさばいていたってわけさ」

くくつと喉を鳴らし、オレの反応を窺う。訓夏は相変わらず黙ったままだ。

信じてくれと言われても、はいそうですか、と簡単に信じることはできないのが今の世の中だ。被い師の存在など一般的じゃねえからな。でも、オレは自分自身が非日常的能力を持っていることを知っている。

オレが口を挟まないでいると、胡桃はもう一言だけ付け加えた。

「だがね、我が両親は今現在、海外にいるわけだよ。曰くつきの品物を求め、どんな遠い場所にも足を伸ばしてしまうのが原因さね。品物を見つけては送ってくれるのはありがたいんだが、残念なことに私とくんかたんでは被いができない。……でだ、憑いた品が徐々に増えていき保管するのも大変になっていたところに釣枝、キミが来たわけだよ」

なんだか境遇が似ていやがる。オレの両親も海外で仕事をしているから、家ではいつも一人だった。こいつらは二人いるけど、それでもやっぱり親がいない状況ってのは何かと不安になるだろうな。

「……つまりオレは、お前らの両親に代わってそいつらを被えってことか？」

「うむ、その通りだね。家賃や食費などは心配せずともいいよ、キミはただ被い続けてくれればいいからさ」

「いや、オレにできるのは接触反応であって、被いとかはできないぞ」

家賃は両親が払ってくれるから問題ないし、毎月僅かだが仕送り

をしてくれるから食費の心配をする必要もない。両親様々だ。それに加え、オレはこの能力を人前で使いたいとは思わない。

万が一、数珠を外している時に胡桃や訓夏に触れてしまったら、オレは此処にいることさえ拒んでしまっただろう。それは嫌だ。……だが、

「その点は問題ないさ。接触反応によってどんなものが憑いているのか、キミには視ることが出来るのだろうか？　だとすれば被う方法が異なるだけであって、解決策を導き出すのも容易だと思うのだが」「簡単に言ってくれるなよな、……ていうか二人はどうなんだ？　両親が被い師ってことは、似たようなことができるんじゃないのかよ」

被いができなくとも、オレと同じように別の能力を持っている可能性がないわけではないはずだ。両親が被い師を生業としているんだからな。

「残念ながら私は無力で、か弱い人間さ。何もできないよ。……だが、」

ちらり、と視線を横に向ける。胡桃の視線の先には、訓夏がいた。「くんかたんには、ある！　私が持ち得ない最強最大の超人的能力が！」

「夕飯抜きにします」

「だがくんかたんは地球上でもっとも私に優しい人間であるからして夕飯の代わりに夜食を用意してくれるはず！　問題はない！」

「夜食も抜きですね」

「格なる上は冷蔵庫の中に仕舞ってあるくんかたんのお菓子をこっそり食べ——」

「食べたら一生涯口を利きません」

「ごめんなさい」

胡桃に続けと言わんばかりに、訓夏がけん制する。

聞き役に徹していたのに、話題の中心に自分が来ると同時にこれだ。まさか胡桃の口からごめんなさいという言葉が聞けるとは思わ

なかった。妹には頭が上がらないのか。

「なあ、訓夏はオレと同じような能力があるのか？」

しゅん、と反省の色を見せる胡桃ではなく、訓夏に直接訊ねてみる。

訓夏はあからさまに嫌そうな表情を浮かべ、胡桃を睨みつけた。

目線をそらしつつ、胡桃は反論する。

「一つ屋根の下に住んでいれば、いずれはバレてしまうさ。今のうちに言っておいた方が、くんかたんとしても都合がいいのではないかな？」

「……う」

齒がゆそうにスカートの裾を掴み、顎を両膝につけて俯いてしまふ。

「あ、いや別に言いたくないなら無理しなくても——」

「匂い……、です」

オレの言葉を遮り、ぼそりと呟く。

「……匂い？」

「嗅覚が、普通の人より……少し、いいです」

犬か、と突っ込みそうになったがなんとか我慢する。

俯いてはいるが、頬は真っ赤に染まっている。気持ちは分からないでもない。自分の秘密を他人に教えるのは恥ずかしいからな。ついさっき、オレも経験したところだ。

「えっと、それじゃあ……被いとかはできないのか？」

「できません。……けど、一度憶えた匂いは決して忘れることはありません。たとえそれが九年と四十八日間前の匂いでも、です」

「そ、そっか……」

被いには役に立ちそうにないか。というか何が九年と四十八日前なのか分からない。

「……まだ、気づかないんですね」

「ん？」

オレの反応を見るや、またもや訓夏は落胆してしまう。なんだな

んだ、オレはまた訓夏を傷つけるようなことをしてしまったんだろうか。

「さて、釣枝。被いができればあつという間に憑きものを被えるだろうが、キミにできるのはサイコメトリーだからね、どんなものが憑いているのかを確認し、どうすれば被うことができるのか、その答えを導き出すのは手間が掛かるだろう。これから暫くは苦勞をかけるとは思うがよろしく頼むさね」

「んー、そういうことなら仕方ないか。やれるだけやってみるよ。

……それにしてもなんで胡桃だけ何もできないんだろうな？」

「ぴきぴきー、それは暗に私を貶しているのかな？」

笑顔が怖いぞ、胡桃。あと、擬音を口で言うな。

「ああ、すまん、そういう意味じゃなくてだな、胡桃の両親は被いができるんだろ？ それに訓夏も……その、匂いに敏感？ なわけだし……」

名前を口にすると、訓夏の体がピクリと反応し、髪が揺れた。

「こほんっ、その件についてだが……私にはまだ愛すべき異性がないからだろうね」

「……は？」

訓夏を気にした素振りを見せず、胡桃は唇の両端をニンマリと上げた。

「架織乃家の裏には岩屋山^{いわやさん}という裏山があつてだね、そこには岩屋神社があるのさ。地元民でも滅多に足を運ばないほど寂れた神社なのだが、どうやらそこで異性同士が愛を誓い合つと、岩屋神社の神様とやらが祝福してくれることを風の噂と言う名の昔話を両親から聞かされたことがある。つまり我が両親はそこで愛を誓い合つたがゆえに抜いとしての力を授かったのだろうね」

岩屋神社か、なんか聞き覚えがあるような無いような、記憶が曖昧だな。

「ふーん、……え？ ということは訓夏にもその、そういう相手がいるってことか？」

オレと胡桃、二人の視線が訓夏へと集中する。

訓夏は顔を上げて、小さく頷いた。

「います。……でも、秘密ですよ」

「まあ見付け次第、私が殺すつもりなんだがね、ははは」

「さり気なく怖いことを言うなよな、胡桃」

視線をオレに向けたまま言わないでもらいたい。

「釣枝、そういうキミこそサイコメトリーというなかなか優れた力を持っているじゃないかね。ひよつとして、キミも岩屋神社で愛を誓い合ったことがあるんじゃないか？」

そう言つと、今度は二人の視線がオレへと集まる。

「岩屋神社か、……確かに、昔行つたことがあるような気がするんだが……でもオレにはそんな相手はいないしな」

「ふう、溜息しかでません……」

訓夏が項垂れた。^{うなだ}何故だ。

【2・3】

「では早速だがキミの力を拝見させて頂こうじゃないか。血湧き肉躍るとは、まさにこのことか！　と思いたくなるほどゾクゾクさせてくれたまえよ？」

「期待するのは勝手だけどな、別に大したもんじゃないぞ」

ガツカリされても困るだけだしな。

オレの話を聞いているのかいないのか、胡桃はソファーから腰を上げ、鼻歌混じりの声を上げながら部屋を出て行く。いったい何をするつもりなんだかな。オレの能力を見るんじゃないのか。

胡桃がいなくなり、今度こそ真正銘二人きりになってしまったわけだが、これも僅かな間に過ぎない。間違いなく、胡桃はすぐにも戻ってくるはずだ。

長すぎず、かといって短すぎない、微妙な待ち時間が非常にもどかしい。場を持たせるために再度、適当な話題を訓夏に振ってみー……。――

スンスン……。

「……ん？」

これから毎朝、パジャマ姿の訓夏がオレの部屋まで起こしに来てくれるのか否かの真偽を確かめるべきか、悶々としながら頭を悩ませていると、隣から鼻を吸る音が聞こえてきた。……いや、そうじゃないな。これは匂いを嗅ぐ音だ。

お行儀良く隣に座っているであろう訓夏を、そっと横目で確認してみる。

「――ヒッ」

訓夏の顔が、すぐそばにあった。

驚きすぎて悲鳴を上げちゃったぞ、おい。

「あ、……う」

何をしていたのか不明だが、不可解な行動を取っているところをオレに目撃された訓夏は、恥ずかしそうに頬を染め上げていく。

「えと、……あー」

何をしてたんだ、と問いかけてみたい。

だがそれを躊躇わせるかのような瞳を向ける訓夏は、必死になつて何事かを訴えかけている。今にも泣き出しそうな表情を見ていると、ついつい苛めたくなってしまうが、これは好きな子に意地悪する男の子の心理と同じか。

「——おや、くわあい私の妹を苛めているのはどこのボンクラかな？」

と、そこに胡桃が姿を現した。いつの間に戻ってきたのか不明だが、せめて足音ぐらい響かせてほしいね。先ほども然り、姉の方は出待ちするのが趣味なのかとお尋ねしたい。

「オレはボンクラじゃねえよ。……で、何を持ってきたんだ？」

視線の先に映るのは、小さめの巾着袋が一つ。

「この中にはだね、私にとってくんかたんの次に大切な宝物が入っているのさ。それを今からキミに触れてもらい、何が入っているのかを当ててもらおうと考えているわけだよ」

「当てるだけでいいのか？ それだと接触反応しなくてもいいじゃねえか」

「触れるだけなら外側から見ても分かるだろう？ だから構うことはないさ」

言われてみれば確かにその通りかもしれない。中身に触れるだけで、まさぐらないようにすればいいだけの話か。触れた瞬間に能力を行使するだけで正解に辿り着くだろうな。

単純に、純粹に、明解に、二人がオレの能力について納得できるだけのものを見せ付けるだけでいい。それで満足しようがガツカリしようがオレには関係ない。まあ、余所余所しくなったり避けられたりするの精神的に厳しいけどな。

「よし、それじゃあ……」

数珠を外し、巾着袋の中に手をつっ込んだ。
さて、いったい何が視えるのやら。

「わくわく、ときどき、そしてにやにや」

「……あのさ、期待してくれるのはオレとしても嬉しいんだけどよ、胡桃は口を閉じてくれると嬉しいぞ」

「おや、キミの口で強引に閉じるだと？ そんなことが法律で許されているとも思っているのかい？」

そんなことは誰も言ってねえ。

「それともキミが指摘する？ 口？ とは、上ではなく俗に言う下の……キミ、早く私を止めたまえ。暴走すぎてキミに襲い掛かるかもしれないじゃないか。はあはあ」

「暴走したまま、どうか遠くに行ってくれ」

想像力が豊かすぎるぞ。そのほとんどが変態的な方向性なのが残念だが。

「乙女にこんなことを言わせるとはキミも罪を作りたがる男なのだね」

もういい、とりあえず無視だ。これ以上長引くと訓夏に睨まれかねない。いや、既に全力を持って睨まれているな。殺気が漏れてますよ、訓夏さん。

改めて、紛れた気を指先へと集中させてみる。

「……ん、これは……脱衣所か？」

巾着袋の中には、何か布状の物が入っていた。

まず、それを手で掴み、それから能力を行使してみると、とある記憶がオレの脳裏に映像として流れ込んでくる。

脳裏に浮かび上がってきたのは、脱衣所だった。

「誰か……着替えて……お、おお……、おおおう……こ、こいつはでか……って」

はっ、と我に返る。真っ赤な鼻血が垂れてた。
オレが視た記憶の断片、それは訓夏がブラジャーのホックを外す

シーンだ。

「くく……、くくくつ、視たな釣枝。この代償はキミの体で払ってもらってからそのつもりでいたまえよ？」

計画通りと言いたげな笑みを張り付けているのは、胡桃だ。

「おまえつ、最初っからそのつもりだったな！」

「いやまさか本当に視えるとはねえ、キミが鼻血を吹き出すまでは真偽が定かではなかったわけだが、初心な反応を見ているとどうやらキミの力は本物らしいね」

オレを試すのは構わない。証拠を見せるために能力を行使したんだからな。だが、だからと言って、視せていいものと悪いものの区別ぐらいはちゃんとつけてくれ。嬉しすぎるぞ、この野郎。もっと視せやがれ。

「お姉ちゃん、比念は何を視たんですか」

「知りたいかい、くんかたん？」

「知らせるなっ」

知られたら訓夏に抹殺される。

「……比念はわたしに隠し事をするんですか」

「ぐつ、いや……そういうつもりじゃ、なくてだな、世の中には知らない方がいいことも多少なりとも……ある、とオレは考えているわけであって……」

「釣枝が視たのはだね、くんかたんの脱衣シーンだよ」

「うおおいこら待ていっ」

速攻でバラしやがったな、裏切者がっ。

「わたしの……です、か？」

ゆっくりと、訓夏が視線を向ける。

怖い。この緊迫したかのような空気が肌を突き刺しやがる。

「あ、ええええと、その……だな、うん……、視ました。ごめんなさい」

殴られるのを覚悟し、齒を食いしばる。

しかしながら訓夏の手が出ることはなかった。

「そう……、ですか。わたしの……脱衣シーンを……比念が……」
あれ、なんかそれほど悪い反応じゃなさそうだな。

と思ったのも束の間、オレと胡桃から注目を浴びていることに気付いた訓夏は、途端に眉根を寄せ上げて一言付け加える。

「比念は変態ですね」

なにこの落差。

ああそうだよオレは変態だよ悪いかこんちきしょーめ。

変態と罵られるのは慣れてるんだよ胡桃のバカ野郎が。

「たっ、確かにオレは訓夏がブラジャーのホックを外すところを視ちまったださ、だがこれはあくまでも胡桃に言われたから視ただけであって視たかったわけじゃないんだよっ」

「酷いです。見たくないのに、視たんですか……」

言い方が悪かったせいで、また訓夏を傷つけちゃった。どうすりゃいいんだよ。

「言い訳なんて見苦しいね、釣枝。真っ正直に認めたらどうだい、ボクは変態という名の紳士だよ、ってさ」

「オレはどこぞのクマ吉かつ」

今にも手錠を掛けられそうな雰囲気だ。

「ところでお尋ねしたいのだがね、キミはどこまで視たんかい？」

「……え、え？」

言葉に詰まった。

確信に迫ろうとするな、この話はこれで終わりにしてくれ。でないとオレが架織乃家から追い出されてしまうだろうが。

「巾着袋に入れていたのは私の宝物でもある、くんかたんのブラジャーなわけだが、キミが視たのがくんかたんの脱衣シーンということとはつまりくんかたんがブラジャーを取って上半身裸になったところも視たのでは——ああっ、ちょっと何をするんだいくんかたんっ、それは私の宝物なのだから取り上げるなんて殺生なことをしないでくれっ」

「お姉ちゃんも変態です」

「ふふふ、くんかたんはそれが最高の褒め言葉だということを理解しているのかな？」

開き直るな、変態め。

「言っておくがな、鼻血を出して集中力が切れたせいで、特に見たかったところは視れなかったからな」

「特に見たかったところを詳しく」

訓夏と共にブラジャーを引っ張り合い中の胡桃が追撃を仕掛けてきた。くそっ。

口は災いの元とはよく言ったものだ。

「それを言ったらオレに残された最後のプライドが崩壊しそうだから拒否だ！」

「キミにプライドがある……だと……？」

「なにそのオレにはプライドの欠片すらないですよ的な視線は！？」
そんな目で見ないでくれっ。

「で、くんかたんの脱衣シーンを視た感想はどうだい、釣枝？」

「でかかつダゴフツ——」

言い終わる前に、訓夏の蹴りがオレの顔面を捉えたのは言うまでもない。殺人的な威力の蹴りをありがとう、訓夏。おかげでオレのプライドはズタズタです。

「うぐぐっ、鼻血を出してるのに顔を蹴るなんて酷いぞ」

「変態が悪いんです。比喩は変態です」

「そうだぞ、釣枝。変態が全て悪いのだよ」

「そもそも誰のせいで鼻血を出してるのか説明してもいいかつ？」

四つ角を作りそうになりながら胡桃に文句をつける。それと胡桃お前にだけは言われたくないぞ。何せオレとお前は変態なんだからな。

とりあえず顔面が痛い。それと鼻の骨が曲がってないか心配だ。つていうか訓夏も座った状態からよくもまあオレの顔面に蹴りを入れることができたよな。普通に驚いたぞ。

ただ、その際、見えてしまったものに関しては口を堅くすべきだ

ろう。一点の穢れすら見当たらない純白のアレを、オレの目に焼き付けてやったんだからな。やはり脳裏で見るよりも直に見た方が何倍も有難味がある。

訓夏め、全力で放った蹴りの代償は大きかったということを後悔するがいい。

「比念はお姉ちゃんよりもド変態です」

ふしゅー、ふしゅー、と恥ずかしそうに息を荒げつつ、語尾を強めに言い捨てる。その姿がまたなんとも言えず可愛らしく、もっと叱りたいと一瞬ながら考えてしまった。

……女の子に詰られるのに快感を覚えたら人生終了か？

いや、ただのMだから何ら問題はないよな。多分。それもどうかと思うけどさ。

胡桃は自分で自分の肩を抱き寄せ、嬉しそうに身を擦る素振りを見せつけている。お前は何がしたいんだよ。弄りたいのか弄られたのか分からない奴だな。

「——ああ、因みにだが釣枝。今までに説明したことはほぼ全ての作り話だから忘れるがいいよ」

「……は？」

言い忘れていたことを思い出したかのように、ポンツと手を叩き、胡桃が口を開いた。

「我が両親に被いの力があるのは事実だがね、だからと言って曰くつきの品々を安価で買い取り暴利を貪っているのも偽りではないのだよ。そしてくんかたんが匂いに敏感であることも、更には私が変態淑女であることも確かなことだねえ。さて、今の説明でキミは私が言いたいことを理解できたかな？」

自分のことを堂々と変態淑女であると公言してはばからない姿勢は評価してやろうじゃないか。オレが変態紳士で胡桃が変態淑女、そして訓夏が……犬、かな。

「……えっと、つまり全て事実ってことか？」

「今、言ったことはね。くくっ……」

意味深な台詞でオレを惑わせないでくれ。裏がありそうで怖いだろうが。

するとここで、訓夏がぼそりと呟いた。

「神社のくだりも……事実、ですよ」

「ん？ 神社がなんだって、訓夏？」

「耳が腐りやがれて言いました」

「ひいっ」

恨めしそうにオレを睨みつける胡桃の妹の考えてることが全く理解できませんっ。

「ついでに言うのだね、私がキミと共に寝食及び入浴を共にしても構わないというのも嬉しいことに事実だから両手を上げて喜ぶといよ」

「それは遠慮しておく」

非常に残念だが、訓夏に軽蔑されたら此処に居づらくなるからな。

……くっ。

いや待てよ、訓夏には既に軽蔑されていると言っても過言ではないわけだ。それはつまりオレが胡桃と共にあんなことやこんなことをする羽目になっても今更どうってこともないわけであって……いかんいかん、どうやら本格的に頭がおかしくなってきたらしい。刑務所の中からクマ吉が手招きしてやがる。

「そつえば二人の両親の代わりに被いをするってのは事実なのか？」

「あ、それは嘘さ」

「嘘かよっ」

手間が掛からずに助かったけど、拍子抜けしそудだ。

「でもよ、それだと曰くつきの品物を被うことができないんじゃないのか？」

「安心したまえよ、ワトソンくん。我が両親は被い済みの品々しか送ってこないのさ」

それを早く言え。無駄にオレを驚かせようとしゃがって。

接触反応でどうやって抜えいいのか真剣に考えそうになった時間を返してもらいたい。

「まあ、中には抜い忘れた品が無きにしも非ず……だがね？」

胡桃は片目を閉じ、唇の端を意地悪そうに上げる。

もう嫌だ、こいつの相手をするのは疲れたよ。今日はぐっすりと眠らせてくれ。

「さて、キミのおかげで中々に有意義な時間を過ごすことができたね。心から感謝するよ、釣枝。くくくつ、いやご苦労さま」

「ただの暇つぶしかよ」

「何か問題でも？」

悪びれた様子もないのが胡桃らしい、か。

「サイコメタラーくん、これから先、探し物がある時には宜しく頼むよ」

「メタラーじゃなくてメトラーだからな」

「ははは、どうでもいいよ」

オレの秘密を暴露したつてのに、このあしらわれ方はあんまりだ。所々に棘のある言葉をぶつけるのは姉も妹も同じってことかよ。オレの心を傷つけるのは止めてくれ。でないとマジで一緒に風呂に入つてやるからな。

……と、ここでオレの腹が鳴る。

「おや？ オナラのような音が——」

「オナラじゃねえっ」

朝ごはんを食べてから何も口にしていなかったからな、そろそろ昼飯を食べておきたい。

「比喩、お腹空いたんですか」

腹の音を耳にし、訓夏が問いかけてくる。

「ああ、昼飯はまだ食ってないからな。ここら辺で飯を食えるところってあるか？」

「あります。一つだけ」

一つだけか。案外少ないけど一つもないよりはいいだろう。

今後、その飯屋にはほぼ毎日お世話になりそうだと。

「丁度いい、今から案内してくれないか？」

「分かりました……。それじゃあ、ここに居てください」

「おう、分かった。……ん、どこに居ろって？」

「ここに、です」

居間に、ってことか。

いやいや、何故に居間にいなくちゃなんのだ。

「……わ、わたしが……作りますから」

すると、訓夏は座布団から立ち上がり、深呼吸をした。

「訓夏が？ それってつまり、手料理ってことか？」

「それ以外に何がありますか？」

きつめの口調で言い返され、オレは口を閉じて首を横に振る。

「だから、少しの間……待っててください」

待っててください、だと？

やばいな、訓夏が可愛いすぎて出し損ねた鼻血が噴出してきそうだと。

「くんかたん、大切な姉の分も宜しく頼むさ」

「比喩に手を出さないなら、考えます」

条件にオレが混ざってますよ、訓夏。

「うぬう、どうにか譲歩できないかね？ 釣枝に手を出せないとい

うのは私にとって非常に辛いものがあつてだね……」

ブツブツと呟きながらソファから腰を上げ、訓夏の後を追って

台所へと向かった。

可愛らしいカーテンで遮られた先から、架織乃姉妹のじゃれ合う声が聞こえてくる。主に姉の方が妹にちょっかいを出す形式なのが姿を見ずとも耳だけで判断できるのは何故だろうな。乱入するのは難しそうだ。

「前途多難だな、こりゃ……」

とりあえず今は昼飯にありつけるのを心待ちにしておこうじゃないか。

訓夏の手料理を、な。

【幕間（くんかたん劇場？）】

【幕間（くんかたん劇場？）】

「うぐぐつ、鼻血を出してるのに顔を蹴るなんて酷いぞ」

「変態が悪いんです。比念は変態です」

「そうだぞ、釣枝。変態が全て悪いのだよ」

「そもそも誰のせいで鼻血を出してるのか説明してもいいかつ？」

むふふふつ、わったしつの、靴下つに！ 比念の鼻血がついた
ー！

ひゃっほー！ きたよー！ かみさまありがとーですー！

このお礼は比念の命令には絶対に従わなければならない権利で手を打ちましょうじゃないですか。いやそれってどう考えてもご褒美ですよ？ ええそうですね、わたしにとっては特大級のご褒美ですからっ！

比念はわたしに何を命令するんですかつ？

オレの匂いを嗅げって言われるんですかつ？

勿論構いませんよっ！ 嗅がせてっ！ 比念の匂いを嗅がせて！
むしろ嗅いでっ！ わたしの匂いを身体中余すところなく嗅ぎ回してえっ！

でもダメですっ、そんなに顔を近づけたら恥ずかしすぎて真正面から比念の顔が見られなくなるじゃないですかっ！ でもでもそれでも比念は嗅ぐんですよね？ 無理矢理わたしの匂いを嗅ぐんですよねっ？ ええっ、我慢しますよ！ それが比念の望みなんですからっ！ だから匂いはっ、わたしの匂いはっ、お気に召しましたか

っ？

そしてわたしの体はお召し上がりになりますかっ！？

……はあっ、はあ……っ、ふう……っ、興奮しすぎて体が火照ってしまいましたね……。

こんなわたしを見て、比念はまたよからぬ妄想をするんですよね？ そんなことは想定範囲内なんですからね。思う存分にわたしを使って妄想するといいですよ。そして妄想だけで我慢できなくなったらその時は遂にわたしに手を……手をっ、手を出すんですね！今夜は比念が夜這いに来るかもしれませんからベッドに横になって待機！ ということはつまり栄養のあるものをたくさん食べておいた方がよさそうですね、いろんな意味で！

鼻血を出したせいで鉄分が足りなくなるかもしれませんから、その代わりに私の真心と愛情と匂いがふんだんに込められた手料理で悩殺してやるです！

顔を蹴るのはさすがにやりすぎかなーって思いましたけど結果オーライですよね？

だって比念は優しいはずだもん。わたしに対する感情も接し方も態度も全て全て特別だから問題ないですよねっ？

にしし、この靴下は洗わないで大事にとっておかなくちゃですね。お姉ちゃんに見つからないように、いつものあの場所に……っど、その前に、比念の血の匂いをまだ生暖かいであろう今のうちに嗅いで脳髓を刺激しておきたいですね。

お姉ちゃんは……よしっ、居ませんね。

わたしの部屋の中には勝手に入らないように言いつけてありますから一安心です。

これだと思う存分に比念の血の匂いを嗅げるってもんですっ！

くん……くんくん……はすはす……あふあっ、くんかくんか……

っ。

……もう、だめ。……の、のうみそが……溶ろけそう……です……
……んっ、あ……っ。

いかんです、いかんです、こんな素晴らしいことをしてる場合じやありませんでした。

比念の匂いを堪能するのは寝る前になってからにしましょう。いやでも寝る前に堪能したら興奮して眠れなくなる可能性大なのが気になりますね。……うっっ、でも今はとにかく我慢です。今現在、わたしには比念をデートに誘うという人生最大級の試練が待ち受けているんですからねっ！

これで比念との距離をぐぐつと縮めて、手を繋いで、肩を並べてはすはす……じゃなくてっ！ わたしとの約束を思い出させてやるですよ！

待っててくださいです、比念ッ！

必ずや、わたしのことが好きで好きでどうしようもないほどの変態であった頃の比念を取り戻してみせるんですからねっ！

……くん……くんかくん、か……、……はっ！？

【3・1】

【三章】

——彼女の手料理。

それは、彼女を持つ男性にとって至福の時を約束するであろう神の御業。

——彼女の手料理。

それは、彼女を持たない男性が彼女を持つ男性に憎悪を抱かせるに十分な調味料^{スパイス}。

——彼女の手料理。

それは、三次元に愛想を尽かした人間が二次元の女性により振る舞われるであろう偶像。

——では、彼女ではない女性の手料理とは如何に？

「……も、もどかしい」

女の子が手料理を振る舞ってくれるなんて、オレが今までに生きてきた人生の中で初めての出来事だ。だからこそ、この待ち時間もどかしい。

そわそわすればいいのか、胸をドキドキさせればいいのか、はたまた台所に立っているであろう女の子に「なあ、訓夏。キミの手料理は確かに食べたいさ。でもオレが本当に食べたいのは……訓夏、キミだよ……」とか変態紳士的な腐った台詞をプレゼントすればいいのか、全くもって理解不能だ。訓夏の反応が気になるところだが、わざわざ殴られるようなことを言うのもMすぎるので止めておこう。だが、このままじっとしておくのも辛い。台所の様子を見に行ってみるか。

勝手に台所に入って怒られそんな気がしないでもないが、まあなんとかなるだろう。

「おい、訓夏」

スツとカーテンを横に引いて、中を覗いてみる。
するとそこは桃源郷——じゃなくて修羅場だった。

「くっ、うぬう……やるねえ、くんかたん。わたしの攻撃をかわすとは……」

「おい胡桃、何をしてんだよ」

訓夏の邪魔をする姉を一名発見。この調子だといつまで経っても昼飯にありつけないぞ。

「……ん、おや？ 釣枝じゃないかね。キミは何故ここに入ってきたのだね？ 今、キミが足を踏み入れた場所は女性にとつて戦場なのだよ？ そんなところに変態が入ってきてはダメじゃないか」

「いや、訓夏が料理を作つてるところを見てみようかと——って、変態は関係ねえだろうが。っていうかお前、つまみ食いしてんだろ、口元に食べかすがついてるぞ」

「ごちそうさまでした。そして再びいただきます」

「いただきますするなっ」

胡桃が手を出しては、訓夏が手を叩く。

もう一方の手で料理に手をつけてつまみ食いすれば、訓夏が足を踏む。その繰り返し。

なんだこの堂々巡りは、しかも作つては食べられてるから一向に料理が完成しないぞ。

「それ以上食べると太りますよ、お姉ちゃん」

「くんかたんの手料理で太らされるのなら本望さ。今私良いこと言つたね、キミ？」

「同意を求めるな、つまみ食い野郎が」

おかずを用意するのを諦めた訓夏は、フライパンに熱して油を引き、米と卵、それからコンショウをパウルに投入する。訓夏流では、フライパンで直接炒めるようなことはせず、米の一粒一粒を卵と絡める作業から入るらしい。更にマヨネーズを加えていく。オレが自分でチャーハンを作る時はいつもまとめて炒めていたからな、なん

だか新鮮だ。

卵を絡めたご飯をフライパンに投下し、チャーシューを細かく切ったものと、ネギを入れて炒めればあつという間に完成だ。

「さあて、お箸と小皿を用意して……っ」と

「食べる気満々だな、おいっ」

いくらなんでも食い意地が張りすぎだ。もつと自重してくれ。

「手掴みの方が絵的にエロくてよかったかい？」

「そういう問題じゃないっての」

「油によつて存分にテカったお米さんを親指と人差し指と中指でほんの少しだけ摘まんで、そのまま口元へと持っていく仕草にキミは興奮するのだろう、違つかね？」

まずはオレに否定をさせろ。そしてそれ以上勝手にオレの印象を操作するんじゃないやねえ。

「訓夏の邪魔になるだろ、向こうでオレと一緒に大人しくしてろ」

「それはダメです」

と、訓夏が口を挟んできた。

「比喩は、お姉ちゃんと二人きりになったらダメです」

「くくくつ、私の身を案じてくれているのだね、くんかたん？ 確かに私と釣枝が二人きりにでもなってしまうえば、私の魅力に我慢の限界が訪れあつという間に襲われてしまうだろうさ。だがね、私は既にこの身を捧げる準備はできているのだよ。釣枝以外の男には今までに指一本触れさせてこなかったからねえ」

「むしろオレが襲われそうな気がするんだが……」

「はは、面白いことを言うね、キミは。……まあ、それもアリか」

胡桃も少しは否定してもらいたい。まさか本当に襲うつもりなのか。案外有り得そうで怖いぞ。仮に現実に起こってしまうえば、オレはついに童貞を卒業することに——とか言ってる場合じゃねえな。

胡桃は顎を上げ、摘まんだ米粒をゆっくりと口元に近づけていく。それを舌で絡め取り終わると、今度は油に塗れた指先を丹念に舐め回す。そう、丹念に……。

レロレロ、レロ、レロレロレロ……。

……変態だ、マジで変態だよ、こいつ。オレなんか比じゃねえぞ、人前でそんな真似ができるなんて変態以外の何者でもねえつ。オレの貞操の危機がすぐそこまで来てる！

「……釣枝、唾を飲み込んだりしてどうしたのだね？　もしかして興奮したのかな？」

「……えっ」

指摘されて初めて気づいた。

オレは胡桃の仕草に翻弄され、生唾を飲んで胸を高鳴らせている。……うん、オレも変態だよ。だから一緒に檻の中に入ろうぜ、胡桃。

「できました」

胡桃との変態的な応酬を続けていると、お皿を持った訓夏がオレと胡桃の間に割って入る。どうやらいつの間にかチャーハンを作り終えていたらしい。体を張って胡桃のつまみ食いを制した甲斐があったってもんだ。

「おおう、こりやまた美味そうだな」

とてもいい匂いがオレの鼻孔をくすぐる。

腹の具合もそろそろ限界だからな、早く食べてしまいたい。

訓夏の背中を追って居間へとＵターンし、再度座布団に腰を下ろす。隣に座るのは勿論、訓夏だ。胡桃はどこにいるのかと言うと、まだ台所にいるのか？

「ふふつ、気が利くお姉さんが麦茶を注ぎ足しに華麗に参上」

麦茶の入ったボトルを手に姿を胡桃が見せる。もう片方の手には幾つかの氷が手掴みで握られていた。

「ほら、ちよいと失礼するよ」

氷を二つずつ、コップに投入。更に足りなくなつた麦茶を注ぎ足していく。つまみ食いは勘弁してほしいが、確かに気が利くな。その反動が酷すぎるのが難点だが。

「サンキューな」

「スプーンは……くんかたんが持ってきているね」

はふう、と息を吐き、訓夏が頷く。っていうかオレの分だけしかないのか。

「二人は食べなくていいのか？」

「食べさせてくれるのかい？」

「比喩が……わたしにですか？」

「よし、まずは二人とも落ち着こうか」

二人揃って勘違いしないでくれ。突っ込み役つてのは疲れるんだよ。

相変わらず、すぐ隣には訓夏が座っている。オレが訪ねてきたせいで、未だに制服のまままだ。正座をして両こぶしを膝の上に乗せている。オレがチャーハンを食べるのを今か今かと待ち続けている姿が愛らしい。抱き着きたいね。

胡桃はというと、今度はソファーには座らずにオレの左隣に座り込んでいる。床に敷いたカーペットが柔らかいから座布団なしでも問題ないってことか。しかし胡桃、スカートを穿いたまま体育座りをするのは目のやり場に困るから今すぐに態勢を変えてくれ。

「ほら、早く食べたまえ。なんなら私が食べさせてあげようか？」

「自分で食べるっての」

訓夏と胡桃に挟まれて、ジッと見られたまま、オレはスプーンを手にする。異様な緊張感が主にオレの右に座る訓夏から発せられているのは誰の目にも明らかだ。因みにもう片方はニヤニヤと唇の端を釣り上げている。

「それじゃあ、いただきます」

「い、いただかれます」

訓夏の言葉を合図に、オレはチャーハンを口にした。

……うん、美味い。オレが作るチャーハンに比べて、米が固まらずにパラパラになっているのが特徴か。

作り方をほんのちよつと変えるだけでこんなにも食感が異なるんだな。お店で出されても十分に満足できる仕上がりだ。

「……どうですか」

緊張した面持ちで、訓夏が喉を震わせる。

「美味いよ。凄く」

「そ、そうですね……。よかったです」

率直な感想を告げると、訓夏は満足そうな笑みを浮かべた。笑顔を見るのはファースト・コンタクト以来だ。怒った顔も可愛いけど、やはり笑顔が一番だな。

「くんかたん、私の分はまだかね？」

「材料なら台所に置いてますよ」

さり気なく酷いな、訓夏。

「そっぴや二人はお腹減ってないのか？」

オレだけが飯を食ってるのも悪い気がしないでもない。

「学校でお弁当を食べてきました」

「私はくんかたんのお菓子をこっそり食べたわけだがまだお腹が減っていったたくんかたん何故叩くのだね」

とりあえず、二人とも今はまだ食べなくても大丈夫ってわけか。

胡桃が横からちょっかいを出してくるのをかわし、これでもかとはぶつけてくる訓夏の視線を意識しつつ、五分も掛からずに全て食べ終えてしまった。

「ふう、美味かったよ。ありがとな、訓夏」

「どういたしまして……です」

恥ずかしそうに身を振りながら訓夏は返事をする。いちいち仕草が可愛いな。

訓夏は皿とスプーンを持って立ち上がると、台所へと持っていく。後片付けまでもらって申し訳ないくらいだ。

「キミ、満腹になったのなら次は架織乃家の中を案内しようか」

「お、そりゃいいな。宜しく頼むよ」

胡桃に言われ、オレは頷いた。

今日から架織乃家にお世話になるわけだし、色々と知っておいた方がいいこともあるだろう。訓夏と胡桃の部屋に間違っ入っちゃ

わなないように気をつけなきゃならないし、それにオレの部屋……が
あれば嬉しいが、果たして空き部屋があるのかな。まあとにかく、
実家から持ってきた荷物をなるべく早いうちに解いておきたい。

「……お姉ちゃん、比念を案内してください。わたしは、その……
、ちよつと用事がありますから、部屋に戻る必要が……あるんで
す」

「ふむ、任せよう。この恩はくんかたんが身に着けた下着類で手
を打ってあげるさ」

「脳みそ腐りやがれです」

捨て台詞のようなものを吐いて、訓夏は居間から出て行ってしまった。

残されたのは、オレと胡桃の二人だ。

「……くく。さあ、邪魔者は消えたよ？」

「反応し辛いことは言わんでいいからな」

胡桃の発言全てに突っ込みを入れるのは訓夏並みの熟練度でなければ不可能だ。オレにはまだ荷が重すぎることにしておきたい。ぶ
っちゃけ疲れるからな。

「釣枝、キミはもっとノリがいいと思ったが……というか女性に興味
がないのかね？ もしや男が好きだとでも——」

「オレは女が好きだっ」

つい先ほど出会ったばかりの女の子の前で、オレはいったい何を
堂々と女好き宣言してるんだ。バカか。否、変態か。

「それは安心した。キミが男好きでは私も困るからね」

「そこはむしろ困らんでいい」

どうせオレをからかって遊ぶつもりに違いない。現在進行形でこ
の調子なんだからな、これからの日々が思いやられるぞ。

【3・2】

「ほら、私の後についてくるといいよ」

胡桃に手招きされ、オレは廊下に出ると、階段を下りて一階へと向かう。

「一階の半分は店舗になっているから説明はいらないね。暖簾に仕切られたこちら側に、トイレと洗面所、それとお風呂があるからね」
架織乃家は、横に大きい。店内だけでも随分と広いのに、更に居住スペースが存在する。

「トイレは二階にもあるから、好きな方を使えばいいよ。……余談だが、私は主に一階のトイレを、そしてくんかたんは二階のトイレを使用する頻度が高いからね」

必要あるのか否か不明だが、二人の補足情報をオレに伝えて何を期待していやがるのやら。トイレは覗かないぞ、トイレは……。え？
「あと、こっちにはもう二部屋あって、一つは店番に疲れ切った私が火照った体を存分に休める秘密の部屋で、もう一つは物置になっているねえ」

「ふーん、秘密の部屋か……」

ツツコミはいれない。

どうせ言い返されちまって、からかわれるのは目に見えているからな。

「気になるかい？ なんなら覗いても構わないのだよ？」

「既にドアを開けて中に入ってる奴が言う台詞か」

「ああ、違う違う。私がこの部屋で休んでいる時に覗いても、言っているのさ」

「遠慮しておこう」

此処に住んでいるのはオレと胡桃だけじゃない。一つ屋根の下に訓夏も住んでいるんだ。

そんな危険な状態で胡桃の姿を覗きに行く勇氣は残念ながら持ち

合わせていないんでな。

「まあ、興味があつたらいつでも覗きに来るといいさ」

肩を竦める胡桃は、部屋の中に入ってこいと手招きをする。

秘密の部屋の中は特に大したことはない。四畳半の和室だ。

「もう一つだけ説明を付け加えるのだね、この部屋は奴隷の……じ

やなくてバイトの子が着替えたり休憩したりする部屋でもあるのさ」

「今お前、さりとヤバいこと言つたよな」

「聞き間違いだと思うよ？ 奴隷なんて一言も言つてないさ。バイ

トが奴隷だなんて」

「二度も言つなっ」

聞き逃したかったが、耳に残った言葉がオレの口を動かしてしまつた。くそっ、胡桃と話しているとツツコミを入れるのがデフォルトになつたかのように錯覚しちまうぞ。

「一階はこれで全部だね。さて、次は二階の案内をしようじゃないか」

胡桃は一階の案内を手早く済ませ、階段を上っていく。架織乃家を案内するのが楽しいのか、胡桃の足取りは軽そうにみえた。

「簡潔な説明だな……って、おうっ」

オレは、その後ろ姿を見上げ——で、見えた。

一度目は暖簾に阻まれてしまい覗きに行くことすら躊躇われたイベントだったが、胡桃の奴め、不意打ちとはなかなかやってくれるじゃねえか。口調に似合わぬ可愛らしい色と形と柔らかそうな張り具合を一瞬とはいえ堪能させてもらったぞ。あくまでも事故でな。

短いスカートを穿くから、こんなことになるんだ。自業自得だ。

あくまでも事故だぞ。

「事故だ、事故。……うむ、オレは悪くない」

口元がにやけるのを強引に押し隠し、伸びた鼻の下に力を入れる。あら不思議、あつという間に不自然な顔の出来上がりだ。

「……？ どうしたんだい、キミ」

不審な行動はしていなかったが、オレの呟き声が聞こえたんだろ

う。

階段を上る途中で胡桃は振り返ると、上から見下ろしながら問いかけてくる。

……だから、その立ち位置がヤバいんだよ、胡桃ツ。これ以上オレを喜ばせるなっ。

「い、いや……、なんでもない」

そう、これは決して大したことじゃないんだ。ただ、ちょっとした偶然により見えてしまったただけのことであって、気まぐれの神が与えたもった産物なんだよ。

胡桃には気付かれていないというのがまた、素晴らしいシチュエーションへと誘ってくれる。……うん、これは事故だが、やはりオレは変態だ。とつくの昔に自覚してい——、

「スカートの中が見えていることなら初めから気付いているから構うことはないさ」

「って、気付いてんのかいつ」

「見せてたからね」

「痴女か！ お前は痴女かつ！」

偶然を装ってわざわざ見せてもらっていたにも関わらず、ガキみたいにはしゃいでたのがとてつもなく恥ずかしい！

誰かタイムリープをして数秒前のオレの存在を消し去ってくれいっ！

「しっかりと目に焼き付けたかい？ くんかたんの脱衣シーンと比べれば些か刺激分が劣るだろうが、直に見るのはやはり心躍るものがあるのではないかな？」

変態は変態の思考を読み取る能力があるんじゃないやねえだろうな、おい。

「オレにはお前の考えが全く読めねえっ」

「そりゃそうさ、私という人間の全てを知る者は私以外には存在しないのだからね」

「意味が分らんことを言うんじゃないやねえっ、っていうか何故見せた

！ お前も一応女の子なんだから恥ずかしくないのかよ！？」

「ふむ、確かにキミ以外の人間に見られたのであれば恐らくは殺人を犯す自信があるだろうね。だがかしながら今回の相手はキミだ。羞恥心など、嬉しさと快感によって無限にカバーすることが可能さ」

「そこはカバーするなつ、むしろ恥ずかしがれよっ」

胡桃だつて女の子なんだから羞恥心ぐらい持つてくれ。そうでなければこっちの楽しみが半減す——ゴホッ、ゴホンッ、おっと危ない、本音が出そうになった。

「しかしまあキミが私を女の子として意識してくれることが判明しただけでも十分な収穫があつたよ。これで私も一安心だね」

言い終わるや否や、右手の親指を立ててみせる。

何が一安心なのかお尋ねしたいところだが、更に話が捻じれそうな予感がするので止めておこう。それが無難だ。というか、そうする以外に道は残されていない。

スカートの中を二度見するような度胸を発揮することなく、少々俯き加減で階段を上る。

「キミがくんかたんの手料理を堪能したのが居間で、隣にあるのが両親の部屋だね。そしてその横に二つある部屋のうち、こちら側が私の部屋さ。夜這いする時はくんかたんの部屋と間違わないように気を付けるといいよ」

「しないから問題ない」

と思つておこう。理性の歯止めが掛けられるか不安だがな。

オレは二階の廊下で立ち止まり、胡桃の説明を受ける。変な態度を取つてみせたり人をおちよくつてるかのような口調で喋ったりすることがなければ、万人が認めるであろう可愛さを持ち合わせているつてのにな。……しかしまあ、それだと胡桃の印象ががらりと変わったちまつて、今みたいに気を遣うことなく会話することもできなかったんだろうけどよ。

「二階の案内は以上で終了となるね。さて、最後にキミの部屋だが……」

二階には、居間と架織乃家の両親の部屋、それから架織乃姉妹の二部屋があった。

ざっと見たところ、オレの部屋になりそうな場所はどこにも見当たらない。つまりこれは胡桃か訓夏との同部屋フラグが発生したってことに――、

「一階の物置部屋を自由にするといいよ」

「あ……、そう」

こちらを振り向き、顎でオレの後ろを指し示す。

「おや、キミの部屋があるというのに、あまり嬉しそうではないね？ ……ふむ、ひょっとしてキミは私と同じ部屋で眠ることができるとでも思っていたのかな？」

「断じてない。全くな」

勿論、嘘だが。

「くくつ、それは安心したよ。やはり一つ屋根の下に住む者同士、相手の部屋に忍び込むという危険を冒しながらも逢瀬するのが楽しいのだからね」

「オレの部屋には鍵をつけてくれ、襲われる危険がある」

「合鍵を作ってくれるのなら喜んで」

「それじゃ意味がねえだろつ」

恥ずかしさを紛らわすため、怒ったふりをしてみせる。そしてオレは心の中で自分自身に呆れ果てる作業を繰り返す。つくづく勿体ない男だな、ってな。

こんなにも素晴らしい状況には今まで生きてきた中でたった一度もお目に掛かれたことがないってのに、それを断り続けるだなんて阿呆か。変態紳士としての名が廃るってもんだ。据え膳食わぬは男の恥だぞ。

胡桃は、明らかにオレを誘っている。仮にそれがオレをからかっているのだとしても、数年振りに顔を合わせた人間に対して、そんな態度を取ることができるだろうか。

好意を抱いてくれているから、そういう態度を取っている、と考

えた方が利口だ。

胡桃が何故オレにそのような感情を抱いているのかは知らんが、このまま拒否を続けていれば、いずれは胡桃のアプローチもなくなってしまう、オレは一つのフラグをへし折っちまうことになるだろう。

そんなことが許されるものか。……否、断じて許されるわけがない。

だが、残念なことにオレは普通の人間ではない。接触能力という力を持っている。それが枷となり、オレに積極性を無くさせている。接触反応によって、人が持つ記憶の断片を盗み視るようなことができるなければ、オレは今頃、変態として開花していたのかもしれない。それはそれで嫌だけどな。

だが、如何せん今のオレは人の心を覗き視ることが可能だ。たとえ工口いことが好きな年頃とはいえ、接触反応によって色んなものを視ることができるっていうのに、自分自身に言い聞かせておあずけ状態を続けているわけだから、むっつりスケベになるのは確定事項だったと言えよう。……自分で言ってる情けなくなるけどな。

表面上では紳士を装ってはいるが、根底にあるのは変態そのものだ。これまでのやり取りも全ては胡桃の調子に合わせて上辺だけで対応していると言っても過言ではないだろう。

ただ、自分が満足できればそれでいいとか、そんな考え方は到底できそうにない。

だからこそ、接触能力を持つようになったオレは、人に接する時に一定の距離を保つように心がけている。あまり近づきすぎて仲が良くなったとしても、実際にはオレのことを嫌っているのかもしれないって考え出すと止まらなくなるからな。

人と仲良くなって人を疑うようになるぐらいなら、仲のいい奴なんていらぬ。それがオレの出した結論だ。

「ほら、キミの部屋を見に行かなくていいのかい？」

胡桃は階段の前で立ち止まり、足先をパタパタとさせている。こ

いつは無駄に素振りが多いよな。あまりにも多すぎるから全てが演技に見えるが、ワザとらしすぎるのが逆に演技なんじゃないのかと疑ってしまう。

「さっき一階に降りた時に教えてくれりゃいいのに……」

「それだとキミと共にいる時間が数秒間短くなってしまうじゃないか」

これ見よがしな言い方をする胡桃は、オレの返事を待つことなく階下へと向かった。

足取りが軽く見えるのは気のせい……ではない。こいつは本当に何を考えてるのか分からない奴だよ。

「……つたく、仕方ねえな」

と言いつつも、オレは口元を緩める。

勿論、接触反応を行使すれば、胡桃の本心を知ることが可能だ。

嘘か真か、真実は呆気なく明かされるだろう。

だが、接触反応を行使しなければ、訓夏や胡桃の裏の顔を知ることもない。姉妹揃って何を考えているのかよく分からないけど、それならそれで構わない。人間は嘘を吐く動物なんだから、それが当たり前なんだしな。

他人と仲良くやっていくには、知らないことも沢山あった方がいい。だからオレは現状維持で問題ない。

「やあ、来たね。待ちくたびれたよ」

「ほんの数秒間、待ってくれてありがとう」

「どういたしまして。お礼は私の部屋にキミを招待する権利で手を打とうか」

ああ言えばこう言うのが得意な奴だ。

オレは部屋の中に入ってみたが、物置部屋と称する割には整理整頓されていて、実家から持ってきた荷物を入れてもまだ余裕がありそうだ。勉強机と本棚、ベッドまで用意されている。不自由することとはなさそうだな。

「綺麗な部屋じゃないか」

「そりやそうさ、ここに置いてあつたものは全て売り場に出してしまつたからね」

「なんですと!？」

どうだ、嬉しいか、と言いたげな表情でオレを見上げる。反応に困るから止めてくれ。

「え、えと……、オレの部屋を用意するためにそんなことして大丈夫なのか？」

架織乃骨董屋の店主であろう胡桃の両親は、商品の買い付けのために海外へと出向いているらしい。それなのに、たとえオレのためとはいえ、勝手に商品を店先に出してしまつていいものなのか。後から怒られても責任取れないぞ。

「はて、キミはもう、私が言ったことを忘れたのかい？ 此処の責任者は私なのだが」

「は？ ……いや、あれつて嘘じゃなかったのかよ」

そういや、確かに胡桃は自分が責任者だとか言つていた。だがあれは自己紹介のついでに、その場のノリで付け足したんだろうと理解していたんだがな。

「なんだね、未成年が責任者をしては……、純真な心の持ち主である私が最高責任者をしては不服だとも言いたいのかな？」

「分かつた、分かつたから言い直すな」

架織乃骨董屋の店主は、訓夏と胡桃の両親に決まっている。そんな先入観を持っていたオレが悪かつたわけだ。まあ、普通なら誰でもオレと同じ結論に達すると思うけどな。

「これから三年間、この部屋はキミのものだ。私の体と共に好きにするがいいよ」

「うん、この部屋だけ好きにさせてもらうな」

ツツコミを入れずにかわそう。それが無難だ。

これにて架織乃家の案内が終了した。

胡桃にからかわれながら説明を受けたのが原因か、主に精神的な面で疲れが溜まつた。

だがこれで、ようやくと一段落だ。

「胡桃、オレの荷物を運んでもいいか？　いつまでも店内に置きっ放しにしてるってのも邪魔だろうし……」

と、安堵したのもごく僅かな間で、荷を解く作業が残っているのを忘れていた。

「ああ、勿論だとも。ここはキミの部屋なのだから何を持ち込もうがキミの自由さ。たとえば私とか――」

「よし、荷物取ってくる」

「おいキミ待ちたまえ」

早足で暖簾をくぐるオレと、同じく早足でオレの背中を追いかけてくる胡桃。訓夏がいなければ胡桃の暴走が止まらない。……いや、訓夏でもこいつを止めるのは無理か。

「どれどれ、キミの荷物の中を早速確認しようじゃないか」

確認と言いつつ、早速邪魔をしてくる。

せめて部屋に持っていくまで我慢することはできないのか。

「やめれ」

「エロ本は入っているのかな」

「入ってねえよ」

「え……何故？」

「何故じゃねえっ、入ってなきゃおかしいって面^{つら}でオレを見るんじゃない！」

オレは悲しいです。

「ところでキミ、私はまだ感想を聞いていないのだが」

「感想？　なんのだよ」

「それは勿論、美人姉妹の姉の方に架織乃家を案内されて非常に充実した一時^{ひととき}を過ごすことができたか否かについての感想に決まっているじゃないか。まさか黙秘するような甲斐性の無さを発揮することはないだろうねえ？」

なるほど、そういうことか。

しかしまあ、無駄に長い言い回しをする奴め。

「此処はいいところだと感じた」

「それだけ？」

胡桃は物足りなそうな視線をぶつける。

まだ、何か言うことがあるだろう、と自身を指さしながら何度も頷きかける。

「……はあ、そうだな、可愛い訓夏と美人な胡桃と一つ屋根の下で過ごすことができて、オレはとても幸せですよ。……これで満足か、胡桃？」

「よく出来ました。はなまる」

「そりやどうも」

満足げな笑みを浮かべる胡桃を見やり、オレは肩を竦める仕草で対抗する。それぐらいのことしかできない自分が情けない。一度でいいから、胡桃を口で言い負かしたいよ。

するとそこに、第三者が姿を現す。

「——今の、本当ですか？」

「うおっ、訓夏か。いつからそこにいたんだよ」

いつの間にか、オレのすぐそばに訓夏が潜んでいた。……表現としてはおかしい方に聞こえるかもしれないが、それは決して間違っていない。足音も、呼吸する音も、全く聞こえなかったからな。訓夏、お前は忍者か暗殺者か。^{アサシン}

「……？ わたしは、いつも比念のすぐそばにいますが……」

嬉しいんだけど、地味に怖い。

「それよりも比念、今の言葉は本当ですか？」

「ん？ 今の言葉って言う……ああ、訓夏と胡桃と一つ屋根の下で過ごすことができて幸せだ、って台詞のことか？」

「違います。そうなんですけど違います。大事な部分を省かないでください」

大事な部分ってなんだ。訓夏は何が言いたいんだ。

訓夏はというと、口をもごもごさせて、今すぐにでも答えを言いたそうにしている。なんか可愛いな。見てるだけで幸せになれそう

な気分だ。……ん？

「……あつ、思い出したぞ。可愛い訓夏と、美人な胡桃！ これだな、訓夏？」

その通りです、と何度も頷く。

カクンカクンツ、と壊れた玩具みたいにずっと頷く。……だ、大丈夫か。

「二度も私のことを美人と呼ぶとは……キミ、さては私に惚れたか？」

「惚れてないから」

胡桃の口撃をさらりとかわし、オレは訓夏に視線を向ける。

「で、それがどうしたんだ？」

「……う、なんでもないです」

オレの言葉を合図に、ピタリと頷くのを止める。

なんだ、オレはまた機嫌を損ねるようなことを言ってしまったのか。

「釣枝、キミは本当に愚か者だね。……だが、それでいい。キミはそれでいいのさ。私のくんかたんは誰にも譲ることはできないのだからね」

かつこいいことを言っただつもりなのか、胡桃は口の片端を上げて笑ってみせる。

いや待てよ。そういえばさっき、訓夏は大事な部分が抜けていると言っていた。それはつまり、訓夏と胡桃に？可愛い？と？美人な？という単語を付け加えることであって……。

「あ……、ひょっとして、可愛いって言われたかったのか？」

「死ぬがいいです」

「いぎやあああつ」

足のつま先を踏まれた。手加減なく、思いつきりだ。

手足が出る訓夏と、口が達者な胡桃に、今からでも変更させていただきたいっ。

「さあて、今日はキミも長旅で疲れただろう。私と二人っきりでお風呂にでも入り——」

「遠慮しておくっ」

脈絡のない話題を振ってくるんじゃない。しかもこんな状態で訓夏を怒らせるようなことを言うな。訓夏の視線が物凄く突き刺さっているのをどうかしてくれ。

「それは残念だよ。ではキミの背中を流すだけで我慢してお——」

「言い回しを変えただけで内容がまるで変わってねえだろうがっ」

訓夏、頼むから胡桃を止めてくれ。

「それも嫌かね？ ……ふむ、なるほど。つまりキミが言いたいのは、私とくんかたんと三人で体を洗いっこしたいというのだね？ だが如何せんくんかたんの体、もとい全ては私のものだ。キミには譲らぐふっ、くんがっ、たんっ、……腹を、殴るとは……っ」

訓夏のボディーブローが炸裂した。

胡桃め、妹を怒らせた罪をその身を持って味わうがいい。

「ぐ、くうっ、だがこれも……くんかたんによる仕打ちと考えれば、脳内細胞的に快感へと変化させることも私にとっては容易い……と……だと、いいなあ……あふっ」

片膝をつき、ギブアップ。時間差で痛みが襲ってきやがったな。

「つていうかオレの足を掴むなっ」

顔を上げることすらできずに、胡桃は首をふるふると頼りなさげに横へと振ってみせる。

そこまでしてオレをからかいたいのか。その執念というか情熱には誰も勝てそうにない。

「比喩、お姉ちゃんほつといて散歩に行きます」

くいっ、とTシャツの裾を引っ張り、更には袖口を掴んだ訓夏は、暖簾の向こう側へと連れて行くとする。……え、オレも一緒に行

くのかよ。

「いや、あのよ、まだ荷物を――」

「散歩に、行きます」

「はいっ」

こちらを振り向きもせず、有無を言わさぬ口調でオレの意見を却下した。極力、訓夏には逆らわないようにした方が良さそうだ。怒らせなければ可愛いんだけどな。いや勿論、怒ってふくれっ面になった訓夏も可愛かったがな。……オレは何を言ってるんだ。

「く、くんかたん……、私をおいて、男と……出て、行くというのかね……っ」

「……っ、お姉ちゃんは無言で寝ててください」

最後の最後まで、胡桃は役者魂を前面に押し出しながらオレと訓夏を見送った。

なんていうか、まあ、胡桃が訓夏のことを大好きだったのは十分理解できたよ。そして訓夏も、恥ずかしそうにしつつ胡桃のことが好きだったことも同じく。……だよな？

「――で、此処は何処なんだ？」

訓夏に手を引かれて、と言っても実際に手を繋いだわけではなく、袖口をガッチリ掴んで離さない訓夏に引きずられていた、と表現した方が正しいか。兎にも角にも、今現在のオレは、お昼時とは到底思えないほどに真っ暗な森の中にいます。

「森の中です」

「うん、そうだな。見れば分かるぞ」

淡々と返事をしないでくれ。言葉数が少ないと心細いじゃないか。こんな森の中で二人つきりになると、まさに襲ってくれと言っているようなものだ、とか考えてしまいそうになるオレはやはり変態か。だが残念だな、オレは確かに変態だが、変態の中でもエリート

中のエリート、変態紳士なんだ。いきなり女の子を襲うような真似は多分しないぞっ。

「……比念、よだれが出てます」

「はっ!？」

いかんいかん、危うく手遅れになるところだった。

「あと少し、我慢してください。もうすぐ着きますから」

好からぬ妄想を抱いたオレに危機感を抱いたのか否かは定かではないが、訓夏がぼそりと呟いた。散歩に行くと言っていたが、どうやら目的地があつたらしい。

真つ暗な森の中に、な。

それからもう暫く無言で歩き続けていると、やがて祠のようなものが見えてきた。

「なんだあれ？」

「神社です。岩屋山の」

「岩屋さん? ……ああ、岩屋山ね、此处が」

一瞬、あの神社には岩屋さんという方が住んでいるのかと勘違いした自分を過去に消し去り、すぐに言葉を返す。

「……ふう、着きましたね」

鳥居をくぐった先には、お世辞にも立派とは言えない神社が待ち受けていた。

此处に来るまでに感じたことだが、参拝客は皆無に近いつてことかな。石段には苔が生え、ぽつぽつと備え付けられた電燈も寿命により明かりを灯さなくなっている。

だが、澄み切った空気が疲れを癒してくれるような気がした。地元の人たちからすれば、岩屋神社は穴場的なものなのかもしれない。密会だとかデートだとかするにはもってこいの場所と言えよう。現にオレ自身も訓夏と二人っきりでデートのようなものをしているわけだからな。訓夏的には現状をどのように解釈しているのかは知らないが。

「此处に、比念を連れてきたかったんです」

「オレを？」

はい、と頷き、訓夏は神社に近づいていく。

訓夏はふすまを開いて、スカートのポケットから可愛らしい柄の財布を取り出す。

参拝する人が少ないのか、賽銭箱は奥に仕舞われていた。その隣には、小さなお盆の上にむき出しになったおみくじが無造作に置かれている。人がほとんど訪れないとはいえ、不用心にもほどがあるぞ。

「さあ、一緒にお参りしましょう」

訓夏は賽銭箱へと歩み寄り、五円玉を握りしめた手を緩める。硬貨が弾かれる音が聞こえ、賽銭箱の中へと消えていく。オレも訓夏に習い、財布の中身を確認。あいにくと五円玉を切らしていた。一円玉を五枚で許せ。

「ほつ、と」

小銭が弾け合い、オレの生活費が五円減った。この代償は高い……わけないか。

一円玉を五枚と引き換えに、オレは訓夏と二人つきりになる権利を得たんだから大満足だ。胡桃の悔しがる顔が目に見えかぶようだ。

訓夏が鈴を鳴らし、二人揃って参拝する。たった五円で願い事をするのも図々しいかもしれないが、さて何をお願いするべきか。

とりあえずこれから三年間、架織乃家を追い出されることなく平和な日々を過ごすことができるように祈っておこう。

「……比喩、思い出しませんか？」

隣から声が聞こえ、オレは目を開ける。

訓夏がオレの横顔を見上げていた。

「思い出すって……何をだ？」

「あの日交わした約束ですよ」

訓夏の口から出てきた言葉、それは？あの日交わした約束？のことだ。

その台詞が何を意味するのか、さすがのオレもすぐに理解するこ

とができた。

今日、訓夏と再会した時、約束を覚えていないのかと言われた。きつと、訓夏はそのことを言っているんだろう。

「あの日、比念とわたしは、此処で約束を交わしたんですよ」

「此処で……」

過去にオレはこの神社に来たことがあるらしい。

言われてみれば確かに見覚えがあるような気がしなくてもない、とはやはり言えないか。

残念なことにオレの海馬は訓夏との約束をきれいさっぱり忘れちまっているようだ。

「……す、すまん」

面目ない、と頭を垂れる。その姿を見やり、訓夏は眉根をひそめた。

これでまた訓夏のオレに対する評価のようなものが急降下することになる。既に地面すれすれまで落ち切っているかもしれないが、そこよりも更に下へと落ちていくだろう。

「本当に……何も思い出さないんですか？」

オレが嘘を吐いているんじゃないかと疑っているのか、もう一度だけ問いかけてくる。

だが、何度も聞かれようが申し訳ないことにオレの答えは同じだ。「ああ、本当に思い出せないんだよ……」

子供のころの記憶というものは非常に曖昧だ。忘れてしまっても、決しておかしくはないだろう。しかしだ、仮にも約束事を交わしたわけだから、それなりに記憶が残っていても不思議ではないわけだが、何故全く思い出せないんだろうか。

「……もしかすると、比念が持つ力に関係があるのかもしれないね」

「オレの力って……接触反応のことか？」

こくりと頷く。その表情は至って真面目で、訓夏と交わした約束を覚えていなかったことを怒ってもいない。

「わたしには、特に何もありませんでしたけど……、比念は力が強すぎて、数珠で抑えてたって言うてましたよね？ 代償とか、副作用とかで……バ力になったんじゃないかと」

「真面目に話を聞いていたのに、最後にバ力って言われるとは思わなかったぜ」

「それは事実ですし……」

「だから真面目な顔でさらっと言わないでくれっ」

女の子の前だけど泣いてもいいかな。悲しすぎて視界が潤んできた。

「思い出せないなら……仕方ないですね」

はふう、と可愛らしい溜息を吐いて、訓夏は視線を逸らした。

交わした約束を思い出しさえすれば、訓夏にこんな顔をさせることもなかったんだよな。

そう考えると自分が憎い。全治一週間ぐらいの傷なら負つても構わないから、多少強引にでもいいから思い出しやがれ、バ力野郎。いったい何のために脳みそが詰まってるんだよ。

「でも、それならそれでいいです」

くるりと半回転し、訓夏は背を向けて呟く。どんな表情をしているのか定かではないが、今の台詞には落胆した様子がなかった。俯き加減だった顔も、これでもかと空を見上げているじゃないか。……首、痛くなるぞ。

「比念が思い出してくれるまで、わたしはずっと待ってますから」
「——ッ」

ドキリとした。

言い終わると同時に、訓夏はこちらを振り返り、年相応のあどけない笑みを浮かべてくれた。それがあまりにも可愛くて、愛くるしくて、思わずオレは……抱きしめた。

「ふにゃあっ!？」

猫のような声を上げたのは訓夏だ。

不意を突かれ、オレに抱き着かれて驚いたんだろう。抱き着いた

オレも自分に驚いている。いきなり女の子に抱き着くなんて、まるで変態だ。……いや、実際そうなんだけどな。

「っ、なっ、……あう、そっ……な、なにを……ひね、するです……っ」

「ごめん、抱き着きたくなっただけ」

素直に、自分の気持ち伝えてみる。

今のオレはたとえ訓夏に殴られたとしても本望だ。

「そっそそそっそんなこ、とをつ、言われても……っ」

急な展開に頭がパニックに陥っているのか、訓夏は全身に力を入れて硬直している。手が出ることはおろか、足すら出なかった。その代わり、時間差で攻撃されることを予測しておかなければならぬいな。

ゆっくりと、オレは訓夏から手を離していく。

オレの体が、訓夏の体を、訓夏の全てを、名残惜しそうに欲している。……もう一度抱き着いてもいいかな。

「訓夏って、いい匂いがするんだな」

抱き着いた時、女の子らしい甘い香りがオレの鼻孔をくすぐった。匂いに敏感なだけあって、訓夏は自分自身の匂いにも気を使っているんだらうか。

「そっ、そ、……ですかっ？」

訓夏はというと、未だ目の焦点が合わずに、ぐるぐると色んなところを見ている。その頬は真っ赤に染まっていた。訓夏の様子を見ていると、もしかしてまだ何が起こったのか理解していないんじゃないだらうな、と疑ってしまいたくなる。まあ、それはそれで可愛らしい反応でいいんだが。

「訓夏と交わした約束についてだけどさ、悪いけど今すぐには思い出せそうにない」

「……は、はい」

「だけどよ、時間はたっぷりあるんだ。これから三年間、オレと訓夏と、ついでに胡桃も、一つ屋根の下で過ごしていくんだからさ」

オレの言葉を聞いて、ようやく訓夏が覚醒する。というか元に戻る。

「そうですね……、ゆっくり思い出せばいいです。比念が思い出してくれるまで、わたしは待っていてあげますから」

そう言って、訓夏は再び笑顔を作り出す。

「……あ、やっぱりもう一度抱き着いても——」

「死にやがれです」

恥ずかしそうに毒舌を返し、訓夏はオレの手の甲を捻りやがった。結局、最後は機嫌を損ねるんだな。女の子の機嫌ほど取りづらいものは存在しないってことか。

だが、訓夏と交わした約束は、思いのほか早く思い出すことになる。

そう、たとえば今夜とかにでも——…

【幕間（くんかたん劇場？）】

【幕間（くんかたん劇場？）】

「……あ、やつばもう一度抱き着いても——」

「死にやがれです」

恥ずかしさを紛らわすために、比念のリクエストに対して毒舌で返す。その代わりに、手を握るぐらいのことは許してあげてもいい——と思っていたら、いつの間にか手の甲を捻っていました。……はあ、なんでこんなことをしちゃったんでしょう。

あわわわあわあわあわああああっ、比念に抱きつ、憑かれた！抱き疲れた！抱き着かれたっ！夢じゃありません、これは現実ですつ、事実ですつ、真実ですつ、幻なんかじゃありませんつ、比念がわたしに抱き着いたんですつ！

ありがとう！ありがとう！全国のわたしと比念を応援してくれている方々、今まで本当にありがとうございました！これでわたしもあの頃から一歩どころか二歩前進したようなものですよ！まさか比念の方から抱き着いてくるとは思ってもいませんでした。しかもつ、聞きましたか？いい匂いがするっていいい言いましたよ！わたしの匂いに比念はメロメロになってしまったんですね、分かりますっ！でもそれも仕方のないことです、あの日約束を交わして以来、匂いに敏感になったわたしは、いっどこで比念と再会しても恥ずかしくないように毎日毎日自分の体を念入りに洗っているんですからねっ！

どうですか、比念。わたしの匂いに脳髓が刺激されましたかっ。

できれば一度目に抱き着いた時に言ってくれば更に大満足だったんですけどね。でもでも、わたしは十分満足してますよっ、だってあの比念が自ら率先してわたしに抱き着いてくれたんですから！

何度も言いますが比念がわたしに抱き着いたんですっ。

この変態ッ、変態ッ、警察に突き出されなくなかったらもっとう抱き着きやがれですっ！

そしてわたしも抱き着きますっ、変態ですからっ、当然ですっ！昨日までのわたしは比念に会いたくて会いたくて我慢できなくても我慢してやっぱり我慢できなくてももう全身がどうにかなっちゃいそうな日々を送っていましたけど、今日からわたしはもう何も我慢しなくてもいいんですっ、だってすぐそばに比念がいるんですから、会いたい時に会いに行くことができます！顔を覗きに行くことができます！寝顔を覗き見ることができます！監視カメラをつけるのも……いやいやいや、それはさすがに比念が恥ずかしがるかもしれませんね。だからまだ我慢しておきましょう。まだね。

それに勿論、比念がわたしの部屋に遊びに来ることもあり得ます！うっん、今の言い方は間違いですね。あり得ますじゃなくて確定事項でした。わたしが認めた比念はドがつくほどの変態さんですから、わたしの部屋に忍び込むことなんて造作もないでしょう。ベッドの下に、タンスの中に、押し入れの中に、机の中に、わたしの後ろに、枕の裏に、色んなところに隠れてわたしを視姦するに決まっています！

変態ッ、変態ッ、でもそれが変態という名の比念なんですっ！

だからわたしは我慢します！なすがままされるがままなんですっ！その過程でわたしとの約束を思い出すも思い出すかもしれないのであれば何度でも何度でもわたしは比念の要望に応えてしまおう！拒否権なんて存在しません、わたしが持つ権利は比念の全てを迎え入れる権利だけですからっ！

そうです、そうですとも、比念が言っていたように、これから先、比念とわたしには時間がたっぷりと与えられているんです。約束を

思い出すことは前提として、それから後のこともドキドキしながら待っていないければなりませんね。

我慢できなくなった比念が我慢していたわたしを強引に押し倒して我慢できなくさせられたりするのとは日常茶飯事になるはずですから、楽しみにしておきますよっ。

はふう、なんだかこれから先のことを考えていたら夢も希望も胸も膨らみますね。そういえば比念は胸が大きな女性は好きなんでしょうか？ あの頃に比べてちょっと大きくなりすぎたんですけど、もし比念が「貧乳はステータスだ希少価値だ！」的なタイプの趣向の持ち主だとすれば胸を小さくする手術をするしかありませんね。勿論そんなことをすればお姉ちゃんから「嫌味か？ 嫌味かねそれは？」と言われるのは必至ですけど、わたしと比念の幸せを考えてくれるのであれば当然納得してくれるはずですから問題はありません。まあ、比念がわたしの胸を好きだと言ってくれれば丸く収まりますからね、機会があれば聞いてみるのもいいかもしれません。好きだって言うてくれれば、好きなだけ、その、触っても……いいんですからね。比念限定でっ！

「やあ、やっと戻ってきたね。待ちくたびれてしまったよ」

岩屋神社での一件から数十分後、オレと訓夏は家に戻っていた。

裏口から家の中に入り、店内へと顔を覗かせる。すると待ってましたと言わんばかりの表情で胡桃が出迎えてくれた。オレが架織乃家を訪ねると同時に店の入り口を閉めたくせに、現在進行形でレジカウンターの前で店番をしていやがるじゃないか。

黒で統一された肘置き付きの上等な椅子に座ってふんぞり返っているが、普段からこんな態度で店番をしているとすれば随分と偉そうな店員もいたもんだ。たとえ責任者だとしても、もう少しどうにかならないものか。

「キミはくんかたんを連れて何処に行っていたんだい？」

「言っておくが、オレが連れて行かれたんだからな」

「ははは、そんなことはどうでもいいよ。何処に行っていたんだい？」

訓夏のこととなると口調の端々に棘が出てきやがるな。

「岩屋神社に行ってみました」

助け舟を出したつもりなのか、訓夏が一步前に出て質問に答える。それからオレの顔を見上げて、どうだ、と言いたげな視線をぶつけてきた。……何がだよ。

「岩屋神社に？ ……ふむ、まあいいさ。だがその代わり今夜はキ

ミの部屋で寝か——」

「断る」

「——せてもらわなくてもいいかな、と言いたかったのだが断られたので一緒に寝ることにしようじゃないか」

「臨機応変な奴だなお前は」

「それが長所さ、キリッ」

先程、訓夏にボディーブローを喰らったのをもう忘れちゃったの

か、胡桃は普段の調子を取り戻していた。まあ、大人しいよりはこっちの方が断然胡桃らしくていいけどな。

「ねえ、コトネー、クンカ帰ってきたのー？」

と、ここで第三者——じゃなくて第四者の声が暖簾の向こう側から聞こえてきた。

「誰か来てんのか？」

「キミとくんかたんが旅に出ている間に、新たな旅人が一人迷い込んでん——」

「スイの声です」

胡桃の台詞を遮り、訓夏が返事をする。

訓夏の顔を見て、それから胡桃へと視線を移してみると、案の定、胡桃は口元をへの字に変えて無言の抗議に訴えていた。……だが残念かな、訓夏は気付いていない。

「スイって、訓夏の友達か？」

「そうです。同じクラスで同じ研究会の仲間ですよ」

同じ研究会っていうと、つまりTCG研究会のことか。最近の女子中学生はカードゲームに嵌る奴が多いのか、それともオレの知り合いだけが特別なのか。よく分からんな。

訓夏が暖簾をくぐると、快活そうな声が響く。スイって子の声だ。まだ顔は見えていないが、声だけを聞いてみても明るそうな子だったのは理解できた。

ご尊顔を拝するために、訓夏に続いて暖簾を捲り、居住スペースへと顔を覗かせてみる。

「——うわっ、男だっ」

丁度、階段を下りてきたスイがオレの顔に視線を向けて口を開いた。

「クンカ、家の中に男が入ってきてるよっ、追い出さなくていいの？」

まるで汚らしいものを見てしまったかのようなお言葉をありがとう。初対面でそんなことを言われたのはこれが初めてだ。

「大丈夫です、あれは変態なところを除けば無害ですから」

「つまり変態ってことじゃんつ、そばにいたら妊娠させられるよ、早く離れてっ」

「ごもつともな意見だ。しかしながら女の子のそばにいただけで妊娠させられるような残念なスキルはあいにくと持ち合わせていないものでな。命拾いしたな、小娘め。」

そして訓夏は、もう少し否定の仕方をどうにかできなかったのか。

「あ、あー、えっと……」

声を掛けるべきか否か、眉根を寄せて悩んでいると、その様子を見た訓夏がオレの手を引っ張り、スイの前に立たせやがった。

「手を握ったってことは……本当に、無害なんだ？ その人……」

珍獣か、オレは。

二人のやり取りが理解できないオレはおっさんになってしまったということか。

「現役女子中学生の会話が理解できない思春期真っ只中の現役男子高校生に説明しよう」

「のわっ、いきなり現れるんじゃないやねえっ」

いつの間にやら、オレの隣には胡桃が姿を見せていた。

瞬間移動能力でも持つてるんじゃないだろうな、割とマジで。

「くんかたんはね、学校でも随一の男嫌いとして有名なのさ。自分には大切な人がいるから体に触れていいのはその人だけなんだー、ってな感じでねえ」

そりやまた同じ学年の男子たちにとっては残念な話だな。と言っても中高生が異性に触れ合う機会なんて早々訪れることはないからあまり意味はないだろうけども。

「ん？ でもオレはいいのか？」

首を傾げ、訓夏に質問する。大切な人がいるなら、オレも訓夏には触れたらいけないことになるわけだからな。

連動するかのように、胡桃とスイも視線を向ける。

一瞬、視線を逸らした訓夏は、唾を飲み込み、オレの質問に答え

る。

「……比念は、これから三年間、一つ屋根の下で過ごすことになる人です。触れ合わないで過ごすことなんて不可能ですから」

「ああ、だから我慢してくれてんのか」

「死んでくれますか」

「なんでっ!？」

時々だが、会話が成り立たないことがあります。これが女子中学生の力か。恐るべし。

「おおおお、身長高いね、この人。何センチぐらいあるの？」

とここで、黙って話を聞いていたスイが声を掛けてきた。

「オレか? ……えっと、百七十二センチだったかな……」

中学生の、それも女子からすれば高い方かもしれないけど、同級生と比べれば頭一つ身長が高かったりするわけでもないからな。

「おおー、すっげー高いね。ボクより二十センチも高いんだ!」

「いやそれほどでもないけどな」

何がそれほどもないのか自分自身にツツコミを入れたいところだ。

……つて、ん? 今、この子、自分のことを? ボク? つて言わなかったか?

「ボクもね、同級生の中ではそれなりに身長が高い方なんだけどさ、でもやっぱり男子の方がものすごく高いんだよね」

「へ、へえー、そうなんだ……はは。ところで、スイちゃん……だっけ?」

相槌を打ち、会話を切らさないように、さり気なく話の方向転換を試みる。

「ん? そういえばまだ自己紹介してなかったね」

そうだったそうだった、と思いだし、推拿はコホンツと小さく咳をする。

「変態のお兄さん、初めまして。ボクの名前は倉紫屋推拿くらむら すいなって言います。コトネーには上の名前で呼ばれてて、クンカにはスイって呼

ばれてますっ。あと、それとね、ちゃん付けは恥ずかしいから、気軽に推拿って呼んでくれればいいよ！」

ニコツと微笑み、右手を差し出し握手を求める。……ああ、なんて無垢な笑顔だ。胡桃とは真逆の性格をしていそうな子だな。変態のお兄さんって言われたけど、相手が推拿なら速攻で許そうじゃないか。むしろもっと呼んでくれっ。

短髪黒髪の推拿は、スポーツが大好きですと主張しているかのように焼けた小麦色の肌と、爽やかな笑顔を惜しげもなく披露してくれる。意地悪なところなど微塵も感じさせない人懐っこそうな素振りと喋り方は、恐らくは同級生のクソガキ共の心を掴むには苦労しないことだろう。人を疑うことを知らないであろう純粋な瞳を向けられると、逆に推拿を苛めてみたくなるのは変態の性^{さが}って奴か。

先ほど述べたように、身長はオレよりも二十センチ低い。だが、女の子としては平均並みではないだろうか。因みに胸の大きさについてだが、服の上から見た感じでは平均的なんじゃないかと変態紳士たるオレは推測する。体格的には多少小柄だが、しかしながらすらつとした脚線美は舌なめずりしたくなる——おっと、誰か来たようだ。げっ、訓夏ッ。

「視線が厭らしいです、比念」

「オレは中学生に欲情しませんっ」

そうだぞ、決して欲情したわけじゃない。ただ、推拿の胸や足を見ていると云々……。

「オレは釣枝比念。今日から架織乃家に居候することになった高校一年生だ。よろしく」

推拿の手を握り、がっちりと握手を交わす。しかし何故かな、今の瞬間、どこからともなく殺気を感じているんだが。どうか気のせいでありまっすように。

「それで、ボクに何か聞きたいことでもあるの？」

手を離れた後、推拿は背中^に手を回し、少し前かがみ気味にオレの顔を見上げた。

いちいち仕草が可愛いな。訓夏に匹敵するんじゃないかな。

「あ、……そうだったな」

自己紹介が終わり、いよいよ本題へと突入する。と言ってもオレが個人的に興味があるだけなんだけどな。

「推拿はさ、えつと……自分のことを？ボク？って呼んでるのか？」
「えっ」

直後、ピクリと体を反応させ、推拿の目が点になった。

……あれ、オレって奴はまた変なことを聞いちまったのか。

「キミ、くんかただけでは飽き足らず倉紫屋までも辱めようと言
うのかい？」

「何がっ！？」

ちよつと待て、オレは別に推拿を辱めたつもりはこれっぽっちも
ないぞ。

「比念は最低ですね」

「なにこのアウエー状態！？」

誰でもいいから状況説明を求む、早急に！

焦点の合わない目をオレに向けていた推拿は、ようやく目を覚ま
したのか、おずおずといった感じで言葉を紡いでいく。

「ボク、……あの、ボクって……変かな？」

「全然ッ、むしろさいっこう！」

即答。これが紳士たる返事の仕方だ。さいっこう！

訓夏と胡桃の視線が痛いのは我慢しよう。だからせめて足を踏む
のは止めてくれ。

「そつ、そうかな……？ 同じクラスの男子にはさ、女子が？ボク
？って言うのはおかしいって言われるんだよね」

そんなことはない、とオレは推拿の頭を優しく撫でてやる。その
刹那、またもやオレの背を射抜くかのような殺気が向けられた。な
んだこれ、怖いんだけど誰ですか。

「それはそいつらがまだ若いからだ。あと数年経てばそいつらも理
解できるよ、推拿という存在がどれほどまでに希少価値のある女の

子なのかということな！」

「力説しているところ悪いのだがキミ、変態がすぎるぞ」

胡桃にツツコミを入れられるとは思わなかった。

多少、顔を引きつらせつつ、オレは推拿の頭から手を引いた。

「そっか、なんかよく分からないけど……変態のお兄さんはボクのことを笑わないでいてくれるんだねっ、ありがと！」

くそっ、推拿の心が穢れなさすぎて真っ直ぐ見ることができねえっ。

変態紳士の主張を最後まで聞いてくれただけでも御の字だというのに、そればかりか、お礼までしてくれるなんてどうすりゃいいんだよ。もう一度、頭を撫でてやりたいっ。

「ど、どういたしまして、はははっ」

だが残念なことに、此処にいるのはオレと推拿だけではない。変態的な行動を取ることは不可能だ。今はまだ大人しくしておくのが吉だ。……もはや変態じゃなくて犯罪者か。

「……あー、ところで推拿は、今日は何か用事でもあったのか？」

話題を変えるべく、オレは適当に思いついたことを口にしてみる。

それが功を奏したのか、訓夏と胡桃の視線が推拿へと移った。

「そうだよ！ えっと今日はね、午後からクンカの部屋で研究会の活動をする約束をしてんだ。ほら、デッキケースもちゃんと持ってるよ」

なるほど、研究会の活動か。

そういえば訓夏はTCG研究会に入っているんだっただな。そのメンバーのうちの一人が、推拿だったってことか。

「へえ、推拿もカードゲームで遊ぶんだな」

女の子がカードゲームで遊ぶっただけでも相当珍しいのに、まさか学校でTCG研究会なるものを作るほど熱心に遊んでいるとは恐れ入る。行動力がある奴らだよ。

カードゲーム人口の男女比は圧倒的に男性が多い。

そんな中で、身近に二人もカードゲームをしている女性がいるな

んてレアなケースといえよう。しかもそれが女子中学生なんだから価値も倍増つてもんだ。

「変態のお兄さんはしないの？ カードゲーム」

「んー、昔は遊んでただけど、今はもう止めちゃったんだよな」

「卒業したんだ？ そっか、残念だなー」

遊び相手が増えると期待していたのか、推拿は大きな溜息を吐いた。体全体を使って、ガツカリした様子を表現している。

「……もしかして、あれができるからですか」

「ん？ ……ああ、まあな」

横から声を掛けられる。どうやら訓夏は気付いたらしい。居間にいた時はまだオレの能力を説明する前だったが、今なら訓夏だけでなく、胡桃も気づくことができるだろう。

接触反応を行使できるようになって以来、オレはカードゲームで遊ぶのを止めた。山札をシャッフルする道程において、どこに何のカードがあるのか視ることが可能であり、場合によっては相手の手の内を読むことすら不可能ではない。気付けば地元で不敗神話を打ち立てたほどだ。

勿論、代わりに失った代償も大きかった。オレがあまりにも勝ちすぎるために、次第に気味悪がつて陰口を叩くようになったり、表面上では仲良く振る舞っていても、裏ではオレのことを化け物扱いするようになっていた。それならワザと負ければいいじゃないかと考える奴もいるだろうが、一度でもカードゲームで遊んでみれば理解できるはずだ。

絶対に勝てる勝負にワザと負けるなんて、絶対に不可能だってことがな。

勝ち負けのあるカードゲームにおいて、相手に勝つということがどれほど気持ちのいいことか、そして相手に負けるということがどれほど悔しいものなのか。

オレがまだガキだったってこともあるが、それでも人間って奴は勝てるなら勝ちたいと誰でも思うはずだ。

まあ、友達がなくなるのは自業自得だったから構わないさ。だが、カードゲームの美点でもある駆け引きを楽しむことができなかったことで、オレは心の底からカードゲームを楽しめなくなっちゃった。

だから、止めた。たとえ勝つことができても、楽しくもないもので遊び続けるほど詰まらない時間潰しは存在しないだろうからな。

「さっき遊びに来たらコトネーしかいなかったからさ、クンカの部屋で待ってたんだよ」

「そうでしたか、それは悪かったです」

岩屋神社まで散歩に行っている間に、入れ違いで推拿が遊びに来たってことか。

しかし春休みにも活動するとは随分と熱心な二人だな。というか、ただ単にカードゲームで遊ぶのが楽しいだけかもしれないけどな。それはそれでオレとしては構わないが。

「部屋に行って遊びましょう。……と、その前に着替えてもいいですか？」

そう言われて改めて気づいたが、今ここにいる四人の中で、制服姿を披露しているのは訓夏ただ一人だ。……いやいや、ちよつと待てよ、そもそも訓夏は何故制服を着ているんだっただけ。確か部活で学校に行くために……あれ？

「なあ、訓夏。部活は……午前中に終わったんじゃないのか？」

「言ってますでしたか？ 午前中は生徒会の仕事で学校に行ってたんです」

「生徒会？ 訓夏は生徒会に入ってるのか」

「虹ヶ丘中学校と高校はだね、二年次の成績上位者が強制的に生徒会メンバーとして登録されるのだよ。くんかたんは学年一位の頭脳と可愛らしさと絶大なる人気を持つオールラウンダーであるからして、今現在は虹ヶ丘中学校の生徒会長に就任しているのさ」

補足情報として、胡桃が横から付け加えてきた。それに対してオレは、バカみたいに口を開けることで反応する。虹ヶ丘中学校と高

校にそんなシステムがあつたなんて初耳だ。自分が通う学校のことくらいもつとよく調べておくべきだったか。

しかし今の話が本当だとすれば、訓夏には嗅覚と可愛らしさと愛くるしさ以外にも頭の良さまで備わっていることになる。神は二物どころか何物与えてんだよ。なんでもいいからオレにも寄せ。変態的なもの以外限定で。

「訓夏つて凄いな……」

「い、今頃褒めても頭を撫でさせてあげませんよ」

顔を逸らし、ぼそりと呟く。……なんだ、つまりこれは頭を撫でるってことなのか。

隣に視線を移すと、胡桃がニヤニヤしながらオレを見ていた。こち見んな。

「あー、よしよし……」

「っ、……う」

撫でろ、と言われた気がしたので、殴られるのを覚悟して訓夏の頭に手を置いた。

途端、訓夏は目を閉じて体を縮こませる。言葉にならない声を上げて、くすぐったそうに唇を動かしている。

全国の変態紳士の諸君、今此処に世にも可愛らしい生き物がいますよ！

訓夏の頭を撫でた時間、約三秒。これ以上続けると胡桃に嫌味を言われそうな気がするので、渋々ながらも手を引つ込める。すると、訓夏がその手を名残惜しそうに目で追いかけていき、やがてオレに見られていることに気づき、頬を朱色に染め上げる。

くそっ、胡桃と推拿がいなければ絶対に抱き着いていたぞ。なんせオレは我慢できない変態紳士だからな。……色んな意味で最悪だな、それって。

「クンカ、早く遊ぼうよ」

「き、着替えますから、ちょっと待っててください……っ」

恥ずかしさを隠すかのように、訓夏は早足で階段を上っていく。

その姿を見上げてみるが、残念ながらスカートの中は見えなかった。
スカートが長いよ、訓夏。

【4 - 2】

「そんじゃあ、オレは今から部屋で荷物を整理するかな」

まだ時間はたっぷりあるが、そろそろ旧物置部屋に戻って荷を解く作業に取り掛からないと、あつという間に夜になっちまうからな特に、胡桃の話し相手をしていると時間の進み具合がとんでもないことになる。時間がいくらあっても足りないだろう。

だが、そんなオレの考えを邪魔する輩が、此処には当然の如く存在する。

「キミ、居候の分際で初日からそんなわがままが通用すると思っ
っているのかい？」

ガシツ、とオレの肩を掴み、意地悪そうに笑みを浮かべるのは、
言うまでもなく胡桃だ。

「……はあ、なんだよ？ 今度はなんなんだ？」

諦めにも似た溜息を吐き、オレは肩に手をやり胡桃の手を離す。

「今日からキミも我が架織乃家の一員となるわけだが、勿論、そう
簡単に居候を認めるわけにはいくまいさ。というわけであるからに、
これから一つキミに試験を行いたい」

「試験……？」

嫌な響きだ。そんな単語は学校以外で聞きたくないな。

反問すると、胡桃はくつくつと笑ってみせる。そういう笑い方だ
けは訓夏よりも似合うよな。当然ながら褒め言葉じゃないけどよ。

「さあ、こっちに來たまえ」

手招きし、胡桃は暖簾をくぐって店内へと姿を消す。

「なんか面白そう！ ボクも見学しよう」と

後に続けと言わんばかりに、推拿が元気よく暖簾にぶつかる。：

…せめてくぐるか捲れ。

「……はは、は」

湧いた笑い声を上げ、オレも二人の後についていく。廊下に突っ

立つても何も始まらないからな。

架織乃骨董屋の店内へと顔を覗かせてみると、既に準備万端といった様子の胡桃と、これから何が起こるのかワクワクしながらオレと胡桃に視線を向ける推拿の姿を確認した。

「遅いぞ、キミ。早くそこに座りたまえ」

偉そうな態度で店主専用の椅子に腰掛けた胡桃が、顎を上げて行動を促す。

「そこつてどこだよ。椅子がないぞ」

店内には、胡桃が座る椅子以外に存在しない。因みに、推拿は棒立ちだ。可哀想だからパイプ椅子でもいいから持ってきてやれよ。

「誰が椅子に座れと言ったかね、地べただよ地べた」

「てめーは鬼かつ」

「うん、知ってる」

にこー、つと意地悪く笑いかけてくる。

いや、胡桃が女でよかったよ、危うく手が出そうになるところだったぞ。

「……はて、キミは地べたに座るのは嫌なのかい？ まあそれなら仕方ないねえ、私の膝の上に座る権利を与えようじゃないか」

「マジで座るぞこの野郎」

「どうぞどうぞ」

一度でいいから試してみたいものだが、それを実行に移せば取り返しのつかないことになりかねないから我慢だ。……いや、既にオレは訓夏に抱き着いたりしてゐるから手遅れか。

「変態のお兄さん、座らないの？ そんなじゃあボクが代わりに座ってあげるね！」

「ちよっ、くらしやつ、——んごうふっ」

オレが拒否するのを確認し、それならばと推拿が代わりに立候補する。

胡桃に制止する間すら与えずに、推拿は思いつき飛び上がり、尻から強引に胡桃の膝の上に着地する。……ああ、あれは痛いな。

推拿の全体重が、モデル張りの細さを誇る胡桃の肢体に襲い掛かっている。オレをからかいすぎた末路がこれか。自滅とはまさにこのことだな。ご愁傷様、胡桃。

「ぬぐうつ、なにをしているんだね倉紫屋めい……今すぐ私の上から退けいっ」

「だが断る！ あははっ」

無邪気って、時に恐ろしいね。胡桃が苦戦する姿を初めて見たよ。ふぬぬー、と気の抜けるような踏ん張り声を上げながら、胡桃が推拿の尻を弄る。^{まさぐ}

「あひや、ひやあつ、コトネー、くすぐったいってばっ」

「退かぬ……ならっ、鳴かせてみせよ……う、女子の声……っ」

「あほか」

こんな状況でも何ら変わらぬ口調と態度を示し続ける胡桃にある意味感服しつつ、オレは推拿の手を引いて手助けをしてやる。

「くっ、……釣枝よ、これで貸し一つだね。この借りは私の体で払っ——」

「払わなくていいから、もう少しオレに対する態度を改めてくれ」

「おや、なんだね、キミは積極的に誘ってくる子よりも、素直な子の方が好みだったのかい？ ふむ、どうやら私は選択を誤ってしまったようだね。うつむ、果たして今からでも修正及び方向転換が効くだらうか……」

「ごちゃごちゃ変なことを言う暇があるんなら、さっさと試験つてのを始めてくれ」

相手をすることに疲れてきた。精神的にだけでなく、肉体的にも疲労が蓄積されているような気がするのには錯覚ではあるまいな。

「よかろうて。では……」

腕と足を組み、背もたれに寄りかかり、胡桃はオレと目を合わせる。

「釣枝、今日からキミは架織乃骨董屋の一員、すなわち働く人になつてもらう。だがそのためには今から行われる数々の難題、難関、

危険を乗り越えなくてはならない。それらを無事に制覇し、勇者として魔王討伐を果たしてみせることを私に誓いますか？」

「誓いません」

即、断りを入れる。これが胡桃に対する最善の一手に違いないかな。

「ノリの悪い奴だな、キミは」

「ノリが悪くて残念だったな」

ぷくーっと頬を膨らませた胡桃は、拗ねたような表情を作り上げる。

普通にしていればこいつも可愛いのに、つくづく勿体ない奴だよ。

「魔王討伐ならボクも一緒に行くっ」

「倉紫屋、キミは少し口を閉じているといい」

推拿は推拿で、人を疑うということをもつとしつかりと学ぶべきだ。いつかきつと悪い奴に騙されてあんなことやこんなことに巻き込まれちまうぞ。たとえば変態紳士な奴に言い包められて変態的な行為を求められる可能性も否定できないわけであって……いや、別にオレのことを言っているわけじゃないからな。仮定としては。

「このままグダグダしていても埒が明かないだろうからね、それでは試験を始めようか」

誰のせいで話が進まないのか一度じっくりと話し合いたいものだな。

とにかく、ようやつと試験なるものを受けることができそうだな。

「では、試験その一。我が架織乃骨董屋の店員というものは、接客において常に元気な声を出すことができれば私の部屋で私と共に毎夜を共にしなければならぬのは周知の事実「ちょっと待てい！（オレの声）」であります、ではそこでキミに与える試験についてですが、今から私が口にする台詞をとびつきり大きな声で復唱すること、それができるようになって初めて、キミは私と共に背中

の洗いっこが可能となるわけです。というわけで変態紳士のキミに

は理解できたかな？」

「成功しても失敗しても結末が変わらねえだろうが」

「えっ？」

なんだその真面目なことしか言ってませんよ的な反応は！ オレがおかしなことを言ってるみたいな構図になるから止めてくれ！

「まあ落ち着きたまえ、とりあえず試験をクリアしなければキミに明日はないのだよ」

随分と理不尽な意見だが、確かに一理ある。オレは架織乃家に居候する身分であるからして、家主を怒らせてしまったり機嫌を損ねてしまうようなことがあれば、即刻追い出されることも無きにしも非ずだ。ここは大人しく従っておく振りをするべきだ。

「もうどうでもいいから始めてくれっ、オレは早いとこ荷物を整理したいんだよ」

半ばやけくそ気味に言い捨てる。これが演技ならどれだけ楽なところか。

「うむ、では復唱したまえ」

んんっ、と喉を鳴らし、胡桃がゆっくりと息を吸う。そして、

「いらっしやいませ」

まずは、簡単な挨拶から試験が始まった。

「いらっしやいませ」

「いらっしやーい！ あははっ、お客がいないのにいらっしやいだってー！」

オレと胡桃の真似をして、推拿も復唱する。

だが止めておけ、胡桃の眉間に皺が寄ったのをオレは見逃していないぞ。

「ありがとうございます」

「ありがとうございます」 「どういたしましてー」 たたっ たっ、痛いよコトネー！」

胡桃が言い、それにオレが続いて、最後に推拿が返事をする。そして案の定、胡桃の足が推拿の脛すねにクリーンヒットした。

息を吹きかけて痛みを和らげようと試みるが、ギリギリのところ
で届かずに苦戦中の推拿を無視し、更に試験を継続する。

「チーズバーガーはいかがですか？」

「チーズバーガーはいかがで……って、んなもん売ってねえだろう
がっ」

「……え？ チーズバーガーじゃなくてスマイル一つ？」

「誰の注文を受けてんだよ！ んなこと骨董屋で聞かれるかっての
！」

「いいえ、オレの大好物は架織乃胡桃です」

「質問してたのオレ！？ っていうか勝手にオレの好物を決める
な！ しかもそれ食い物じゃねえからっ、お前だから！」

「食べちゃいたいです」

「だから何をだよ！ お前かっ？ お前のことかっ！？」

「むしろ食べてっ」

「もはやお前の願望的なものがむき出しになってるし！！」

「はい、ごうかくー。釣枝、おめでとう。キミは今日から架織乃家
の一員だ」

「なんかいつの間にか終わってたし！」

もう嫌だ、胡桃の相手をするのは懲り懲りだ。

牽制役の訓夏はまだ着替えが終わらないのかよ、待ちくたびれて
死にそうだぞ。

「推拿、お待たせしまし……なにをしてるんですか」

心の叫び声を通じたのか、暖簾の向こう側から訓夏が姿を現した。

……ああ、貴方が女神か。それとも救世主か。

「釣枝の調教を少々」

「ごほっ、ごふっ……、お、おいこら胡桃、初耳だぞっ」

思わず咳き込んでしまった。女の子に調教されるなんてオレはド
Mかったの。

っていうか逆に調教したい——おっと危ない、また誰か来たよう
だ。

「ははは、さて店番でもしようかな」

既に店は閉めただろうが。お前はどれだけマイペースな性格をしているんだよ、全く。

「待ちくたびれたよクンカ、早く遊ぼうっ」

推拿はというと、おあずけを喰らっていた子犬のように手足をパタパタさせながら、今か今かとはしゃいでいる。そんなにカードゲームで遊びたかったのか。

「あ、比念も一緒に……わたしの部屋に來ますか？」

「オレが入っても構わないのか？」

魅惑の訓夏ルームに男性の入室を許可してもいいのか。

いや、いいんだろうよ。そうでなければオレは一生入れそうになりからな。

「比念なら、あの……、いいですよ」

「そっか、それじゃあお邪魔させてもらおうかな」

顔を赤らめながら言うもんだから、こっちまで恥ずかしくなってくる。今のオレは確実に青春ってもんを満喫していることだろう。役得だ。

「くんかたんズルいぞ、私も是非お供させていただ——」

「店番してください」

「しゅん……」

声に出して言うな、胡桃。

たとえ本当に悲しかったんだとしても、そんなことをしたら演技にしか見えなくなるぞ。

「ふん、別にいいさ。私には骨董品という名の喋らない動かない額かない友達がわんさかいるのだからね、一人ぼっちになっても決して淋しくなどないのだよ。……チラッ」

「その眼はなんだその眼は」

オレの反応を期待するのは勘弁してくれ。

胡桃がそうであるように、オレも既に訓夏には頭が上がない状態なんだからな。

「ばいばい、コトネー」

恨めしい台詞を言い残し、我先にと推拿が走り出した。

これ以上、胡桃の相手をするのも疲れるので、悪いがオレも訓夏の部屋にお邪魔させてもらうことにしよう。胡桃は暫くの間そこで反省しておくといひ。

「うらぎりものめい、うぬぬう…… かくなる上は我が力を解放し……」

ブツブツと呟き声を上げる胡桃を無視し、そそくさと背を向ける。なんだか呪いを掛けられそうな声色が背中につけられたが、後ろを振り返ることなく訓夏と二人で店内を後にした。

二階に上がり、先ほどの案内では見ることでできなかった訓夏の部屋の前に立つ。

ドアは既に開いていた。部屋の中に推拿の姿を確認。こつちを向いて片手を上げる。

「クンカ、デッキ調整は終わってる？」

「勿論です」

床に座布団を三枚用意し、訓夏が腰を下ろす。ベッドに座っていた推拿は、訓夏と向かい合うようにして座り直した。

「比念も座ってください」

「おう、失礼しますと」

声を掛けられ、部屋の中に入る。

枕元には可愛いぬいぐるみが沢山置いてあり、訓夏の女の子らしさをより鮮明に映し出す。机の上には参考書の類がきつちりと並べられ、学年一を誇る頭脳は事実なのだろうということを実感させてくれた。

そして最後に忘れてはならないのが、訓夏の私服姿だ。

白と黒のチェック柄のショートパンツを穿いたまま座布団の上に正座する訓夏は、実に美味しそうな太もと膝小僧を見せつけている。これぞ役得と言わんばかりにじつくりと堪能し、愛でることが可能だ。

上はダークベージュに染まったフレアチェニツクを着ているが、服の性質上、ショートパンツが上手い具合に隠れてくれるおかげで、角度によっては何も穿いてないように見えないこともない。こいつは変態を興奮させる素質を十分に備えた着こなしだ。

「先攻はいただきよ、クンカ！ ドローッ」

推拿は手際よく山札をシャッフルし、床に置いてカードを五枚引く。更にその後、山札からもう一枚カードをドローした。

「この空気、懐かしいな……」

オレも昔はこの二人みたいに時間を忘れてバカみたいにカードゲームで遊んでたっけ。

同じ学校の奴らだけでなく、近くの公園で出会った名前も知らない他校の奴らや、いい年こいたおっさんとかと勝負したことも今ではいい思い出だ。オレがあまりにも勝ち続けるものだから、拳句には全国大会の地区予選なんてものに出場するべきだと担ぎ上げられちまって、断りきれなかったオレは接触反応を使いまくって県代表に選ばれたこともあった。……まあ、結局それは辞退したんだけどな。

「わたしのターンですね、ドロー」

推拿のターンが終わり、訓夏のターンが回ってくる。

二人の対戦がよく見えるように、オレは中央に座っている。どちらのプレイングスキルの方が高いのか楽しみだ。

「訓夏の手札は……へえ、そういうタイプのデッキなのか……」

まず、訓夏の横に腰をずらし、手札を拝見させてもらう。

風属性のカードで統一しているみたいだが、なかなか独特な能力を備え持ったカードを加えているみたいだな。一枚では役に立たなくても、二枚三枚と数を増やすことによって、爆発的な威力を誇るタイプの戦術を用いるであろうことが手札から読み取れる。

「人の手札を見るなんてエッチですね……羞恥プレイですよこれは……」

たとえ対戦相手ではないとしても、手の内を見られるのは恥ずか

しかつたらしい。訓夏にお叱りの言葉を頂いた。手が出なかっただけでもありがたいので、大人しく訓夏のそばを離れることにしようじゃないか。

「あ、……うう」

すると、オレが離れると同時に訓夏の右手が虚空を掴む。

何か言いたげな様子でオレを見るが、目が合ったかと思えば、すぐに視線を逸らされた。

「変態のお兄さん、ボクの手札なら見てもいいよ!」

「そっか? そんなじゃあ……」

あえて今まで突っ込まなかったが、ところで推拿はいつたいつまでオレのことを変態のお兄さんと呼び続けるつもりなのか。そもそも意味を理解して口に行っているのかすら怪しいぞ。そんなに何度も変態変態と連呼されたら何かヤバイもんが開花しそうだ。

「どれどれ……? ほう、推拿はその、なんていうか……うん、面白いデツキだな?」

としか言いようがない。

コンボだとか戦術だとか一切無視、それが推拿のデツキだ。

なんだろうな、これ。まるで自分の好きなカードだけを選択したかのような……。

「このデツキはねっ、かつこいいドラゴンだけを集めて作ったんだっ、ほら見てよ、このドラゴンなんておっきな角が生えててかつこいいでしょー」

「……うん、そうだね、ははは」

だが残念かな、コストパフォーマンスが高すぎるカードを投入しすぎているので、手札が事故を起こしている。これではユニットカードを召喚する前にやられちまうぞ。

「ターンエンドです」

推拿と話していると、少々強めの口調で訓夏がターン終了を宣言する。

なんか怒ってるように見えるけど気のせい……じゃないよな。怖

いから目を合わせないようにするべきか。いやしかし二人の対戦が終わった後でどんな仕打ちを受けることになるのか不安でもあるし、でもやっぱり訓夏に手札を見るなって言われたから近づくことはできないし……ああくそつ、とりあえず今は推拿の手札を見ておこうじゃないか。

「あのさ、推拿。このデッキってマジックカードとかトラップカードは入ってるのか？」

え、なにそれ？　とか言わないでくれよな。

さすがにそこまで初心者なわけがないとは思うが、仮にもTCG研究会の部員なんだからもう少し頑張ってデッキを構築して頂きたい。

「もっちゃん！　マジックカードが三枚と、トラップカードが二枚も入ってるよ！」

「少なつ、山札五十枚もあるのに十分の一しか入れてねえっ！」

変態のお兄さんは泣きたくなってきました。

何故に泣きたいのかと聞かれると、同じTCG研究会の部員たる訓夏が、デッキの構築の仕方を推拿到に教えていないってことが判明したからだ。デッキ、または手札を見ればある程度の構築技術は図ることが可能だが、推拿のデッキは初心者そのものだ。

好きなカード（この場合はドラゴンのカード）だけを選択して、デッキに加えるというあるまじき行為により、補助カードが圧倒的に不足しているのが現状か。

「なあ、訓夏？　なんで推拿到にデッキの作り方を教えないんだ？」

「教えました。……でも、ドラゴンが好きだの一点張りなんです」

下唇を噛み、自分は悪くないと訴える。……ああ、確かにそりゃ悪くないな。つまりは推拿が自分の意見を譲らなかつただけか。

「変態のお兄さんつ、横から口出しするのは禁止だからね？　正々堂々とクン力を倒すことに意義があるんだからさっ」

変なところで我が強いな。

しかし安心しろ、推拿。お前のデッキでは運が良くなければ訓夏

には勝てないぞ。

口出し禁止と言いつつも、推拿は自分の手札がよく見えるように角度を変える。

「訓夏が場に伏せてるカードが牽制である可能性もあるけど、そこをあえて攻撃しない手はないんだよ。攻撃して身、伏せカードを発動するならそれに対抗してこのカードを使えばいいだけだし、逆に発動しないのなら攻撃がプレイヤーに直接通るだろ？ しかもこっちは対抗するために手札を一枚減らさずに済むわけだ。つまりこの場面で一番やつちやいけない選択というのは、伏せカードを恐れて攻撃をせずにターンを終えるってことだ」

「凄いよっ、変態のお兄さんはただの変態じゃなかったんだね？」
それは褒め言葉と受け取ってもいいのかな。とにかく羨望的な眼差しを向けられているのは確かだ。それと同時に、訓夏が苛々しながらオレを見ている。

「変態のお兄さんもなかなか役に立つんだね！ そうだっ、どうせならボクたちの研究会に入ってみない？」

「なかなか役に立たせてもらったところ悪いんだが、オレは既に高校生なものでな、中学生の研究会のメンバーにはなれそうにない」

ロリコン野郎として通報されたくないからな。……いや、でもオレと推拿は歳が一つしか変わらないんだよな。しかも高校生が中学生といちゃつくのはロリコンって呼ばれるんだろうか。そもそもロリコンの定義が曖昧でどこからどこまでが……ってオレは何をバカなことを考えてるんだか。

「あー、そっか。そういえばそうだね、残念だよ。クンカより強くなるために都合のいい相手が見つかったと思っただけだなー」

「正直な奴だな、お前は」

女子中学生の都合に振り回されるのも案外いいものかもしれない。

「そうだっ、ボクの師匠になれば一件落着なんじゃないかなっ」

「いや待て、別にオレはカードが強いわけじゃないし、カードの種類から相手の戦術が読めるだけであってだな……」

なんだか変な方向へと話がずれてきた。このままではゲームを続けるのも難しそうだ。

「仕方ねえな……、推拿、余りのカードって持ってきてるか？」

「え？ うんっ、ストレイジボックスに入れて持ってきてるよ」

「よし、この対戦は中止だ、今から推拿のデッキを強化するぞ」

でも、と訓夏が呟く。恐らくは何を言っても無駄だと言いたいんだろう。

だがそんなことはない。ドラゴンが死ぬほど好きだって言うならば、ドラゴンを活かすことができるように構築すればいいだけの話だ。

たとえ大好きなドラゴンをデッキに投入しまくっていたとしても、それを召喚できなければ楽しさは半減するだろう。そこが推拿のミソだ。召喚することができるようになれば、多少はドラゴンのカードを減らしても構わないはずだ。デッキの容量が空いた分、ドラゴン系専用の補助カードをこれでもかかってぐらい詰め込んでやる。

「推拿、デッキを見せてくれ。それと余りのカードも」

久しぶりにカードに触れたオレは、遠い昔に感じていたカードゲームをする楽しさを思い出していた。やっぱりいいよな、どんなデッキを作ろうかと悩んでいる時ほど、時間の流れが速まることはない。たった一枚のカードをデッキに加えるか否か、それだけのために何日も費やすことがあった。その感覚を、オレは今再び手にしている。「これとこれはいらないだろ、んでもって……こいつは使えるから残すか、あとは……」

いつの間にか、オレを中心に訓夏と推拿が輪を作り、床にカードを並べ始めていた。

楽しい時間というもののはあつという間に過ぎていく。この空間に、もう一人誰が存在していたことを忘れてしまうほどに……。

「はろうはろう、デュエリストの諸君。長閑の午後をいかがお過ごしかな？ くんかたんの優しいお姉さまが麦茶を用意して颯爽と参上仕るよ」

が、やはり忘れさせてはくれなかった。

勢いよく部屋のドアが開け放たれたかと思えば、お盆にコップを載せた胡桃が仁王立ちしているじゃないか。タイミングを見計らわない奴め。

【4・3】

「店番はどうしたんだ？」

「我が分身に任せてあるから案ずる必要はないさ、釣枝」
誰だよ、分身って。

しかしまあ、喉が渴いてきた頃合いだったので丁度いい。たまには胡桃も人の役に立つ。

……随分と酷い言い方だが、胡桃なら「構わんさ、むしろもっと私を苛めたまえ」とか言って喜びそうだ。

「ありがたく頂くよ」

返事をし、手を伸ばす。……そしてその手を払われた。

「キミ、お礼は？」

「……お前の耳は節穴か？ 今言ったよな」

「架織乃胡桃様ありがとうございます。このご恩は一生忘れません、と言いたまえ」

「このマゾ野郎がっ」

「おやおや、侵害だねえ？ キミにそんなことを言われる筋合いはないはずだよ？ 何故ならキミは「ハアハア……くんかたん可愛いよくんかたん……萌えー！」とか心の中で叫んでいるのだろう？」

オレの人格を勝手に作り替えるような発言は慎んでもらいたい。

しかも今時「萌えー！」なんて叫ぶ奴はほぼ存在しないっての。

「バカか、そんなこと考えるわけがないだろ、いったいどこの変態だよ」

「はて、キミは変態じゃなかったのかい？ 私はキミと再会して以来ずっとそのつもりで接してきたのだがね」

くそっ、ああ言えばこう言う奴め。

確かにオレは変態だが、それを胡桃に言われる筋合いはない。

「……」

「ん……訓夏？ なんか顔赤いぞ、どうしたんだ？」

「なんでもありません。喋らないでください、耳が潰れますから」
「ひでえっ！」

姉にからかわれ、妹になじられる。

これから毎日こんな日々を送ることになるのか。体が幾つあっても持たないぞ。

「さて、釣枝を使って遊ぶのも一段落したわけだし……」

「オレで遊ぶなオレで！」

このやり取りをどうにかしてくれ。

胡桃には疲れという言葉が存在しないのか。それともただのバカなのか。

「ほら、受け取るがいいよ」

麦茶の入ったコップを手渡され、一口飲んでみる。……よし、毒は入っていないみたいだな。勿論冗談だが。

「コトネー、ボクのは？ ボクのはないの？」

「釣枝が持つてるじゃないか」

その言葉に、思わず声が出た。

よく見りゃ胡桃は一つしかコップを持ってきていない。此処に居るのは胡桃を合わせて四人だったのに、たったの一つだ。

「みんなで仲良く飲み回せとも言つつもりか」

「おふこーす。さあ、キミが口をつけたコップを寄こしたまえ」

言うが早いか胡桃はオレのコップを強引に奪い取る。

「あつ、ズルいよコトネー！ ボクも飲むんだよっ」

「——うぬっ、零れるだろうが、止めたまえ倉紫屋……ぐぐぐっ」

波打つ麦茶の行方を目で追いかけていると、視界の端に動く影を発見。……訓夏だ、訓夏が麦茶争奪戦に名乗りを上げやが——、
「あつ」

声を上げたのは、推拿だ。

胡桃の手からコップを奪うべく取っ組み合いを披露している最中、コップを持つ手の向きが斜めになり、飛沫を上げるかの如く麦茶が宙へと逃げ出した。

その先にいたのは、やはりと言うべきか訓夏だった。座布団から立ち上がるうとする訓夏の胸元に、麦色の滴が万遍なく浴びせられてしまった。

「う、うわぁ……」

やっちまった、的な声を上げて、オレは訓夏の姿を――凝視した！
麦茶に濡れた服が透けて下着のラインが露わになつて……いなか
った。くそっ、こういう場合は確実に見えるはずなのに何故だ！

「大丈夫か、訓夏？」

「びしょびしょです。……下着も」

鼻血出そう。

「クンカごめんっ、すぐに着替えた方がいいよ！」

「申し訳ない、くんかたん。かくなる上は私の下着を一式貸し――」
「それはいいです」

謝る時でさえ自分の欲に忠実な奴め。徹底しすぎなところがある
意味尊敬できるかな。

「シャワーを浴びてきます」

スツと立ち上がり、タンスの引き出しを引いて着替えを選び始める。

これはさすがに見ない方がいいだろう。女の子のタンスの中の秘密を知ってしまうば、オレは手遅れになりそうなことを仕出かしそうな気がするからな。訓夏の下着がタンスの何段目にあるのか、とか……。

「すぐ上がりますから、少しだけ待つててください」

着替えを見繕った後、訓夏はそれだけ言い残して部屋を出ていった。

訓夏の部屋に残されたのは、オレと胡桃、そして推拿の三人だ。
階段を下りる音が聞こえなくなるのを確認し、胡桃が肩を撫でおろす。

「ふふっ、冷や汗を掻いたのは久しぶりさ」

「お前は全然悪びれた様子じゃねえな」

「くんかたんの姉だからね」

それは理由になってない。

幸いなことに、床にはほとんど零れていなかった。つまり訓夏が全てを受け止めたってわけだ。訓夏自身は災難だったけど、部屋が汚れなくてよかった。

「……ああ、そうだ。私とキミは来週から高校生になるわけだが、せっかくなので二人で何か新しく研究会や同好会とやらを作ってみるのも面白いかもしれないね。どうだい、たとえば？ごみ屋敷同好会？とか」

ネーミングセンスが最悪にもほどがある。

「どんな活動するんだよ」

「ごみ屋敷で活動するのさ」

話を通じないのは毎度のことなので動じるな。

「だからどんな活動なんだよそれは」

「虹ヶ丘は中高一貫校なわけだからね、くんかたと倉紫屋の二人も強制入部させることにしようじゃないかね」

「強制なら仕方ないねっ、ボクでよければ入部するよ！」

そんな簡単に承諾しないでくれ。

このままだと、なし崩し的にオレと訓夏も入部することになっちゃうだろうが。

「別に参加するつもりはこれっぽっちもないんだが、とりあえず活動内容だけでも考えておかないと同好会ですら認定されないんじゃないか」

「そうだねえ、では人間として失格名存在である人たちが失格ではない人間になるためにごみ屋敷で日夜会議する同好会というのはどうかな？」

意味が分かん。日本語でok。

「よし、釣枝の了解を得たことだ。これで決定だな」

「待てい、いつオレが納得した！」

「はて？ …… 今だが？」

「お前の耳は節穴すぎるぞっ」

「私の耳が節穴ということは釣枝の耳は腐っているのかな？」

「頼むからまともに会話を続けさせてくれよ、胡桃う……」

もはや何も言う気にならなくなる。

まさか初めからそれを狙っていたんじゃないだろうな。相手が胡桃の場合、一度でも疑い始めたら灰色から白色になることは万が一にも有り得ないな。とにかく、このまま此処に居ては胡桃に弄られ続ける羽目になる。一刻も早く抜け出そうじゃないか。

「推拿、オレは今から実家から持ってきた荷物を整理する必要がある。だから暫くの間でいいから、胡桃と遊んでくれ」

「なっ、キミ——」

「うんっ、分かったよ！」

引き留めようと試みる手を振り切り、オレは訓夏の部屋から退散する。これでようやくツツコミ地獄から解放される。清々しい気分だよ。

「はあ、疲れた……」

溜息を吐くのも、これで何度目になることやら。

階段を下りると、目と鼻の先にオレの部屋がある。今日中に荷物を整理しておきたいところだが果たして間に合うだろうか。

「……おっ、訓夏？」

とここで、部屋の中に入ろうとした時、すぐ後ろからドアの開く音が聞こえてきた。

振り向くと、シャワーを浴びたばかりの訓夏が廊下に立っている。

髪の毛は濡れていないが、服装は一新されていた。

「え？——ふわっ」

二階で待っているはずのオレが此処に突っ立っていることに驚いたのか、訓夏は電撃が奔ったかのように体を震わせたかと思えば、足を滑らせバランスを崩す。

「危ないっ」

勢いよく廊下をダッシュし、オレは訓夏の許に駆け寄る。

手を伸ばし、それに反応した訓夏も手を差し出して来る。その手をギュツと掴み、もう片方の手を腰に回し、体を打たないように才しが回り込んで――、

「むぐっ!？」

キスをした。

「――ッ!！」

一瞬、何が起こったのか理解できなかったが、すぐに現状を把握する。

ヤバい、不運にも――否、幸運にも訓夏とキスをしてしまったようだ。

訓夏は、両目を限界まで見開いている。……瞬きするのが勿体ないと言わんばかりに、その瞳にはオレの姿が映り込んでいた。

「ご、ごめ……っ!？」

光の速度で土下座をして謝ろう、と考えたまではよかった。

だが、思いがけない幸運に舞い上がり緊張の糸がほんの一瞬ではあるが捻じれてしまったオレは、つい、やっちゃった。

訓夏とキスをした際に、接触反応を……。

「うゅゅゅっかひがmいあつっ!」

声にならない叫び声を上げた訓夏は、顔面を真っ赤にしていた。

オレの上から慌てて飛びのいたかと思えば、口をパクパクさせたまま視線を彷徨わせ、拳句にはオレを殴ることなく逃亡開始。

階段を全速力で駆け上り、自分の部屋に閉じこもろうと試みるが、あいにくと訓夏の部屋には胡桃と推拿が待ち構えている。

その結果、二階のトイレに逃げ込んで鍵を閉めやがった。

だが、オレは至って冷静だ。接触反応を行使したことによって、自分が今成すべきことを全て理解している。

「……訓夏に謝らなくちゃな」

キスをしてしまったことを謝らなければならない。けれども、オレにはもう一つ謝らなければならないことがある。それは訓夏と交わした約束についてだ。

接触反応を行使してしまったおかげで、過去にオレと訓夏との間に何があったのかを形だけとはいえ思い出すことができた。勿論、記憶の断片を覗き見たからといって、オレの記憶が戻るわけではないが、訓夏の記憶の中に映像としてしっかりと残っていたものは嘘偽りのない真実だ。たとえオレがまだ完璧に思い出すことができなかったとしても、あの日交わした約束のことを話すべきだろう。

「――なにを、謝るんだい？」

と、そこに、胡桃が姿を見せる。

いつの間に階段を下りてきたのか、胡桃はまるで階段を上らせまいとしているかのようにオレの前に立ち塞がっていた。

「胡桃、そこを退いてくれ。オレは今から訓夏に謝らなきゃならないんだ」

一步、前に出る。それでも胡桃は階段の前から退こうとしない。

「なにを謝るのかと聞いているのだよ、釣枝？」

優しくに語りかけるその姿は、今までに見たことのない胡桃を作り上げていた。

何かが、おかしい。そう思った。でも今はとにかく訓夏に謝ることが先決だ。

「思い出したんだよ、訓夏と交わした約束をな」

「……約束を、思い出した……だと？」

眉をひそめ、胡桃はオレの目を見つめる。嘘を吐いていないかと疑っているのかもしれない。だが、実際はそんなもんじゃなかった。

「――どこまで、思い出したんだい？」

胡桃は、どこまで思い出したのかと訊ねた。……何故？ どうしてそんな聞き方を？

「……いや、いい。答えなくとも別に構わんよ。どうせまたすぐに忘れることになるのだからね。ほら、こんな風に……」

「え？ ちょっとお前……ッ！？」

不意に、胡桃の右手がオレの顔に翳される。

しかし次の瞬間、オレの目に飛び込んできたのは眩いばかりの閃光に霞み取られる記憶の数々だ。つい先ほど視たはずの記憶の断片が、一つずつ姿を消していく。形を無くしていく。失っていく。

「我が家の話をした時、私が嘘ばかり吐いていたのをキミは憶えているかね？」

「な……なにを……言ってるんだ……」

手を翳されたただけなのに、オレの体は嘘みたいに動かなくなっていた。

一体全体何がどうなってるんだよ。

「あれはだねえ、キミを騙すためのフェイクなのさ。……ほら、言っただろう？　くんかたんにはあるが、私には何の能力も備わっていない無力な人間なのだとさあ……？」

背筋が凍りそうになるぐらい、胡桃の姿は恐ろしく見えた。

何か得体の知れない行為を目の当たりにしているかのように――
否、これは現実だ。

「最後に一つだけ教えておいてあげるよ、釣枝。私が得た能力、それはだね……」

ラック・オブ・メモリ

「記憶の欠落――他人の記憶を自由に欠落させることのできる能力さ……」

まがいた
「瞼が重い。徐々に意識が遠のいていく。」

せつかく思い出したのに、オレはまた強制的に忘れることになる。今、何が起きているのかを理解しているのに、それを止めることができない。記憶の一つ一つがゆっくりと壊れていくのを実感するしかない。

……でも、何故だ。

胡桃は何故、オレの記憶を欠落させるのか。

思考しても明確な答えは導き出されない。たとえ真実に辿り着い

たとしても、同じことだ。どうせまた胡桃の手によって忘却させられる。

「なん、で……そんな顔を……するん、だ……っ」

霞が掛かり、目の前が真っ暗になる直前、オレは悲しげに微笑む胡桃の顔を見た。

どうして泣きそうになっているんだ。オレの記憶を消すのがそんなに辛いことなのか。

「……釣枝、キミは何も知らなくていいのさ、……そう、なんにもね……」

耳元でそつと呟き、喉を震わせる。

心を覗かれたくないのか、顔を見られないように隠してしまう。

やがて、オレは完全に目を閉じる。暗闇に支配された世界で、最後に届いた言葉――、

「おやすみなさい、ひーくん……」

ああ、これもまた忘れるんだろうな――…

【幕間（くんかたん劇場？）】

「おやおや、侵害だねえ？ キミにそんなことを言われる筋合いはないはずだよ？ 何故ならキミは「ハアハア……くんかたん可愛いよくんかたん……萌えー！」とか心の中で叫んでいるのだろう？」「バカか、そんなこと考えるわけがないだろ、いったいどこの変態だよ」

「はて、キミは変態じゃなかったのかい？ 私はキミと再会して以来ずっとそのつもりで接してきたのだがね」

「……」

「ん……訓夏？ なんか顔赤いぞ、どうしたんだ？」

「なんでもないです。喋らないでください、耳が潰れますから」「ひでえっ！」

あわわわっ、危なかった！

まさかわたしが比念大好き比念最高比念あいらぶゆーですっ！とか心の中で叫んでるのがバレたのかと思って焦っちゃったじゃないですか！ っていうかお姉ちゃんばかり比念と喋っててずるいです！ わたしももっと比念先輩と喋りたいのに！ それに比念ももっと気を利かせてほしいですっ、お姉ちゃんと喋ってるなと思ったらいきなり話し相手をわたしに変えるとか不意打ちすぎて気が動転するですよ！

ああもうつ、本心じゃないのに耳が潰れるとか言ったりしてっ、わたしは人類史上類を見ないほどのバカバカバカッ！ 耳が潰れたら比念がわたしの声を聞けなくなっちゃうでしょうがっ！

それってどんな罰ゲーム！？ わたしの声が聞けなくなるなんてどんな罰ゲームッ！？

誰でもいいからこつそりとわたしに教えなさいですっ！

わたしの声が聞けないなんて比念にとって不幸以外の何物でもないってば！ そんな冗談わたしが絶対に許さないんですから！ だから耳が潰れるなんて論外！

というわけで比念は耳の代わりに何か身に着けてるものをわたしに寄こすこと！ そうですね、たとえばこれとかどうかな。さつき比念の部屋を物色した時にほんの少しの間だけ借りる予定で貰ってきたＴシャツとか。

べ、べべっ別に盗ったわけじゃなくてあくまで借りてきただけだから犯罪とかそんなんじゃないんだから勘違いされても困るですよ？ でも比念になら勘違いされてもそれはそれで大変なことになっちゃいそうで実際に暴露してみたく……スンスン。……ふわぁ……。

………はっ！？

やや、やばい、軽くトリップしてたですっ。

ううむ、これはわたしの宝物にしておきましょう！ 誰にも見つからないようにちゃんと隠しておかなければいけませんね……。よしっ、これで大丈夫です。Ｔシャツの代わりとして、比念にはわたしがいいつも身に着けている衣類の匂いを好きなだけ嗅がせてあげますから、是非ともわたしのそばに近づいて思う存分に堪能するですよ！ 比念がわたしの匂いを嗅ぎ回している間中、わたしはずっと耐えて耐えて耐えまくりますから安心してください！ 決して通報するようなことはしません！ 比念を逮捕していいのはわたしだけなんですから当然です！

というかこんなことをしてる場合じゃなかったです。早くシャワーを浴びて着替えないと比念の顔を見ることができません！ 今まですっ和我慢してきたんですから、これからはずっと比念のそばにいるんですっ、学校にいる時でも休み時間になる度に会いに行きますから、待っててくださいよね、比念ッ！ ……いえ、むしろ比念が会いに来た方がわたしとしては嬉しいんですよね。でもでも朴念仁の比念に乙女心が理解できるか不安なのも事実です。わたしの気

持ちを全く理解してくれていないのはもはや誰の目にも明らかですし、もう少し努力してもらわないと困るです！

わたしの目の前で推拿といちやいちゃするとか…… いちやいちゃするとか…… つ、推拿といちやいちゃするとか…… つ！ トンカチってどこにありましたっけ……？

推拿だけじゃなくてわたしにも手取り足取り教えてくれたっていいじゃないですか！

わたしが初心者じゃないからって推拿にばかり囁いたりするなんて不公平すぎます！

もつとわたしを見てくださいっ！

もつとわたしのそばにいてくださいっ！

もつとわたしの匂いを嗅いでくださいっ！！

そして比念の匂いを嗅がせてくださいっ！！

……ふう、シャワーで頭を冷やしました。正確には温めたんですけどね。

でもこれでほんの少しだけ冷静になることができそうです。胸のドキドキも落ち着いてきましたし、早く比念の顔を見に行かないと――、

「え？ ——ふわっ」

なんで比念が此処にっ？ —— あっ、すべっ……。

「——ッ——」

ひ、ひね…… ひねんと…… きっ、き…… きっ きききききっ、キス、しちゃった……っ。

「——そんなところに突っ立ったままで、キミはいったい何をしているのかね？」

声が聞こえた。その瞬間、オレの意識が覚醒する。

「……え、あつ、……あれ？ オレは……んん？」

なんで廊下にいるんだ。しかも胡桃がそばにいるんだが、どういうことだ？

「間抜けな顔をしているようだが、荷物の整理は終わったのかい？」

「あ、ああ……、そっか、そっか、そのつもりで一階に来たんだよ……な？」

「勿論だとも」

くくつと喉を鳴らして、胡桃が微笑んだ。

とんでもないほどのド忘れをかましたオレがそれほどおかしかったのか、胡桃は視線を逸らして何度も小さく頷いている。その反応は何だよ。

「まだ終わってない……というか何もしてないな」

「ふむ、どうやらキミは無駄な時間を浪費する達人のようだね」

嫌な達人認定をされたものだ。こんな不名誉な称号は胡桃に譲ってやるよ。強引にな。

「キミがよければ私も手伝おうか？」

逸らしていた目をオレに向けて、胡桃が小首を傾げる。

「……ん、そうだな、……いや、ちょっと待て、やっぱりそれは遠慮しておくかな。居候の分際でプライバシー的なことを主張するのもなんだけどよ」

「エロス関連の物をたんまりと持ち込んでき——」

「それはない！」

身の潔白を訴えるかのように、堂々と言い返す。……まあ、真実は黒なだけだな。

飯にその手の類の物が胡桃に見つかった場合を想像してみるがい。以後、何時如何なる時でさえも、常にかかわれながら生活していかなければならない未来が待ち受けているはずだ。それがまたほぼ確定事項だから非常に困っている。その未来だけは絶対に避けるべきだ。男の尊厳を守るため、たとえ何があるうともな。

「それよりもだが、キミはくんかたんに謝らなくてもいいのかね？」
「へ？ 謝るって……何をだよ？」

胡桃は急に話題を変えて、訓夏の名前を口にする。

「キスをしたのだろうか？ まさか同意の上だったわけではあるまいね」

「……キス？ ……あつ」

そうだ、そうだった。

オレが何故廊下に出たのか、今ようやく思い出したぞ。シャワーを浴びて洗面所から出てきた訓夏と鉢合わせたオレは、滑って転びそうになった訓夏を助けるためにキスをしたんだ。

……今の言い方だとオレがただの変態のように聞こえるかもしれないが、至って紳士的な行為なので誤解はしないでもらいたい。何度でも言うがオレは変態紳士なのだからな。

「見てたのか、お前」

「じつくりねつとりと、それはもう」

艶めかしく舌を動かし、肯定する。

くそつ、今後ゆすりのネタとして機能しそうで不安だ。

「つ、ああくそつたれが……、誰にも言うんじゃないぞ、いいな？」
強引に、返事を待たずに言い捨て、オレは階段に足を掛ける。

「善処しよう。キミが私の玩具になると誓うのであればだがね」

嫌な台詞が背中越しに届いたような気がしたが、あえて聞こえなかった振りをして階段を駆け上がる。そして訓夏の部屋へと戻った。

「あれ、訓夏は？」

「さっきトイレに行ったよ？ 漏れそうだったのかな？」

部屋の中には、推拿がいた。

だが何故かな、ロープで縛られているんだが。

「ああそっか、ありがとよ。……ところでお前は何をしてるんだ？
新手のSMプレイか何かか？」

「コトネーに目を瞑れって言われたから瞑ったらさ、縛られちゃったんだ！……ってというかSMプレイって何？面白いの？」

嬉々として返事をするな、推拿。お前は変態か。……否、SMプレイを知らないような純粹無垢な女の子だったな。すまない。

「推拿はまだ知らなくていい。んじゃ失礼する」

「あつ、待つてよ変態のお兄さんつ、ボクを解いていつてよー」

部屋から出て、すぐにトイレの前へと駆け寄る。鍵の部分を確認してみると、青から赤い模様が変わっている。つまりこの中に訓夏がいるってことだ。

「訓夏ッ、オレだ。ドアを開けてくれっ」

「変態ですか比念はっ」

訓夏としては珍しく、多少語尾が強めな口調で返事をする。そりや当然か。トイレの中にいる女の子に対して、ドアを開けて出てこいって言うなんて、変態すぎてフォローできないからな。

「ああ、オレは変態だ。だから開けてくれっ、今すぐ訓夏の顔を見て謝りたいんだ！」

「——ッ」

ガタガタッ、ゴツッ、とトイレの中で物騒な音が聞こえた。まさかオレの台詞に動揺したわけでもあるまいが、何らかの反応を示してくれたのは確かだ。

「……大丈夫か、訓夏？」

「ひ、比念に心配されなくても、わたしは別に便座から落ちて頭を打つような間抜けではありません……いっ」

なるほど、つまり便座から落ちて頭を打ったんだな。分かりやすい説明を感謝するぞ。

「そっ、か。……だが、オレはそう言われてはいそうですかと簡単に諦めるような人間ではないんでな、今すぐにでも訓夏の顔を見さ

せてもらっぞ！」

かっこつけたようできて、実にかっこ悪いことを行動へと移し始める。そうしなければいつまでたってもトイレから出てこない可能性もあるからな。

「……え、えっ、……ええっ？ ひねっ……ちよつとなにを……っ」
指の爪で強引に、鍵の部分の開錠を試みる。変態のオレにかかれば、こんなやわなドアはあっという間にロックを解除することが可能だ。

「あ、ダメですっ、開けな……いで、くださいっ」
「だが断るうっ」

赤い模様から青い模様へと切り替えることに成功したオレは、すぐさまドアノブへと手を掛ける。訓夏の抵抗を異ともせず、思いつきり回してドアを引いた。

「——あ」

そして、見た。

ショートパンツと、白と黒のドット柄の下着を足首に絡めたまま、前かがみの姿勢でドアの前に立ちすくむ訓夏の姿を……。

「ひ、……ひっ、いっ」

顔だけでなく、全身を真っ赤にした訓夏は、両手で股間を隠したまま、声にならない悲鳴を上げる。……オレ、今此処で死ぬかもしれない。だって殴られてもいないのに走馬灯のようなものが見えるんだぜ、不思議だろ……？ はい、死亡フラグが立った。

「ドヘンタイッ……！」

その声を合図に、オレの視界はフェードアウトを余儀なくされた。

——遠い昔のお話。

今から九年と四十八日間前の些細な出来事。

ぼくとぼくの両親は、夏休みを利用して架織乃家に遊びに来ていた。

架織乃家にはぼくと同じ年の女の子が一人と、一つ年下の女の子が一人いて、ぼくは年下の方の女の子——架織乃訓夏と一緒にカードゲームで遊んでいた。

「——これとこれをつかって、そのカードをパワーアップすれば、このユニットをたおすことができるようになるんだ。ほら、すうちがたくなるだろ？」

「……ん。ほんとですね。そーいうしくみのあそびなんです、カードゲームって」

今までに一度もカードゲームで遊んだことのない訓夏に、ぼくは遊び方を一から教えていた。初めのうちは乗り気じゃなかったけど、実際に遊んでみることでカードゲームの面白さに気付いてくれたのか、今では熱心にぼくの説明を聞いている。

同じクラスにはカードゲームで遊ぶ友達がいっぱいいるけど、その中に女の子は一人もいなかったから、訓夏が楽しそうにカードゲームで遊ぶ姿を見るのはなんだかとても新鮮な気分で、ぼくも不思議と嬉しくなっていた。

カードゲームで遊んでいると時間があつという間に過ぎてしまい、ぼくはお父さんとお母さんからお風呂に入りなさいと言われた。

ぼくは自分のカードをデッキケースに直した後、洗面所に行って服を脱ぐ。髪の毛と体を洗って湯船に浸かり、のんびりと寛ぐことができた。

お風呂から上がって居間に顔を出してみると、着替えを手にした訓夏がぼくの帰りを待っていた。今からお風呂に入るんだろう。入れ替わりで訓夏が一階に下りて行き、ぼくは扇風機の前で涼みながら遊ぶため、デッキケースを探した。……でも、どこにもない。

どこに置いたっけ、と何度も頭を捻り、ようやく思い出す。そういえばズボンのポケットに入れたままだった。

ズボンは、洗濯機に入れてしまった。もしデッキケースの存在を

忘れたまま洗濯していたら、ぼくの大切なカードが水に濡れて皺くちやになるところだった。

危ない危ない、早く取りに戻らないと……。

そう考えて、ぼくは居間を出て階段を下りていく。そして、洗面所のドアを開けた。

「——あっ」

声を出したのは、ぼくだ。

でも、声を出した時には既に手遅れだった。

「——ひっ、ひね……んっ」

洗面所には、真っ裸の訓夏が立っていた。

ドアが開いた音に驚いたのか、背を向けていた体をくると反転させて、真正面から全てをぼくに見られてしまう。でも、ぼくの視線はもう一つ、別のものを映し込んでいた。

「……それ、ぼくのデッキケース？」

訓夏が手にしていたもの、それはぼくの大切なデッキケースだ。ズボンのポケットに入れていたのに、どうして訓夏が持っているんだろうか。

全裸を見られ慌てふためき頭が混乱しているのか、訓夏は何故か言い訳を始める。

「あっ、あのっ、せんたっきの中に、ひねんのデッキが……あつて……っ」

なんだろう、まさか自分が全裸だつてことに気付いていないわけではないはずなんだけど、訓夏の関心はむしろ洗濯機の中に向いているような気がする。現に訓夏は、ぼくに話しかけると同時に、何度も洗濯機の中に視線を向けていた。

「……あー、えっと」

とりあえず、何か気の利いたことを言った方がいいかもしれない。そう思ったぼくは——、

「チンコ、ついてないんだね」

と呟き、真っ裸の訓夏にローキックをお見舞いされた。

「あ、ちよつとまつてよ！」

阿呆なこと言つたせいで、訓夏に止めを刺してしまつたんだろう。訓夏は一糸まとわぬ姿のまま、裏山へと泣きながら走り去つてしまつた。勿論、放つておくことなんてできない。ぼくにも多少の……ほとんどの責任がぼくにあるはずだから。

夜の帳が下りて、辺りが静かになつた時間帯に、ぼくは訓夏の足取りを辿つて裏山を駆け上つていく。ある程度奥へと走つてみると、小さな祠のようなものを見つけた。……いや、あれは神社だ。あまり上等じゃないけど、鳥居もしつかりと作られている。

幸いなことに、地元でもあまり参拝客の少ない穴場的な神社だったみたいで、此処に辿り着くまでに誰ともすれ違ふことはなかつた。訓夏は、誰にも見られずに済んだんだ。

「はあ、はあつ……見つけたよ、くんか」

鳥居をくぐつて更に奥へと進むと、建物の陰にしゃがみ込んで震えている訓夏の姿を見つけた。泣いているみたいだけど、無事でよかった。

でも、なんだか気まずい。それもそのはず、ぼくは訓夏の全裸を見てしまつたんだ。

どうすれば許してもらえんだろうか。

……ぼくが頭を悩ませていると、訓夏がぼつりと呟き声を上げた。「……はだかを、見られたです。もう……およめに、いけなくなりまして……」

小さな小さな女の子の尊厳を粉々に砕いてしまつたのは、ぼくだ。つまりぼくは、責任を取る必要がある。

自分自身に問いかけ、その言葉を紡ぎ出す決意を固めた。

「……それじゃあ、ぼくがせきにんをとるよ」

「せきにん……つて、どうやって……とるですか？」

ぼくの言葉に疑問を抱き、訓夏は俯けていた顔を上げる。

「こつやるんだよ」

訓夏の目の前にしゃがみ込み、小刻みに震える小さな体をそつと

抱きしめる。

そして、ぼくはおでこにキスをした。

「ぼくが、くんかのおよめさんになってあげる！」

「……およめさんになれるのは、女の子だけです」

かつこよく決めたはずなのに、ほんの少し台詞を間違えたただで大恥をかいてしまった。

恥ずかしさで顔が赤く染まっていくのを感じたけど、でもそれは訓夏も同じだ。

「うっ、……それじゃあ、えっと……なんだっけ」

「おむこさんですか？」

「そう、それっ、ぼくはそれになる！」

元気よく、宣言する。

神社のすぐそばで、訓夏のお婿さんになることを誓ってみせる。

「……ちかうですか？ ぜったいぜったい……ちかうってちかうですか？」

不安げな表情を覗かせながら、訓夏が問いかけてくる。

「ちかうよ、このじんじやのかみさまにちかつて」

その言葉を合図に、ぼくに抱きしめられた訓夏は瞳を閉じる。

何も見えないはずの世界をちよこつとだけ刺激するのは、すぐそばで訓夏を抱きしめるぼくの唇だ。

そつと、訓夏の柔らかい唇に触れてみる。たったそれだけのことで心臓が飛び出しそうなくらい波を打ち、もう何も考えられなくなってしまう。

「……ひねんは、いいにおいがするですね」

重なり合った唇をゆっくりと離すと、訓夏は名残惜しそうに手で触って感触を確かめる。

それから、抱き着いた時についたぼくの匂いを吸った。

「においが……？ そっか、それならこんどぼくがくんかと会える日がくるまで、ぼくのおいをおぼえておいてよ」

夏が終われば、ぼくはまた地元に戻ることになる。それは訓夏と

の別れを意味する。

だからぼくは、もう一度訓夏と再会できるように、約束を交わすことに決めた。

「はい、わかったです。まかせますよ。……でも、そのかわり……そのときは……」

上目遣いにぼくの姿を瞳に映し込み、訓夏は条件をつける。

「わたしと、けっこうんするですよ——……」

【5・2】

目が覚めると、オレは自分の部屋で横になっていた。

「——ん、……くっ」

ゆっくりと瞼を開き、少しずつ明るさへと慣らしていく。夢を見ていたようだが、どんな内容だったのか思い出すことができない。まるでその部分だけ記憶が欠落したかのような錯覚すら覚えさせる。やがて通常通りの視力が戻ったことを確認すると、オレは上体を起こして首の骨を鳴らす。それから、オレをこんな目に遭わせた当事者へと視線を向けてみた。

「……お目覚めですか、比念」

ぶすつとした表情で言い捨てるのは、当然と言つべきか、訓夏だった。

どうやらまだ怒っているらしい。……まあ、お花を摘んでいる最中に鍵をこじ開けられて乱入されたら誰でも怒るよな。オレだって怒るに決まってる。

というか恥ずかしすぎてお嫁にいきませんっ。

「お、おう……、お目覚めました」

「もう一回殴つてもいいですか？」

「すんませんっ」

光の速度で土下座を試みるが、軽い立ちくらみ的な症状によって、そのまま横にずっこける。なんて情けないんだ、土下座の一つも満足にできないなんて、オレに生きる価値があるのかお尋ねしたい。

「……ふう、もういいです。終わったことですし」

「ほんとに!？」

「なんで嬉しそうな顔をするんですか、やっぱりもう少しだけ殴らりたいんですか」

滅相もない。あいにくとオレはMじゃないんでな。

体勢を立て直し、正座を組んで訓夏と向き合う。

「訓夏、さつきは悪かったよ。その、出会いがしらとはいえキスしちまってさ……」

自然と、視線が床へと向けられる。相手の目を見て謝ることができない小心者だ。

キスをされるのと、トイレを覗かれるのは、果たしてどちらが恥ずかしいのか。今はそんなことを考えてる場合じゃない。

とりあえずオレがどうしようもないほどの変態だつてことが訓夏にバレたつてただけだ。とにかく許してもらえらるまで謝り続けよう。

「それだけですか」

「それだけつて……あ、あとトイレの件も！」

その件については今しがた終わったことだからと言ったじゃないか、とツツコミを入れたりでもすれば、もれなく鉄拳制裁を頂戴することになるだろう。黙っておくが吉だ。

「そういう意味ではなくてですね、わたしが言いたいの……その、

……キス……を、して、どう思ったのか……とか、あの……」

「……つまり、キスの感想？」

「殴ります」

「直訳しただけなのに暴力宣言ッ!？」

正直、殴られると言つても本気で手を出されるわけではない。加減というものをちゃんと理解してくれているので、どっかの暴力ヒロインに比べれば超がつくほど可愛いものだ。

まるで彼氏と彼女がいちゃついているかのような錯覚を提供してくれる。今この瞬間、架織乃家に居候することになったオレ自身をよくやったと褒めてやりたいくらいだ。

「その……、比喩は、わたしとキスをして、何も思い出さなかったんですか」

あえて感想を聞かずに、質問の内容を変更する。

訓夏は、オレの返事を待った。

「……ごめん、何も思い出せなかったよ」

「そうですか……」

ロマンティックにもキスをして何か思い出すかもしれないと考えていたのか、訓夏はあからさまに残念そうな表情を作る。人生つてのはそう都合よくいくものじゃないんでな。

「……っ、……ん？」

だがこの時、オレは頭の中の何処かに奇妙な引つ掛かり、違和を感じ取っていた。

なんだろうか、これは。オレは何か大切なことを忘れているような気がする。

……いや、そりゃそうだ。だって訓夏と交わした約束を忘れちまつてんだから当然だ。

違和感を覚えても何らおかしくはないはずだ。

それなのに、何故、オレはこんなにも眉間に皺を寄せているんだ。「？　どうかしましたか、比喩」

オレの様子が気になったのか、訓夏が心配そうに声を掛けてくれる。

「んー、なんでもない。……うん」

いくら考えても何も思い浮かばないのなら仕方ない。自然と思いつくようになるまで、訓夏と胡桃の二人と一つ屋根の下でのんびりと過ごしていくだけだ。

「ところで胡桃と推拿は……訓夏の部屋にいるのか？」

今此処に姿の见えない二人の名前を口にし、居所を尋ねてみる。

こんな状態に陥っていたオレに、胡桃がちょっかいを出さないと考えにくいんだがな。

「二人とも店番中です。見に行きますか？」

どうやらオレが気絶している間に、胡桃は店を開けることにしたらしい。理解不能な商品が地層の如く陳列された骨董屋もといごみ屋敷に、足を踏み入れるような珍しい客がいるのか甚だ疑問だが、しかし店を開いているだけまだマシか。

「そうだな、そこそこ調子もよくなってきたことだし」

「……痛かったですかね？」

ぴくつと耳を動かし、訓夏が問いかける。なんだかんだで気にしてくれていたみたいだ。

「大丈夫、訓夏は優しいから手加減してくれたんだろ？」

「っ、そんなこと……は、ないですけど……っ、は、早く行きますよ」

挙動不審な仕草を披露したかと思えば、オレの返事を待つことなく立ち上がり、部屋から出て行ってしまった。

「……ああいう表情も、有りだよな」

神社で見た笑顔の訓夏は、とても魅力的だった。思いつきり抱きしめたくなるほどにな。

だが、やはりオレはSなのかもしれない。訓夏の恥ずかしがる表情を見ていると、全身がゾクゾクしてくる。これが本当の変態って奴か。まあ、自覚してるから構わないけども。

体の調子は、ほぼ元通りだ。もはや何処を殴られたのか思い出せないほどだ。それはそれでオレの神経がおかしいのかもしれないが、まずは訓夏の後を追いかけることにしよう。

「おっす、仕事してっか？」

トントントンッ、と一定のリズムで階段を下りた後、暖簾を捲つて三人の姿を視界に捉える。……が、そこには訓夏と胡桃、そして推拿の他に、もう一人いた。当然と言うべきか悩むところだが、そこにいたのは女の子だ。

「仕事ですって？　なんでわたくしがっ」

四人目の人物は、顔を合わせるや否やいきなりオレに食って掛かる。此処に来てからというもの、何故にオレはトラブル続きなんだ。

「え、ああ……いや、きみに言っただんじゃなくて、胡桃に……」

物凄い剣幕の彼女に圧倒されつつ、なんとか反論しようと試みる。しかしそれを邪魔する輩が此処に存在するのを忘れていた。

「くくっ、彼が声を掛けたのは嘉須賀^{かすが}、キミではなく私なのだがね？　それなのにどうしてヒステリックにも吠えようとするのかな？

キミはお呼びじゃないのだよ？」

嘉須賀と呼ばれた女の子は、胡桃の台詞を聞くや否や地団太を踏みそうな勢いで全身を震わせる。……なるほどな、この子はオレと同じで胡桃にからかわれる対象ってことか。

「そもそも貴方ッ、今までにたったの一度も見ただことのない顔ですけど何者ですのっ」

ビシッ、と指をさされ、オレは一步後退しそうになった。これでもかと感情を表に出すところは、訓夏や胡桃にも勝^{まさ}っているだろう。

「変な喋り方だなあ、漫画に出てくる似非お嬢様みたいだ」

「なっ、なんですつてえ！」

喧嘩腰の女の子を相手に、ついつい言い返してしまった。気付いた時には既に口が動いていたんだから仕方ない。明らかに初対面の奴にそんな口調で話しかけられたら文句の一つぐらい言いたくなつて当然だ。

勿論、オレの目の前で憤怒の表情を見せつける彼女が機嫌を損ねたのは言うまでもない。

「う、くくっ、あははっ、言われてしまったねえ、嘉須賀？ 似非お嬢様だとさあ」

笑いを堪え切れなくなつたのか、胡桃は吹き出してしまふ。そんなに面白いことを言つたつもりはないんだが、いったい何がツボに入るのか分らないものだな。

「釣枝、キミに名探偵の称号を与えようじゃないか」

「いきなりどうした」

名探偵がなんだって。言っておくが、オレは推理とか苦手だからな。

「キミは嘉須賀の姿、そして喋り方を耳にして、似非お嬢様と称したね？ それはまさにその通りなのだよ。何故なら嘉須賀は、幼い頃から好きだった少女漫画に出てくるお嬢様に憧れてしまい、そのキャラクターの喋り方を真似するようになったのさ」

「っ、ちよつと、かつ、架織乃さんっ、こんなところでわたくしの

秘密を暴露しないでもらえるかしらっ」

「ふふふ、みなが知ればそれは秘密ではなくなるわけだからねえ、それはつまり嘉須賀、キミの秘密を喧伝したとしても暴露にはならなくなるということに――」

「ならないに決まっているでしょうっ」

そりゃそうだ。というか胡桃が何を言っているのか理解できない。……いや、理解したくねえの間違いか。胡桃の言い分を認めてしまつたら、オレにまで被害が及びそうだ。

「落ち着きたまえ、嘉須賀。情緒不安定なのは釣枝にとってマイナス評価だぞ？ キミたちは初対面なのだからもつと第一印象を良くしなければフラグの発生条件を満たすことが不可能になり濡れ場に突入しにくいさ」

「っていうかオレを勝手に巻き込むじゃねえっ」

マイナス評価だとかフラグ発生だとか拳句には濡れ場だとかエロゲーみたいなことを堂々と口にしゃがって、胡桃には羞恥心というものが存在しないのかとお訊ねしたい。

「おや、突入したくないのかい？」

「……う、え」

くるつと椅子を半回転させて、胡桃がこちらを向いて問いかける。確かにオレは突入しないとは言ってない。だがそれは男としての潜在意識的なものが発生したに過ぎないわけだから、追及され即答で断るなんて荒技はオレには無理だった。

「比喩……、嘉須賀先輩がいいんですか」

すぐ横に佇んでいた訓夏が、ぼそりと呟く。……おお、お怒りモードのご様子で。

まるでオレが今此处で出会ったばかりの女の子に惚れちまっただ直線に濡れ場へと特攻する野郎みたいな疑念を抱いているような目で見ないでくれっ。

「ちが、違うぞっ、オレはだな、この子……えっと、嘉須賀って子よりも……はっ！？」

此処にいる、とある女の子の名前を言おうとして、慌てて口を閉じる。

危うく名前を出ところだった。下手したらオレの人生が此处で終わっていたぞ。

「ぐっ、……貴方ッ！ わたくしを侮辱するとはいい度胸をしていますわねっ」

オレの発言に腹を立てたのは、嘉須賀だ。初対面の変態野郎に勝手にフラれてしまったと思い込んでいるのかもしれない。オレとしてはえらい迷惑だ。

「いやだから「してしますわね」とか言い辛くねえのかよ？」

「うっ、うっうっ、……くうっ」

唸る。どうやら本人も少しは自覚しているらしい。

でもそんなに悔しがらなくてもいいと思うんだが。……ぶっちゃけ恥ずかしいのか。

「やれやれ、キミたちの相手をしていると疲れてしまうさ」

「お前が言うんじゃないやねえっ」「貴方が言わないで頂戴ッ」

ハモることはなかったが、この時ばかりはオレと嘉須賀の意見が一致した。

「とりあえず二人とも自己紹介でもしたらどうだね？ お互いの良いところや悪いところを知ることによって新たな恋が芽生える可能性も否定はできないだろう？ ……まあ、その時は全力で阻止させてもらうがね」

付き合わせたいのか付き合い合いたくないのかはつきりしない奴だな。しかしまあ、いい加減に自己紹介ぐらいはした方が良さそうだ。軽く咳を吐き、ゆっくりと視線を移し替える。既に嘉須賀はオレの方を向いていた。

「……あー、釣枝比念だ」

まず、名前を教える。それから先は何を言うべきか。……悩む必要もないか。

「今日から三年間、架織乃家に居候することになった」

「いつ、いい居候ですって!？ …… ちょ、つと架織乃さん？

貴方ッ、…… その、男の方を住まわせるつもりですか？」

「ざつつらいと。毎夜が待ちきれないさ」

「んなっ！ それはどういう意味ですか？」

「嘉須賀、キミが考えてる意味の通りだが」

「ふっ、不潔なっ！ なんて不潔な行為を…… っ、貴方は、まだっ、高校生にもなっていないのですわよ？ そのことを理解していますのっ？」

「あー、どうでもいいけどオレを無視するのは止めてもらえますかね？」

悲しくなってくるんだよ。

今のやり取りを見られていたのが恥ずかしかったのか、嘉須賀は拳動不審な態度をもつて反応する。やっぱりお嬢様というには無理があるか。顔とスタイルは抜群なものにな。

「そんでもって、春から虹ヶ丘高校の一年生だ」

「貴方が…… 虹ヶ丘高校の生徒ですって？」

オレが虹ヶ丘高校の生徒だということに驚いたのか、嘉須賀は目を丸くする。そんなに驚くようなことでもないのに大げさな奴だな。「虹ヶ丘高校の…… ということは、わたくしと同じ学校なのですね？」

いやいや、同意を求められてもオレは嘉須賀とは初対面なんだから返事できるわけないだろうが。それぐらい気付いてくれよ、似非お嬢様さん。

「あー、その言い方から推測すると、キミも虹ヶ丘高校の生徒ってことになるのかな？」

面倒なので質問を質問で返す。愚問すぎて答える気にもならない。「ええ、そうですわ。わたくしは虹ヶ丘中学校に通っていましたが、エスカレーター式に高等部へと進学しましたよ」

どうだ驚いたか、と言いたげに鼻を鳴らし、顎を上げてオレを見下ろそうと試みる。せめてオレより身長が高くなってから試してく

れ。

「へえー、そつか。そうですか。んで、キミの名前は？」

手早く済ませるため、多少早口でバトンを渡す。

んっんっ、と咳をして、嘉須賀は喉を整えた。

「……わ、わたしくっ！……っ、わたくし、はっ、嘉須賀名季なきと申しますわ！」

「今、噛んだ？」

「ななななんのことがしら？ 噛んでいませんことよっ」

これはまた非常にからかいがいのある性格をしているな。胡桃が退屈しのぎと言わんばかりにちゃちゃを入れるのも納得だ。

名前を教えてもらい、オレは改めて嘉須賀名季という人物を観察してみた。

嘉須賀は、綺麗に整った黒髪を腰の辺りまで伸ばしている。前髪は眉毛の上で横一線に切り揃えられていて、なんだか少し子供っぽさを象徴させているかのようだ。

お嬢様と呼ぶには仕草や性格、態度や口調が全くもって見合わないのが致命的ではあるが、それを補って余りあるほどに端麗な容姿をしている。いわゆる、万人受けするタイプの顔って奴なのかな、致命的な部分を露呈さえしなければ、恐らくは一つの学校単位で計算してもトップクラスの美貌を誇るはずだ。更に言えば、洗練されたかのような色っぽい体つきが、男性諸君の心を驚掴みにするのはわけないだろう。特にふくらはぎの辺りが妙に肉付きがよく、それよりもほんの少し視線を上に向けてみれば、柔らかそうな太ももがオレの変態心をくすぐり続ける。……触りたい。っていうか揉みたい。

……くっ、落ち着けっ、オレの中に燦るもう一人のオレ……ッ。
さて、訓夏に殴られそうな気がしたので、そろそろ止めておこうか。
「親しみを込めて下の名前で呼ぶことを特別に許して差し上げますわ」

「そりゃどうも、名季ちゃん」

「なつ、名季……ちゃんつ、ですって!？」

琴線の緩い奴だ。いちいち怒っていると自称お嬢様が台無しだぞ。

「……ん？ 嘉須賀……名季？」

ふと、あることに気付いた。どうしようもないほどに些細なこと
なんだけどな。

かすが、なき、かすがなき、なすがかき……、なかが……すき……
……なかがすき……。

「中が好きっ!？」

「バカ——ッ!!」

オレの脇腹にハイキックが炸裂——寸前、思わず手で受け止める。
伊達に訓夏に鍛えられてないぞ。自分で言いつつ情けなくなるけど
な。

「わっ、ひゃあっ」

片足を取られてバランスを崩した名季は、オレに片足を預けたま
ま倒れた。

……おう、丸見えだ。太ももはおろか、更に上の部分まで全て、
くつきりと。

「へえーっ、嘉須賀嬢は真っ白なパンツを穿いてるんだねっ」

推拿の口撃が、名季の顔を真っ赤に……否、憤怒に染め上げる。

故意ではないとはいえ、さすがにそれは言わない方がよかったん
じゃないかな。

……因みに多少の説明を付け加えるとすれば、白い布地に赤と青
のラインが可愛らしく刻まれていたのをオレは見逃さない。網膜に、
そして脳裏にしっかりと焼き付けた。このご恩は決して忘れること
はないだろう。変態の神様、いつもありがとうございます。

「み、見ましたわね……わたしくっ、……わたくしの……を……っ」

また噛みやがった。喋り方を変えればいいものを意固地な奴め。

「見たくて見たわけじゃないぞ」

「酷いっ、貴方はそれでも男の方ですのっ!？」

何に對して、それでも男なのか、と叫んだのかお尋ねしたい。ま

あ、見たくて見たわけじゃないけど、見てもいいなら思う存分見てやるけどな。だってオレ、変態だもん。

「大丈夫か」

このままからかい続けてみたいという衝動に駆られながらも、オレは手を差し出してみる。なんせオレはただの変態野郎ではなく、変態紳士なんだからな。

両手を使ってスカートの裾を懸命に伸ばしにかかる名季は、目の前に差し出された手に視線を向け、あからさまに嫌そうな表情を浮かべやがった。

「……罨ですわね」

「なんのだよっ!？」

やはりと言うべきか条件反射でツツコミを入れてしまい、名季はビクツと肩を揺らした。

「どうせわたくしに恩を売ってその見返りに変な要求をするのでしよう?」

そんなことは初めからお見通しよ、と似非お嬢様風に言い捨て、オレの手を借りることなく立ち上がった。初対面の人間を変態扱いしやがって……まあその通りなんだけだよ。

「ああもつたいないね、せっかく釣枝とのフラグが発生しそうだったというのに」

「胡桃、お前はとりあえず口を閉じてろ」

「はっは、またまたご無体を」

くつくつと笑みを零し、胡桃が首を横に振ってみせる。無体と言いつつ切るところが胡桃らしいけど、もう少しでいいから譲歩する素振りを見せてくれてもいいんじゃないかな。

「それで、自己紹介はもう終わりってことでいいのか?」

再び、オレは視線を名季へと移し替える。

すると名季は、眉を顰^{しか}めて胸の前で腕を組んでみせる。しかし残念かな、どこからどう見ても気品溢れるお嬢様には見えなかった。

「貴方がよろしいのでしたら、わたくしも構いませんことよ」

フンツ、と捨て台詞のようなものを吐いて、名季は視線を逸らしてしまった。

最初から最後まで頑張ってお嬢様を演じているところ悪いんだが、オレは今日お前が穿いている下着の色を知っている。今更取り繕っても手遅れだ。

「さて、二人の自己紹介も終わったことだし……嘉須賀、キミは帰リたまえ」

「なんですって!？」

また出た、本日何度目かのなんですって発言が。

「ちょ、ちよつと架織乃さん？ どうしていきなりわたくしがそのようなことを言われなければならないのかしら？ しっかりと説明して下さりますか？」

腑に落ちないのか、名季は胡桃に問い訊ねてみた。でも、聞くだけ無駄な気がするけどな。だって相手はあの胡桃なんだから。

「よく考えてもみたまえ、この物語は既に九十七ページに突入しているのだよ？ それだけ終盤に差し掛かっているというのに、今更ここで新キャラを投入しても無駄だろう？」

「わたくしの存在全否定ッ!？」

「その前にページ数とか言うんじゃないっ」

今までに築き上げてきた世界観が全て台無しだっ。

「そもそも嘉須賀は……じゃなくて名季は何か用事があってきたんじゃないのか？」

助け舟を出してやると、名季はオレを見て「そうですわ、その通りですわ」と同調し、架織乃骨董屋の店主を指さして胸を張った。

「架織乃さん、貴方のペースに吞まれてしまい要件をなかなか伝えることができませんでしたけれども、今此处ではつきりと宣言させて頂きますわ」

「何をだね？」

椅子の背もたれを後ろへと伸ばしつつ、退屈そうに欠伸をしながら反応する。

その態度が癪に障ったのか、名季はご機嫌斜めだ。

「中学時代は何もかも貴方に敵うことができませんでしたけれども、これから先は違いますわよ。高校生になってパワーアップする予定のわたくしに思う存分ひれ伏す機会が訪れることでしょうね！ わたくしはその時を楽しみにしておきますわ！」

ほほほほつ、とワザとらしい笑い方を披露し、名季は満足げに腕を組んだ。

それを横目に見つつ、小者感というか脇役臭というか、名季に似合う言葉を模索中。

……ああ、噛ませ犬も捨てがたい。しかし一番似合うのはやはり似非お嬢様かな。もう少し喋り方を練習してから出直してこいと言ってみたい。

「ふむ、つまり嘉須賀、キミは中学時代に負け犬街道を突っ走っていた情けなくも恥ずかしい黒歴史的な過去を私以外の人間に知ってもらいに来たという解釈でよいのかね？」

「よくありませんわっ」

名季は否定しているが、結局のところ図星を突かれたのは言うまでもない。

オレが解釈しても胡桃と同じ意見に落ち着くからな。

「釣枝、今日は特別に嘉須賀の暗い過去をダイジェスト風に紹介してあげよう」

「していいのかよ」

「だっ、ダメに決まっていますのっ」

慌てふためく名季をよそに、口角を上げて意地悪く笑みを浮かべる。

胡桃には悪役がお似合いだ。それだけは誰にも否定できないだろう。

「私が初めて嘉須賀と出会ったのは、確か虹ヶ丘中学校の入学式の――」

「何故いきなり嘘を吐きますのっ、貴方と私は幼なじみでしょう！

？」

「……あ、そういえば隣の家に誰か住んでいたような気もするさ」

「酷い！」

「確か名前は……嘉須賀^{なぎ}凧」

「妹ッ！ それわたくしの妹ですよ！」

「へえー、名季にも妹がいるんだな？ オレにも性格の悪い妹がいるんだよ」

「それは奇遇だね、釣枝。私にもくんかたんという世にも可愛すぎる妹が——」

「わたくしの話はもう終わりですよっ！？」

幼なじみという設定すら否定された名季に、果たして何が残るというのか。

正直、可哀想になってきた。

「その頃の嘉須賀は、まだ今のようなかからかいがいのある喋り方をしていなかったさ。だが、虹ヶ丘中学校に入学してから僅か二週間で、嘉須賀にはとある？二つ名？が与えられることになる……主に私個人から、二つほど」

名季の表情が羞恥によつて徐々に歪んでいく。最後まで黙つて胡桃の話聞いておくことは到底不可能だ。というか既に何度かツッコミを入れてたな。

「嘉須賀の二つ名、それは？^{エターナル・ナンバーツー}永遠の二番手？と——」
「うわっ、いらねっ」

思わず本音が出てしまったが、名季の額に四つ角が見えてきそうなので我慢だ我慢。

それに横文字にすれば多少かつこよく聞こえないこともない。直訳すると悲しくなってくるのが致命的だな。

「もう一つは？^{コースレス・エフォーツ}無駄な努力？という……」

「どっちも酷いな、おいッ」

どうやら無駄な努力をする奴イコール名季といった公式が、胡桃の中には出来上がっているらしい。幼なじみから？^{エターナル・ナンバーツー}永遠の二番手？

「やら？無駄な努力？呼ばわりされるなんて屈辱以外の何物でもないな。」

「どうしてそんな二つ名を付けたんだよ？」

まさか何の意味も理由もなく非常にありがたくない二つ名を幼なじみに付けたわけではあるまい。ちゃんと説明してもらわないと納得できないからな。

「なあに、それは簡単なことさ？単純にだね、嘉須賀が私よりも知識量が圧倒的に劣っていただけのことなのだよ」

「知識量？……つまり、勉強ができるかどうかってことか？」

ニヤリと微笑み、胡桃が足を組み替える。その一方、視界の端に映る名季が、両手を限界まで握りしめて拳骨を作っているのが異様だ。

「入学式に行われた実力試験により始まり、虹ヶ丘中学校を卒業するまでの三年間、全ての試験において私の成績は学年一をキープ、そして？永遠の二番手？エターナル・ナンバーツーの異名を持つ嘉須賀は常に二位に甘んじていたのだよ。私に勝つために必死で勉強しているようだが、それも全ては無駄な努力だったわけだね。これが二つ名の理由さ。理解できたかな？」

「なるほど……。ということは、名季はリベンジを誓いに来たってことか」

前者は仕方ないとはいえ、後者は決して無駄ではないけどな。たとえ胡桃には敵わなくても、勉強を頑張って損するようなことはないだろうし、何より自分自身のためになる。

「正しく、貴方の言うとおりですわ。わたくしは今度こそ必ず架織乃さんを超えてみせますの。そして見事実現したあかつきには、その時こそわたくしは虹ヶ丘高校の生徒会長としての座を手に入れることになりますわ！」

そういえば学年で一番頭がいい奴が生徒会長になるシステムだったわけ。

虹ヶ丘中学校の現生徒会長が訓夏だろ、そして前生徒会長が胡桃

になるわけだな。姉妹揃って容姿も良けりや頭もいいだなんて非の打ちどころが性格ぐらいしか見当たらないぞ。

「余談だが釣枝、学年二位の成績者は副生徒会長にならなければならぬのさ」

「ってことは、名季はお前の下で扱き使われていたのか？」

「失礼な奴だね、キミは。扱き使う程度で済むわけがなかるうが」

「もつと酷いよな、それ」

生徒会での一年間、よく耐えた。お疲れさま、名季。

「憐みの目でわたくしを見ないで頂戴ッ」

オレの思考を上手に読み取ったのか、名季が苦々しい表情で言い捨てる。

名季の二つ名を紹介し終えた胡桃は、肘掛けに手をついて、深い位置に座り直す。

「さて、嘉須賀。ここで一つキミにとって残念なお知らせがある」

おもむろに、胡桃が視線を彷徨わせる。

行き着く先に映った人物は、あるうことかオレだ。

「来週より虹ヶ丘高校での生活がスタートするわけだが、それに伴い嘉須賀、キミの二つ名のうちの一つを改名する必要があるのだよ」

「改名ですって？」

名季は眉を顰めると、怪訝そうに胡桃の顔を見つめた。だが、胡桃の視線の先に映っているのは名季じゃない。オレだ。

「これから先、私が学年一であり続けるのは確定事項であるわけだが――」

確定事項と言い切れるところが胡桃らしいな。よほどの自信を持つていない限り、そんなことを公言するなんてとんでもない。頭が良すぎる奴ならではの台詞だよ。

「嘉須賀、キミが学年二位を維持することは不可能となる」

「……どういう意味ですの」

ぴきつ、と亀裂が入ったかのような音が聞こえた。たとえ冗談だとしても、今のは名季の琴線に触れてしまったんだろう。唯一のライバルと認めうる存在に、二位を維持することができなくなると言われたら当然だ。

「何故ならば、高校には変態紳士と名高い変態の中の変態、釣枝比念がいるからさ」

「え、オレ？」

「ごめん、耳が腐ったかな。オレの名前が呼ばれたような気がするんだが。」

「そうさ、キミだよ釣枝。キミがいるから嘉須賀は三位に陥落する

ことになるだろう」

「何故ですのっ」

名季がたたらを踏んだ。期待通りの言葉を貰うことができずに怒りを露わにしていた。

オレが口を挟む隙すら与えずに、名季が胡桃の許に詰め寄る。そこまでされて、ようやく胡桃が視線を移した。名季をからかうために、ワザと視線をずらしていたに違いない。

「嘉須賀、キミは釣枝の秘密を知らないだろう？ 釣枝にはキミがどれほど努力しても決して敵うことのない特別な勉強法があるのさ」
「特別な勉強法……ですって？」

じろり、と疑わしそうな視線でオレを確認する。そんな目でオレを見るんじゃないかねえ、変態の血が疼くだろうが。背筋がゾクゾクしやがるぞ。

「……貴方、今の話は本当なのかしら？」

「その前によ、さっき自己紹介したんだから貴方って呼ぶのは止めてくれないか。オレはお前のことを名季って呼んでるんだからさ」
話を逸らす意味を込めて、指摘してみる。

「っ、そんなことはどうでもいいでしょうっ」

胡桃から存在を全否定された奴がオレの名前を全否定しやがったなこんちきしょうめ。

そんなこと呼ばわりしやがって、ちょっと許さないからな。

「ああそうですか、分かりましたよ。……中が好きな子ちゃん」

「んなっ！？」 その名前で呼ばないで頂戴とあれほど言いましたのにっ、……あつ、貴方という人はどれほど人を侮辱すれば……っ」

自分で自分を弁護させてもらうが、名季は一度たりともその名前で呼ぶなとは言っていない。蹴られそうになって可愛い下着が丸見えになっただけだ。……おっと、今でも鮮明に思い浮かべることができるぜ。もし良ければアンコールをお願いできるかな。

「まあまあ、二人とも落ち着きたまえよ。特に嘉須賀……じゃなくて中が好きな子か」

「ぶっ殺すつ！！」

うおっ、口調が変わりやがった。

いきなりぶっ殺すだなんて随分と物騒なことを言いやる。

「死ねっ、死ねっ、死ねこのクズ虫がつ！」

なんてこった、これならまだ似非お嬢様の方がよっぽど可愛げがあるじゃないか。

というかオレは？貴方？から？クズ虫？に格下げかよっ。

「ちよっ、落ち着けて！ オレが悪かったからさ、中が好きな――」

「うわああああああああ――んっ！！」

どんな状況下にあつたとしても、隙あらばからかいたくなつてしまふのは、ある意味で名季の特殊能力と言えるかもしれない。勿論、オレはそんな能力は御免被るがな。

つい先ほど、名季のハイキックがオレに炸裂しそうで失敗に終わったのを思い出したのか、今度は両手を使ってポカポカとオレの肩を叩いている。

……くっ、ああいいぞ、丁度いいマッサージだ。もっとプリーズ。「気持ちよさそうな顔をしているところ悪いのだが、はたから見ればただの変態が快楽を満喫しているかのような非常に危険な顔をしているのを自覚してもらえるかな、釣枝？」

具体的な説明ありがとよ。確かにヤバいな、軽くトリップしかけていたかもしれない。

「こうなつてしまつては互いに決着をつけなければ治まりきらないだろうね。というわけでここにトランプが一式あるのだが……」

いったい何が？というわけ？なのか聞いてみたくもあつたが、この場合は素直に胡桃の提案に耳を傾けるのも悪くない。同じ高校に通う奴と仲が悪くなるのはオレとしても避けておきたいところだからな。

「トランプの絵柄当て対決を、ここに宣言しようじゃないか」

胡桃の提案としては随分と地味な対決方法のような気がするが、

これは圧倒的にオレが有利だ。……いや、有利つてもんじゃないな、オレが先攻を取りさえすれば、後攻に手が移ることなく勝敗を決することも可能だ。

まさか、胡桃は初めからそのつもりでトランプの絵柄当て対決なんてものを言い出したのか。だとすれば相当な策士だな。

「ルールは至って簡単さ、ジョーカーを含めた五十二枚のカードの中から、嘉須賀は好きなカードを一枚選択する。そしてそのカードの絵柄を釣枝が言い当てることができれば、釣枝の勝利。間違えてしまえば嘉須賀、キミの勝利ということだよね？」

淡々と説明をする胡桃を見やり、心の中で溜息を吐く。どこまでも意地悪な奴だ。

「いいえ、ダメですわ。それですとあまりにも不公平でしょう？ 確率的に考えてみても、四回に三回はわたくしが勝ってしまいますもの」

すると、確率論を口にした名季が反論を試みる。

無然とした態度で指摘してくれるのはありがたい。だが残念なことに今回お前と対決する相手はオレだ。この手の勝負に関しては、勝率百パーセントを断言してもいいだろう。

「なんなら絵柄だけじゃなくて数字も当ててやろうか？」

「……言ってくれますわね、貴方。勝負が始まってから後悔しても遅いですわよ？」

ですわよ、とか普通の人間は言わないだろうが、とツツコミを入れたいのを我慢する。

「別に構わないぞ、どうせオレが勝つだろうし」

「ッ、いいですわ、この勝負受けて立ちましょう！」

ドンッ、と右足で勢いよく床を踏み締めて、名季はトランプの絵柄当て対決を許諾した。

レジカウンター越しに向かい合い、中央に陣取る胡桃が椅子から腰を上げてトランプを切り始める。……切る必要ないよな？

「さあ、この中から好きなカードを一枚選びたまえ」

「わたくしは、このカードを選択しますわ」

似非お嬢様モード全開で、声も高々に言い放つ。

デュエリストも顔負けの選り方を見せつけた後、それをカウンタ―テーブルの上に置く。

「さあ、貴方にこのカードが理解できるかしら？」

漫画やアニメに登場するキャラクターのような台詞を口にしながら、ふふん、と鼻で笑う。その得意げな顔が数十秒後には無残なものへと変化するであろうことを考えると、ほんの少しだけ良心が痛む……けど、変態紳士としてはやはりその手の表情を拝む機会は絶対に逃すことはできないので、全力で勝ちにいかせてもらおうじゃないか。

「胡桃、触れてもいいんだよね？」

「私にかい？」

「カードだよっ」

分かりきったことを聞き返すな。

「勿論さ。カードを捲りさえしなければ、触れることはキミの自由だよ。しかしながら私には触れる以外の行為も許されているわけであるからしてキミは好きなように私を——」

「よし、オレのターンだな」

胡桃の戯言には耳を貸さないように心がけ、オレもまた名季と似たようにデュエリスト風の台詞を口にする。カードゲームで遊んでいる奴からすれば全く違和感がないはずだ。

「……え、貴方いったい何を……？」

カウンターテーブルの上に置かれたカードに人差し指と中指を乗せて、ゆっくりと目を閉じる。その仕草を見て不審に思ったのか、名季が小声で呟いた。

目を閉じると同時に、接触反応を行使する。別に指先やら全身やら光を発するわけでもないの、たとえば人の前で行使したとしても、誰にもバレることはない。

「——スピードのエースか、もっと分かりにくい奴を選べばいいの

によ」

「ッ！？　そ、そんな……何故ですのっ」

時間にして、僅か二秒。あっという間にカードの絵柄及び数字を言い当てる。

一応、捲って確かめてみたが、名季が選択したカードはやはりと言うべきかスペードのエースだった。そして、驚きを隠せないのは名季だ。まさか五十三分の一の確率を的中させられるとは予想だになかったのか、口をパクパクさせて震えている。

「すっげー、変態のお兄さんって変態なだけじゃなかったんだね！　尊敬するよ！」

訓夏と二人で勝負の行方を見ていた推拿が、笑みを浮かべながら話しかけてくる。

「ありがとよ、でも尊敬はしなくていいからな」

はつきり言うが、これはいかさまだ。オレの身を持って何度でも証明してやろう。人さまから尊敬してもらえるようなものじゃないんだよ。

真実を知ってしまえば、変態のお兄さんからいかさま野郎に呼び名が変更になるかもしれないから、こんなことで尊敬されても後が怖い。

「ふむ、さすが私が見込んだ男さ。ではでは勝者への褒美として私との口づけを――」

「推拿、胡桃がキスしてくれるってよ」

「ええー、それはちよつと遠慮しておくよ。だってボクとコトネーは女の子同士だし」

「ぐぬぬ」

裏表のない態度で断りを入れる推拿に視線を向け、胡桃が悔しそうに唸った。

胡桃に弄られそうになったら、すかさず推拿へとバトンタッチする。これが唯一の胡桃撃退法のような。今後のためにも推拿には毎日遊びに来て頂きたい。

「貴方……ッ、何故、わたくしが選んだカードを……ッ」

納得がいかないのも無理はない。だが、名季は既にどつばに嵌りかけている。……否、既に戻ってこれない位置にまで嵌っちまってるみたいだな。

絶対に勝つことのできない勝負を受けてしまった時点で、名季の負けは確定事項になっていた。此処にいる奴の中でそれを理解しているのは、オレと架織乃姉妹の三人のみ。

「なんなら、もう一回勝負するか？」

「くっ、後悔しても知りませんわよ？」

オレが何を後悔するのは是非とも教えてもらいたい。ワザと負けるつもりは毛頭ないのでありえないだろうけどな。

「いいぞ、それじゃあ好きなカードを選んでくれ」

そう言って、オレは後ろを向いた。

うぬぬ、とか、何故ですか？　とか、まぐれですわ、とか、このわたくしが負けるはずがありませんわ、とか、背中越しにいかにも負け犬のような呟き声が聞こえてくるが、あえて指摘はしないことにした。オレの体の半分は変態として、そしてもう半分は優しさで作られているような気がするからな。

「こちらを向いても宜しくてよ」

今度こそは絶対にわたくしの勝ちですわ、と付け加えて、名季は勝ち誇ったかのような笑みを浮かべている。こいつ、何か悪巧みしてるんじゃないだろうな。

ふと、視線を彷徨わせて胡桃の顔を確認する。……ああ、笑いを堪えている顔をしていやがる。名季が自信たっぷりな態度を取っているのは、お前が原因か。

「んじゃ、早速……」

カウンターテーブルの上には、一枚のカードが伏せられている。カードゲームで遊ぶ際、このような場面に遭遇することは多々あった。相手の伏せカードに触れる機会を得られるカードを中心にデッキに組み込み、必然的に勝利へと導かれる戦い方をしていた。

罪悪感がないわけではなかったが、それでもやはり勝利への欲求に勝るものは存在しない。オレは勝ち続けることを選択してしまった。

そして今、名季は負け続けることを選んだと言っても過言ではないだろう。当の本人はそのことに全く気付いていないんだけだな。

「……胡桃の入れ知恵か？」

「えっ!？」

ぼそりと呟き、確認してみる。

案の定、名季は過剰なまでの反応を示した。

「んなつ、なんのことを言っているのかしらっ？」

嘘が下手な奴だ。物凄い勢いで目が泳いでいるぞ。

ここで仮に、伏せられたカードを言い当てることができれば、ひよつとしたら化け物扱いされるかもしれない。または胡桃と共に初めから仕組まれたものだと思わせることにもなりえるだろう。

だが、胡桃の期待を裏切るわけにはいかない。家主を怒らせたりでもすれば、これからの三年間が地獄へと変わることも考えなければならぬからな。

「……ま、別にいいんだけどよ」

軽く溜息を吐いた後、オレはカードから指を離れた。

「もう終わりですよ？」

「ああ、終わりだ。オレには全てのカードが見えているんでな」

ふざけた言い回しで、名季の心に興味を抱かせる。

まさか、そんなはずはない、と思いつながら心はどこかでひよつとしたらと疑わせることが大事だ。手品師的な発想をしていけば、いざという時に幾らでも言い訳ができる。

「名季、……いや、胡桃。お前が伏せたカードはハートの1だな？」

そしてこのカードには、一つだけ細工がしてある」

間髪入れず、オレは答え合わせへと突入する。

「カードの表面に、ボールペンで+1と書き加えてあるから、本当の答えは——」

伏せられたカードを手に取り、ゆっくりと捲り上げる。その動作を、名季は驚愕に目を見開いたまま見守った。

「――ハートの2だ」

裏から表へと返されたのは、正しくハートの2のカードだった。しかもそれは、ただのハートの2ではなく、オレが言い当てたようにボールペンで+1と書き加えられてあった。

「……な、何故ですの……？　どうしてこんなことが……っ」

腰が抜けそうになったのか、名季はその場にへたり込んでしまう。その姿を見て、今日は雨が降っていないくてよかったな、床が濡れていたら着替えが必要だったぞ、なんてことを考えるオレはこの手の反応に慣れきっているに違いない。

着替えシーンが見られるのであれば、それはそれで雨が降っていないかったことを恨めしくも思うが、それはまた別の機会ということにしよう。

「ハッ、……まさか、いかさまを！？」

「したのはそっちだろうが」

顎で胡桃を指し、悪知恵を働かせた奴へと興味を移す。ニヤニヤと笑みを浮かべる胡桃は、いかにも悪者っぽい手の叩き方をして、オレに拍手を送る。

「ぶらばー、おお、ぶらばーだよ。嘉須賀をぎったんぎったんのめったんめったんにしてくれて感謝するよ、釣枝」

これ以上望むことはないと言いたげな表情で、賛美の声を上げる。

「胡桃、お前の入れ知恵だろ？」

「そうかもしれないね。否定はしないさ」

オレには初めから全てが見えているから、隠し事は不可能だ。

名季が選択したカードに触れた瞬間、胡桃が憎たらしげな笑みを押し隠しながらボールペンで+1と書き加えている映像が脳裏に浮かび上がってきた。

勿論、予め暴かれることを承知の上で実行に移したんだろうがな。面倒な奴め。

「というわけで、この勝負は釣枝の完全勝利ということになるわけだね」

まるで胡桃自身が対決に勝利したかのように、満足げに口元を緩ませる。

それを見て、名季は悔しそうに顔を歪めた。

「くっ、……いいでしょう、分かりましたわ。今回だけは、わたくしの負けを認めて差し上げます。……ですが！ わたくしはまだ貴方のことをライバルと認めたわけではありませんからね！ 高校生活が始まれば、そこは戦場と化しますわ。わたくしと貴方のどちらが上にいるべき存在なのか、はつきりと決着をつけましょう。その時までわたくしのことを決して忘れないでくださいまし！」

「嘉須賀、キミは負けたんだ。早く帰りたまえ」

「ぐううううっ、覚えてなさいよっ！」

負け犬っぽい捨て台詞を吐き、名季は涙の滴のようものを振り撒きながら店を後にした。コテンパンにやつつけたオレが言うのもなんだけど、幼なじみなんだからもう少し優しく接してやればいいものを……。

「うわっ、もう五時じゃん！ ボクもそろそろ帰らなきゃっ、門限六時なんだよね！」

名季が店を出るのとはほぼ同時に、推拿が腕時計を確認して声を上げた。今時の中学生に門限があるのも珍しい。実はいいところのお嬢様だったりしてな。似非お嬢様の名季が地団太を踏む姿が目にかぶようだ。

「クンカ、それじゃあ帰るね！ また明日遊びに来るから！」

「バス停まで送りますよ」

オレと名季の対決が幕を閉じ、此処にいる奴らがぞくぞくと動き始める。どうやら推拿はバス通学をしているようだ。最寄りのバス停がどこにあるのか分からないが、恐らくはすぐ近くにあるんだろう。っていつかオレも此処に来るのにバスを使うべきだった。さすがに徒歩は疲れる。

オレも荷を解く作業に取り掛かっておくか。明日に引き延ばせることを額面通りに受け取っていたら、いつまで経っても終わらないだろうからな。だからこそ今日中に終わらせてみせようじゃないか。「胡桃、オレは部屋の荷物を整理しに戻るぞ」

「店番はしてくれないのかい？」

うるつとした瞳をオレに向けて、引き留めの演技をこなす不躰な輩が一人。だが残念なことに、オレはまだ架織乃骨董屋に足を踏み入れる客を見たことがない。

正直言つて、店員は一人いれば十分だと思われる。トイレに行ったり休憩したりする時に訓夏やオレに声を掛ければいいだけの話だ。……まあ、荷物を整理し終えたら、ちゃんと店番もこなしてやるさ。

「店番はお前に任せるよ、胡桃」

「薄情な奴だな、キミは」

ぶすつと唇を尖らせて、胡桃は椅子に乗ったままくるくと回転する。

「……だがいいさ、それならば私にも考えがあるからね。店を閉めてキミの邪魔を手伝うことにしようじゃないか」

「するんじゃねえ！」

というか邪魔を手伝うってなんなんだ。意味が分からんぞ。

「さあ、そうと決まれば今すぐキミの部屋へ行こう。くんかたんが匂いを嗅ぎつける前に私の匂いをキミに擦り付けまくってあげるさ」
くつくつと笑いながら腰を上げ、軽い足取りで店のドアを閉めてしまふ。なんとも自分勝手な奴だ。ほんの少しでいいから、居候人のプライバシーってものを考慮して頂きたいところだ。家主が胡桃って時点で不可能なのは理解しているけどな。

「はあ……」

小さな溜息を一つ、そして諦めにも似た態度で肩を落としてみせる。

それを見た胡桃は、案の定、嬉しそうに笑っていた。

【幕間（くんかたん劇場？）】

ぬへあああああつ！ 十年ぶり！ 比念のパンツッ！ ダメだでも嗅ぎたいでもダメだけどどうしてもがが我慢ができないのは比念のせいだから問題なし！ たぶん大丈夫！ わたしが自分を許すから洗濯機の中からそつと手に取ってたまたま顔に近づけてしまっただけのこと！ これは別に匂いが嗅ぎたくてやってるわけじゃないんだからバレても見られても平気ということに決めました！ そうつ、今わたしが決めたルウルツ！ だからへっちら！ というわけで、はああ、ハアハア、……いざ、ひひひ久しぶりに……。

……あつ。

ドアが開く音が耳に。
後ろを振り向いてみれば……。

「——えと、訓夏……その」

比念が、いた。

あ、あはは……。

また、見られちゃった。

【6・1】

名季が泣きながら架織乃家を退散してから、既に二時間が経過していた。

部屋の掃除、片づけ、荷物の整理に精を出す予定を立てていたはずのオレは、常に横からちよっかいを出してくる胡桃の邪魔を受け流し、更には推拿の見送りを終えて帰宅した訓夏のじとーとした視線を背中に浴び続けることで、残念ながら何事もなく無難に予定をこなすことはできず、全く捗ることはなかった。

そして今、オレは訓夏の手料理をゴチソウになっている。

「美味しい……ですか？」

隣に座り、オレの様子を窺う訓夏は、額に汗を掻いていた。

きつと、今この瞬間のために全力で料理を作っていたのが原因だ。不安げな表情を浮かべたまま料理の出来栄を尋ねる姿は、今すぐにでも抱きしめてやりたくなる。

「ああ、凄く美味し——」

「美味いに決まっているじゃないか、くんかたん」

胡桃がオレの台詞に被せるように返事をする。こいつは本当に邪魔をするのが好きだな。

「二人とも満足しているようなので安心しました」

つい先ほど、今日の夕飯はどうすればいいのかなと悩んでいたところ、部屋の外から階段を下りる足音が聞こえてきた。

部屋のドアをノックしたのは訓夏で、さっきまでオレと胡桃の監視役のような態度を見せていたのに何処に行っていたのか思っていたら、どうやら夕飯を作っていたらしい。

というわけで今現在、オレたち三人は居間で訓夏の手料理を食していた。

「でも、いいのか？ これから毎日だなんて……」

訓夏が言うには、これから三年間、オレのために飯を作ってくれ

るらしい。オレとしては非常にありがたいし、何よりも毎日のように訓夏の手料理を食べることができるのは嬉しすぎるご褒美だ。

「構いません。今までよりも一人分多めに作ればいいだけですから」同居人が一人増えたから、ご飯の量を増やしておこう。訓夏としてはそのような考え方なのかもしれない。だが、男であると同時に変態紳士たるオレに手料理を振る舞ってくれるのは自殺行為に等しい。勘違いしてもいいんだな、訓夏？……とか、妄想したくなる。「ふう、ご馳走様！ 美味しかったよ」

あつという間に全てを平らげてしまい、箸を置いて両手を合わせる。カップラーメンかインスタントラーメン生活を強いられることになると思っていたので、素直に感謝だ。

ありがとう、そしてありがとう！

「キミ、先にお風呂に入ってきたらどうだね？」

とここで、胡桃がオレに入浴を勧めてくる。また何か裏があるんじゃないだろうな、と疑ってしまいたくなるのは、相手が胡桃だから。

「あー、いや、訓夏の手料理を食わせて貰ってんのに、オマケに一番風呂まで貰っちゃったら……さすがに申し訳ないよ。オレは最後でいいぞ」

「バカだな、キミは。くんかたんが浸かった湯船を飲む恐れがあるから一番風呂を譲ってあげようと言っているのが分からのかね？」

「すげー変態扱いだな、それ」

「否定はしないだろう？」

それが当然だと言いたげな様子で、オレに視線を向ける。

横に座る訓夏の威圧感がとんでもないことになっているので、下手な返事はない。

「んなわけないだろ、せいぜい匂いを嗅ぐぐらいだよ」

「それはわたしの専売特許——はっ！？」

恥ずかしそうに、訓夏が口を閉じる。

手料理を振る舞ってくれたお礼に、今のは聞かなかったことにし

ようじゃないか。これが本当の紳士って奴だ。

「まあ今のは冗談かもしれないとして、私とくんかたんはまだ食べ終わっていないのでね、同居人が一人増えた以上、時間差で入浴してもらわないと困るのさ」

「そういうことなら仕方ねえか」

初めからそう言えればいいものを、なんて回りくどい言い方をしやる。おかげでオレが変態扱いされちまったじゃないか。実際その通りなんだけどな。

「というわけで釣枝、さっさと入ってきたまえ。それとも私が一緒にじゃないと嫌かね？」

「よっしゃ、入ってくる！」

身を乗り出しそんな態勢の胡桃をスルーして、オレは食器類を台所へと持っていく。

洗うまではしないものの、水を浸して汚れを落とすやすくしておこう。

「風呂場に置いてあるスポンジは好きに使いたまえ、私やくんかたんがいつも体を綺麗にする時に使用するスポンジはキミの好きに使いたまえ」

「何故二度言ったっ」

そんなに堂々と言われたら、こっそりと使わせてもらおうとか考えていたオレがバカみたいじゃねえか。くそっ、オレの体の色んな所をゴシゴシ擦って後悔させてやるからな。

そそくさと二人のそばから離れて、早足気味で一階へと下りていく。一旦部屋に戻り、着替えの服を手を取った。シャンプーとかリンスとか何も持ってきていないことに今更ながら気づかされ、とりあえず着替えの他にバスタオルだけを掴んで、風呂場へと直行した。だが、ここで新たな問題が発生する。

「……洗濯物って、ここに入れていいのかな」

今、オレが着ている服は、どうすりゃいいのか。

まさか訓夏や胡桃の服と一緒に洗濯して、二人の手によって干し

てもらわけにもいくまい。そんなことをされたら変態的な何かが開花してしまいそうだ。っていうか、単純に恥ずかしい。年代の女の子と一緒に、自分の服を洗濯するなんて耐えられないだろう。

いや、オレは勿論耐えることが可能だ。むしろそれどんなに褒美だよ。しかしながら、訓夏と胡桃が同じ反応を示してくれるか否か、オレには分からない。一番嫌なビジョンとしては、オレの洗濯物とは別に洗濯機を回されることだ。一つ屋根の下に住んでいるというのに、三年間ずっとそんなことをされたらへこみすぎてどうにかなりそうだ。

「あとで聞いてみるか……」

悩んだからといって、求めるべき答えが出てくるわけではない。訓夏と胡桃に直接聞いてみなければ何も分からないからな。

だから、とりあえず今は脱いだ服を洗濯機には入れずに、ビニール袋にでも入れておくことにしよう。……悲しくなってくるな、これ。

マッパになったオレは、風呂場のドアをスライドさせる。きちんと手入れの行き届いた魅惑の空間が出迎えてくれた。

ここで、この場所で、訓夏と胡桃が毎日のように全裸で……。

「……いかにいかに、変態かオレは」

変態だ。何を当たり前のことを自分自身に問いかけているんだ。というか男の入浴シーンなんて明らかに需要がないから、さっさと済ませやがれ。そして今すぐにでも女性陣の入浴シーンで目の保養をするんだ。

浴槽の蓋を開けて、湯船を確認してみる。温泉の素を混ぜているのか、青紫色に染まっていた。これがまた実にいい匂いがして、鼻孔をくすぐりかける。

ほのかに香るシャンプーやリンス、石鹸の匂いが、訓夏と胡桃が放つ香りと同じだということに気づき、反応。……ゴホッ、ゴホンッ。ダメだオレは本格的に死んだ方がいい。

「……ん？」

シャワーでお湯を出して体を洗っていると、ふと、背中越しに人の気配を感じた。

ゆっくりと、バレないように後ろを振り向き、半透明のスライドドアの向こう側を確認してみる。するとやはりと言うべきか、黒っぽい影がそもそもと動いていた。

一瞬、泥棒が入ってきたのかとも思ったが、どうやら違うらしい。金目の物もなければ女性の下着類が置いてあるわけでもないのに、いつまで経ってもそこから動こうとしないのは明らかにおかしい。だとすれば、あれはいったい誰なのか。

そつと、ドアの取っ手に手を掛ける。シャワーの音が響くためか、幸いなことに黒っぽい影はオレの動きに気付いていない。好都合だ。音を立てないように、少しずつドアを開いていく。やがて十センチほどドアをスライドさせると、洗面所で怪しく蠢く影の正体をこの目に映し出すことに成功した。

ここでようやくドアがスライドする音に気付いたのか、その人物が後ろを振り向く。

「——えと、訓夏……その」

そこにいたのは、訓夏だ。

しかし何故、オレのトランクスを手に持っているんだ。

「あ、……あは、は」

乾いた笑い声。

胡桃の顔が引きつっていく。

「訓夏は、そこで何をしてるんだ？ ……その、オレのトランクスを掴んだりして……」

ドアの隙間から顔だけを覗かせたまま、訓夏に問いかけてみる。だが既に訓夏はノックダウン寸前だ。顔色は真っ青と表現するに相応しい状態へと陥っている。オレのせいかな？ オレのせいなのか、これ？

「う、……っ、いつ」

質問に答えることなく、訓夏は洗面所のドアを開けて廊下を突っ

走っていく。

「どんどん遠ざかっていく足音を耳に残し、オレはぽつりと呟いた。
「オレのトランクス……」

「いったい何に使うつもりなのか不明（ということにしておいた方が訓夏のため）だが、このまま見過ごすわけにはいかない。」

「オレは湯船に浸かることもなければスポンジを使うこともなく、バスタオルで体を拭いて替えの服に手足を通していく。」

「——ッ、おお、胡桃か！　今さっき訓夏が走っていったんだけどよ、今何処にいるか分からないか？」

洗面所から廊下へと出ると、すぐそばに胡桃が立っていた。ドアは開けっぱなしになっていたが、どうやら覗くことなく廊下で待っていたらしい。胡桃にしては珍しいな。

「……くんかたんなら、裏山の方に行つたさ」

「裏山？　……そつか、岩屋神社だな！」

午後、訓夏に連れられて裏山に登っていて助かった。電灯が少ないので夜道は危険だが、道に迷うことはないだろう。

「ありがとよ、胡桃。このお礼は後で必ずしてや——」

外に出るために玄関へと足を向けると、オレの前に胡桃が立ち塞がる。

「なんのつもりだ、胡桃？」

「見ての通りだよ、釣枝？」

「見ての通りだよと言われても、わけが分からない。どうして行く手を阻もうとするんだ。」

「くんかたんがどうしても言うから、キミが居候するのを許可したのだが……、やはり断っておくべきだったかもしれないね」

「……なんの話だ」

胡桃は視線を逸らし、小さく息を吐く。

「僅か半日で胡桃の性格を理解したつもりになっていたが、こんな顔をする胡桃をオレは見たことがない。」

「……見たことが、ない？　本当か？　記憶の何処かで、以前にも

淋しそうな表情を浮かべた胡桃を見たことがあるような気がする。どうしても思い出すことができないのに、それなのにこの奇妙な違和感を取り除くこともできない。

「キミが架織乃家に住むようになれば、くんかたんがキミのことばかりを気にするようになるのは初めから分かり切っていたことさ。

……でも、それを止められなかったのも、私個人の認識の甘さが招いた事態と言えるだろうね」

まるで自分自身に言い聞かせるように、胡桃は何度も溜息を吐きながら呟く。

演技しているようには見えない。本心から、胡桃は今の態度を見せているようだ。

「釣枝、キミはくんかたんが……いや、架織乃訓夏が好きか？」
「えっ」

突然、胡桃は問いかける。

いつものように人をからかう口調ではなく、真面目な喋り方で、オレの心を、本心を、全てを、覗き見るために……。

「なんで……そんなことを聞くんだよ」

「釣枝、これはそんなことなんかではないさ。私がキミを許せるか否かを決断するための最終試験なのだからね」

「……最終試験だと？」

いよいよ理解できなくなってきた。

オレが訓夏のことを好きか嫌いか、その有無によって、胡桃がオレを許すか許さないかが決まるらしい。

だが、胡桃はいつたい何を許すんだ。そしてオレは何を許されないうっていうんだよ。

「キミの返答内容によつては、明日にでも一人暮らしできるアパートを探してもらうことになるだろうね。つまりはそういうことさ。

……それで、キミはどうなのだ？」

好きか嫌いか、二者択一。謝った選択をしてしまえば、架織乃家を追い出されるってことか。最悪の場合、明日から野宿生活に突入

しなければならぬ。

とにかく、今は胡桃の相手をしている場合なんかじゃない。オレは今すぐにも訓夏を追いかけるべきではないんだ。

だからこそ、オレは迷うことなく返事をする。たとえそれが正解じゃなくともな。

「んなもん、分からねえに決まってる！」

これが、オレの導き出した答えだ。一瞬たりとも思考せず、あつという間に口から出てきた台詞だから、文句を言われても仕方ない。だがこれが本心なんだから構うことはない。

「それはどういう意味だね？」

納得出来かねるのか、胡桃は追及を試みる。当然それも予測済みだ。無意識的にだがな。

「訓夏のことは好きだ。好きに決まってる。可愛いし料理も上手だしちよつと暴力を振るうところも許容の範囲内だし恥ずかしがる姿も笑った顔も怒った顔もみんな好きだ。そして勿論、胡桃のことだって好きだ。人をからかうことを生きがいに行っているような奴だが、妹思いなところは見てればすぐに気付くし場の雰囲気だつて明るくしてくれる。……だけど、オレはまだ二人とは出会ったばかりなんだよ。二人からすればオレと遊んだ記憶があるのかもしれないさ、でもオレにはそれがないんだ。胡桃、お前と出会っていたことはあるか、訓夏と交わした大切な約束すら憶えていないんだからな。……たとえオレは変態野郎だとしても、そんな状態で軽々しく訓夏や胡桃、お前たちのことを好きだなんて言えるわけがないんだよ……」

早口で捲し立て、オレの思いを存分に伝え切る。

この返答が、胡桃のお気に召すものだったかは知らない。どうでもいい。

だが、胡桃は意外な反応を見せた。

「……く、くくつ、……キミは本当に変態なんだな、ひーくん？」
「ひー、くん……？」

胡桃が口にした呼び名。

その呼び方を、オレは知っている。ずっと昔に、オレは誰かからそう呼ばれていた。

それはいったい誰なのか、もはや言うまでもない。オレの目の前に佇み、優しげな笑みを浮かべる胡桃以外に存在しない。親からだってそんな呼び方されたことはないからな。

「ふふっ、思い出せないのかい？ まあ無理もないだろうね。だって記憶が欠落しているのだから当然さ。……ほら、じっとしてて、今から思い出させてあげるから」

一歩、オレに近づく。距離が近すぎることに疑問を持つ暇すら与えられないことなく、更にもう一歩、胡桃はオレに接近した。

「お、おい……っ、こと——っ」

胡桃の名前を口にする前に、オレの唇は塞がれてしまった。ぶつくりとした弾力を持つ、胡桃の唇によって……。

「っ、——ッ」

不意打ちにもほどがある。まさか胡桃からキスをされるなんて思ってもみなかった。一生に一度ありえるか否かの確率かもしれない。オレは目を限界まで見開いて、胡桃の顔を凝視する。

目と鼻の先に、瞳を閉じて唇を重ね合わせる胡桃の顔が映し出されている。微かにだが頬を朱に染めて、心なしか恥ずかしさを押し隠しているようにも見えた。だがこれは決して夢じゃない。現実だ。オレは架織乃胡桃と鱈を……じゃなくてキスをしている！

しかしだ、本当に驚くべきは、これからだった。

「——ッ、むぐっ!？」

重ね合った唇の感覚が、奇妙なものへと変化する。それは言葉では言い表せないようなものだ。だが、あえて表現するのであれば、オレが接触反応を行使する際に感じ取るものと同種とも言えるだろう。

記憶の奔流に脳内が刺激されていく。鍵を掛けて中身を確認できなくなっていたはずの引き出しが、いとも簡単に開かれるのを実感する。

……ああ、これは記憶だ。欠落していた記憶が元に戻っているんだ。

「——釣枝、これでキミには全てを返してあげた。記憶と言う名の思い出をね」

やがて胡桃は、重ね合わせた唇をゆっくりと離してしまう。つい先ほどまで感じていた柔らかな感触が名残惜しくなる。しかしながら今は我慢をしなくてはならない。どうしても聞かなければならないことがあるからな。

「胡桃、お前は……いや、……お前も、能力者なのか？」

この問いかけに、胡桃は小さく頷き肯定する。異常なほどに優れ

た嗅覚を持つ訓夏と同様に、姉の胡桃もまた、何らかの力を行使することができたということだ。

「……少し、昔の話をしようか。と言ってもキミは既に思い出しているだろうけどね」

壁に寄りかかり、天を仰ぐ。すぐ上には真っ白な壁紙の天井が視界に映され、この空間にオレと胡桃の二人しか存在しないことを強調させていた。

「九年前、キミが架織乃家に遊びに来た時……、私は、キミのことが好きになった……」

多少、恥ずかしそうに視線を彷徨わせながら、胡桃は昔の想いを告白する。

その台詞を合図とし、胡桃は欠落していたはずの記憶を一つずつ確かめさせるかのように語り始めた。

「以前にも話したように、私たちの両親は海外へと足を運ぶことが多くてね、そのせいで家ではいつも訓夏と二人で淋しく親が帰ってくるのを待っていたのさ。……訓夏が私のことをどのように考えているのかは知らないが、私にとって訓夏はたった一人の姉妹だからね、そばにいてやれるのは私だけだった。だからこそ、訓夏を守ることが私の使命だと感じていたよ。けどね、そこに一人の邪魔者が現れたのさ……」

姉が妹を守る。そして淋しさを忘れさせる。それが胡桃の思い描く姉妹像だった。

だが、胡桃はオレに視線を向け、口元を緩めてみせる。

「ひーくん、キミだよ」

真っ直ぐな瞳を向けたまま、ぼつりと呟く。

まるでそれがとても嬉しい出来事だったかのような笑みを浮かべながら……。

「……ひーくん、か。その呼び方も九年振りになるんだな」

欠落していた記憶を整理して、昔の思い出を頭の中に順番に並べていく。

その中には確かに、オレの名を？ひーくん？と呼ぶ胡桃の姿があった。

「我が架織乃家に遊びに来たキミは、無謀にも私を口説こうとしたのだよ」

「ちよつと待て、それは記憶にないぞ」

オレは今までに一度しか女の子を口説いたことはない。その相手が胡桃ではないことも知っている。勿論、胡桃だって気付いているはずだ。

「無意識な変態とは、まさにキミのことを指すのだね。今日だってそうさ、ところ構わず女の子を口説いているというのに、自分では全く気付いていない間抜けなひーくん」

「口説いた……って、オレが、今日？」

記憶にございません。……オレは悪徳政治家か。

そんなオレの態度を軽く無視して、胡桃は話を続ける。

「互いの親同士が語り合い、訓夏がお風呂に入っている時、キミは私のそばに近づいて、優しい口調でこう言ったのだよ……」

『おやがいつもいないの？……そっか、ぼくといっしょだね？
いもうとと二人でせいかつしてるのもおんなじだ』

共感したわけでない。ただ、同じ境遇に置かれた人物が、すぐそばにいただけのこと。

でも、たとえそうだとしても、その言葉が、その笑顔が、胡桃の心に記憶を打ち付けた。

「ずっと……ずっとずっと……私は一人で、妹を守ってきた……。そして同時に守られてもいた。そんな生活を送っていては心が休まる暇なんてなかったさ。……でも、だからかな、キミの言葉にそれほど呆気なく参ってしまったのは……」

それがほんの少し恥ずかしかった、と付け加え、胡桃は頬を掻く。記憶を欠落させてまで隠し通していた想いを全て言葉にしている

んだから当然だ。話を聞いているだけのオレでさえ、真っ直ぐに胡桃の顔を見ることができなくなっている。

今まではどんな時でさえ訓夏を守らなければならぬと気を張っていた胡桃は、オレと出会い、オレの言葉を受け取り、初めて心を落ち着けることができた。

ただ、それだけのこと。誰もがすぐに忘れてしまいそうな単純な出来事。

胡桃は、それをずっと覚えていた。思い出として心に残していた。「明日になれば、キミとは離れ離れになってしまう。このままキミと会えなくなるのだけは嫌だった。だから私は、キミに告白しようと思った。……でもね」

一旦、胡桃はここで口を閉じる。

その先に続く台詞を言うべきか否か迷うような仕草を見せている。それは今までに作り上げてきた演技のようなものではなく、心の底から作り出されているように思えた。

だが、やがて胡桃は、重い口を開いて、その言葉を音にする。

「——キミは、訓夏を追いかけた」

その言葉を胸に突き刺すかのように、胡桃は両手を胸元へと持っていく。

「すぐに私もキミの後を追ったよ。……だけどね、岩屋神社に辿り着いてキミの背中を見つけた時、キミと訓夏はキスをしていた」

それは決して思い出すことのできなかつた記憶であり、訓夏と交わした約束でもある。

あの日、胡桃は見ていたんだな。

「それじゃあ、オレと訓夏が結婚する約束のことも……」
「知ってるよ」

九年前、訓夏と交わした約束、それは結婚するというものだ。それすらも胡桃は知っていた。そして今、こうしてオレの前に佇んでいる。

「私はキミのことが好きだ。しかしながら訓夏のこととはもっと好き

なのだよ。たった一人の姉妹なのだからね……。もし、訓夏がキミと結婚することになれば、私は本当の意味で一人ぼっちになるだろう。それだけは嫌だった。どうすればいいか悩んだ。そして……」

左手を前に出し、手のひらを見せつける。

目には見えることのない違和を、オレは確かに感じ取った。

「私は、この力を授かったのさ……」

岩屋神社の言い伝えは、本物だった。

オレと訓夏が愛を誓い合った時、岩屋神社の神様から一つずつ贈り物を貰った。

一つは、接触反応。そしてもう一つは、訓夏が持つ優れた嗅覚だ。だが、実はその時、その場にいたのはオレと訓夏だけじゃなかった。胡桃もいたんだ。

「私が手に入れたのは、他者の記憶を自由に欠落させる忘却の能力……、キミにも一度教えたことがあるが、私はこれを？記憶の欠落？と呼んでいるよ。決して成就することのない片思いの心に相応しい、歪んだ力さ……」

自らが得た力を皮肉り、胡桃は苦笑いした。

その姿がどこか淋しそうに見えるのは気のせいではないだろう。オレも既に気付いている。胡桃が何故、オレの記憶を元に戻したのか。

「別れの時、キミは私と握手したのを憶えているかな？あの時、あの瞬間、キミはあの日の出来事を全て忘れてしまったのだよ」

「お前との思い出も全部ひっくるめてか……」

「……ん、」

喉を鳴らし、小さく頷いた。

「私がこの力を使ってしまえば、キミは訓夏と交わした約束だけでなく、私との思い出も忘れることになるだろう。私にはそれは胸が張り裂けそうなくらい辛かった。……ただ、残念なことに、それよりも遙かに大切なものが私にはあった。訓夏を奪われてしまうくらいなら、私の想いなど忘却して構わない……と」

胡桃はオレと別れた後、訓夏にも記憶の欠落を試みたらしい。だが、訓夏はオレのことを忘れなかった。何度も試してみたが、全て失敗に終わったらしい。

その理由を、胡桃は以下のように分析した。

たとえ記憶を欠落させようと、訓夏には優れた嗅覚が備わっている。たった一度でも嗅いだ匂いは生涯忘れることはなく、永久に憶え続けることだろう。そしてそれは同時に、訓夏がオレのことを忘れないでいてくれる大切な鍵となっていた。

オレの匂いを憶えていてくれたおかげで、訓夏はオレと交わした約束を今でもずっと忘れずに憶えていてくれたんだ。

「さて、これで昔話は終わりだよ……。では、改めて問おう」

想いを全て言葉として言い表した後、胡桃は再び、オレに目を向けた。

「釣枝比念、私はキミのことが大好きだ。それでもキミは、訓夏を追いかけるのかな？」

小首を傾げ、弱弱しく笑みを作り上げる。

普段は人をおちよくするような態度を取っている胡桃も、告白するのはこれが初めてなのだろう。緊張からか、その細くも美しい体格を保ち続ける胡桃は、心なしか震えているようにも見えた。

その表情を瞼の裏にしっかりと刻み込み、オレは即答する。

「追いかけるさ。だって訓夏が待ってるんだからな」

返事には迷わない。迷ってはならない。

たとえばそれが胡桃の記憶に忘れなくなるような思い出を作り上げることになったとしても、オレは訓夏と交わした約束を果たさなければならぬ。

「……ふう、……それが、キミの出した答えなのだね……」

まるで安堵するかのように肩を落とし、息を吐く。

強がっているのかもしれない。だが、胡桃の顔から笑顔は失われていなかった。

「いいさ、キミは自分が選んだ道を行きたまえ。私もすぐに後から

追いかけていくから何も問題はない。だがね——」

そこまで言うと、胡桃は先ほどと同じように一歩近づく。

「——今のは私だけの記憶だ。キミに話した昔話や、この想いは、キミは知らなくてもいい真実なのさ……」

そしておもむろに、左手でオレの手を握った。

その瞬間、オレは胡桃が何をしようとしているのか気付いた。

胡桃は、自分に関する記憶を全て忘れさせるつもりだ。

「……ああ、余談ではあるのだがね、くんかたんのファーストキスはキミだ。そして私のファーストキスも……キミになった。……それだけは忘れないでくれよ、ひーくん？」

その言葉を合図とし、胡桃の左手が違和に包まれていく。だが、

「——忘れないよ。……もう二度と、絶対に、お前のことを忘れない」

オレは胡桃を抱きしめた。

「っ、なにを……っ、ひーくん……？」

考えるよりも先に、体が動いていた。

でも、そのおかげで胡桃の悪巧みを阻止することができた。

「胡桃、オレはもう絶対に忘れたくない……訓夏と交わした約束だけじゃなくて、お前との思い出も今のお前のその表情もこの温もりも何もかも忘れたくなんてないんだよ!!」

ギュツと抱きしめてしまえば壊れてしまいそうなほどに繊細な胡桃の体を、加減することなく思いっきり抱きしめる。それが今、オレにできる唯一の反抗だ。

「忘れてたまるもんか……オレは絶対に忘れない。たとえ記憶が欠落しようが、その度に思い出してやる。何度でも何度でも思い出してやる。お前の、その……柔らかい唇の感触だって、全部忘れてたまるもんかっ」

最後に邪念っぽいものが付け加えられたのはともかくとして、オ

レは自分の想いを言葉にして胡桃へとぶつけた。それでもなお、胡桃はオレの記憶を欠落させるのだろうか。

「……ふ、ふふつ、……そんなに好きかい？ 私の唇の感触が」

「え、——んぐっ」

オレの胸に顔を埋めていた胡桃は、ゆっくりとオレを見上げたかと思えば、ほんの少し踵を上げて二度目のキスを仕掛けてきた。

そうだ、この感触だ。これを忘れるなんてとんでもない。こんな大切なことを忘れるなんて勿体なすぎるからな！

しかしまだ終わらない。ここで終わらない！

「——ッ、lが0ばえgらjペpがつ！？」

オレは壊れた。

胡桃の、その、あれが……、口の中に這入り込んで……オレを快樂の渦へと導いていく。

そう、それは胡桃の舌だ。生まれてまだ三回目だというのに、積極的に舌を動かしてくるのは反則だ。拙くも努力し、オレを喜ばせようとしているのが手に取るように分かる。

「んむっ、……う、くふっ」

やがて、オレの脳髓を刺激する胡桃の舌は、細く透明な糸を引いて離れていく。

「……ん、えふっ……くくっ、……三回目のキスでは、この感触も味わうことができたね、ひーくん？」

オレの唾液に塗れた舌を出し、頬を朱色へと染め上げる。

……可愛い。なんだこの可愛い生き物は。もう一度キスをしたくなってくる。

「お、ちよっと……こらこら、ひーくん。四回目はダメだよ？ 今のキミにはあまり時間がないのだろう？」

抑制が効かなくなりつつあったのか、オレは胡桃にキスをしようと迫っていたらしい。

それを軽くあしらわれ、拳句には体まで離れてしまう。両手に残る胡桃の背中の温かさが、無性にものを掴みたくなる。

「全く、キミはどうしようもないほどに大胆な変態だね」

「……め、面目ない」

腰に手を当て、呆れた口調で胡桃が呟く。

オレは顔を苦々しく引きつらせながら謝った。

「……だが、安心したまえ。キミはただの変態ではない」

口元に左手の人差し指を添えて、片目を瞑る。そして、まるで自分のことを話すかのように誇らしげな様子で口を開く。

「釣枝比念、キミは立派な変態紳士だよ……」

——変態紳士。

その言葉は、Hさんによって命名され、オレがオレ自身を皮肉るために用いてきたものだ。接触反応によって人の裏を視ることが可能となったオレが、自分の心を偽るための隠れ家として利用してきた辛い過去だ。

それを、胡桃は認めてくれた。

あの日、胡桃がオレの言葉に心を奪われたように、オレもまた胡桃の言葉に救われた。

「ありがとよ、胡桃」

「なあに、このお礼は後でたっぷりしてもらうつもりなので構うことはないさ」

胡桃に普段の調子が戻ってきた。

これが、これこそが、オレが知っているもう一人の胡桃だ。

昔とは異なる、今現在オレの目の前でほくそ笑む訓夏のお姉さんなんだ。

「……さあ、行きたまえ。くんかたんがキミを待っているのだろうか？」

言うや否や、胡桃は道を開ける。

遮られていたはずの行く手は、今再び道を示した。

「訓夏を連れて二人で戻ってくる。此処で待っていてくれ」

笑みを零し、オレは胡桃の横を通り抜けた。

玄関で靴を履き、つま先を突いて整える。そして後ろを振り返る

ことなく、外に出た。

「ひーくん、キミは本当に忘れん坊だね」

オレの背中を見届けた後、胡桃がぼつりと声を漏らし、靴を履く。
「私もすぐに後を追いかけて、キミたちを覗きに行くと言っただじやないか、……くくっ」

その声は、勿論オレには届いていなかった。

【6・3】

岩屋神社。

此処は、オレと訓夏が互いの愛を確かめ、結婚を誓い合った大切な場所だ。

胡桃の手によって欠落した記憶が元通りとなった今、オレにはこの空間を存分に懐かしむことができた。

あの日のオレも、逃げる訓夏を追いかけて鳥居をくぐり、今のように神社の陰で蹲る姿を見つけたんだったよな。まるで昔をなぞるかのようなシチュエーションだ。唯一、あの日と異なる点といえば、訓夏が真っ裸じゃないってことぐらいか。……残念だ。

ともかく、オレは今、訓夏の許に辿り着いた。

「見つけたよ、訓夏」

優しい口調で訓夏の名前を呼んだ。

すると訓夏は、びくりと体を震わせる。オレが此処にいることに驚いているんだろう。

「……懐かしいな、この場所」

周囲に目をやり、時の流れを確認する。昔と変わらずぼろっちい神社だな。だがそれがいいのも事実だ。年代を感じさせてくれる古さが、ざわついた心を安らかにする。

「え……、懐かしい……って」

耳をぴくりと動かせて反応する。オレの言葉に興味を抱いたんだろ。

「昔のまんまだよ、オレと訓夏が約束を交わした、あの日と同じようにな……」

オレの言葉を耳にして、恐る恐るといった感じで訓夏が口を開く。……思い出したん……ですか？」

再会した時から、ずっとこの瞬間が訪れるのを待っていたんだろ。訓夏の瞳の中には、期待にも似た色がオレへと向けられている。

勿論、オレはその期待に背くつもりはない。

「ああ、思い出したよ。……あの日、お前と交わした大切な約束な」

訓夏のそばへと近づくと、オレは手を差し出した。

その手を、訓夏はじつと見つめたまま、おずおずと口を開く。

「……か、返さないと……ダメですか？」

とても恥ずかしそうに、そして上目遣いにオレの表情を窺う一つ年下の女の子は、何か紺色っぽい布地のものを両手に握っていた。

ちよつと、待て。なんか見覚えあるんだが……いや、気のせいかな？
いやいや、んなわけない。絶対に何処かで見たことがあるはずだ。
今のオレの記憶は欠落なんかしていないんだからな。

ということは、あれはつい最近オレが見たものということになるわけであって、その中で紺色っぽい布地のものといえば……。あつ、
「オレのトランクスッ!？」

先ほどから肌身離さず胸元で抱きしめているもの、それはオレのトランクスだった。

いやいやいやいや、そういう意味じゃないから！ オレが手を差し出したのはトランクスを返してほしかったわけじゃないですから！
いや勿論返してもらわないとこれから先の人生において個人的に非常に恥ずかしい日々を送らなければならぬ羽目になるわけだが、オレとしては別にそのトランクスは返してもらわなくてもそれはそれで訓夏の反応が興味深いというか興奮するのでは是非見続けていたいという衝動に駆られて云々……。

「と、とにかく、オレが手を出したのは！ オレの手を握れってことだよ」

「……ということは、これはわたしが貰ってもいいんですか？」

「話が飛躍してませんかっ!？」

あげますよ、あげますとも。訓夏がオレのトランクスの匂いをくんかくんかするって言うなら喜んで差し上げますともよ！ でもそれは今この瞬間このタイミングで聞くようなことじゃないだろう！

時と場合をしつかりと考えていたきたいぞ。

「……や、やつぱり、くれません……ですか」

「あげますからっ、どうぞお納めください！」

もうダメだ、この子もはやオレのトランクスしか視界に映ってねえっ！

半ば自棄になりつつ、トランクスを餌に心を落ち着かせるしか道は残されていないことを悟ってしまった。凄く悲しい気持ちになるのはなんでだろうな。

「本当に……いいんですか？」

「ああ、やるよ。訓夏にプレゼントする」

「……一生、洗濯しませんよ？」

「してくれよっ」

匂いが消えるのが嫌なのは理解できなくもないが、腐った匂いが訓夏の部屋に充満しそうで怖い。……数年後辺りにな。そんなたった数日で腐ってたまるかよ。

「……あとで返せて言われても、返しませんよ？」

「その代わりと言っては何だが、訓夏の穿いたパグぎゃああっ目があああああっ！！」

「あっ、潰しそうになりました。すみません」

「謝るぐらいなら初めからしないで！　っていうかそれハンカチじゃないからっ、オレのトランクスで汗を拭かないでっ」

「ご忠告感謝します。危うくわたしの匂いが混ざってしまうところでした」

「感謝の仕方間違ってね！？　そんなにオレのトランクスが大事かよっ」

「言うまでもありません」

ふう、と安堵の表情を浮かべる訓夏は、誇らしげな瞳をトランクスに向けていた。

せめてオレに向けてくれないかな？　そのトランクスの持ち主なんですから！

トランクスに負けた気分だよ、こん畜生めがっ！

「……はあ、とにかく……ほら、立ってくれ」

「あつ、……はい」

これ以上トランクスのお話をしていると精神的におかしくなりそうなので、訓夏の手を強引に掴んで引つ張り上げる。

オレの目の前にしゃがみ込んでいた女の子――架織乃訓夏は、トランクスを左手に、オレの手を右手に握り、反動を利用して立ち上がった。

トランクスさえ持っていなければ、映画のシーンと言っても過言ではないほどにオレと訓夏は映えていたことだろう。だが、現実には奇怪なものだ。まさかオレのトランクスを手を持った女の子と手を繋ぐことになるなんて、いったい誰が予想できるってんだ。

「比念の……手は、温かいですね」

「走ってきたからな。手だけじゃなくて体も温かいぞ。触ってみるか？」

絶賛、全身ぽかぽか祭り開催中だ。

此処に辿り着くまでに汗だくになってしまったから、架織乃家に戻ったらシャワーを浴び直しておきたいところだ。……訓夏も一緒に、とかな。はいすんません死にますっ。

しかしこれはセクハラ発言になるのかな。まあどうでもいいか。既に目の前の女の子にトランクスを奪われて逆セクハラされまくりなんだからな。

「触らなくてもいいですから、その……、匂いを嗅いでもいいですか？」

「勿論っす！」

即答。奥手っぽかった女の子が積極的になるなんてどんなご褒美だよ！

というか此処に来てから訓夏の態度や素振りが物凄く変化しているような気がする。

これはまるでオレと訓夏が再会を果たした時と同じぐらいの好感

度を取り戻していると言っても差し支えないだろう。こんなにも積極的な訓夏は半日振りだ。

それもこれも全ては、オレが約束を思い出したと言ったのが原因か。

「じゃ、じゃあ……失礼します、……ね？」

「おう、どんとこい」

全国の変態さん、今此処では変態的な行為を無料で公開中ですよ、早くしないとあつという間にエンドロールが流れますよ、と心の中で狂ったことを叫びつつ、オレは訓夏の手を引いて抱き寄せる。

「あつ、う」

強く引きすぎて、訓夏の顔がオレの胸に当たった。

「ごめん、鼻打ったか？」

「あふゆ……っ、んに……え、いえ、らいじょぶです、……はい、……ふ」

色々大丈夫じゃないところまで逝ってしまったわれたようだ。

それにしても逝くのが早すぎるぞ、訓夏。もう少し我慢というものを憶えてだな、オレにもそのなんていうか……奉仕？ 的なものをしてくれないんでないかい？

いやいや、分かってます、分かってますとも。既にこの状態が神様より与えられた極上のプレゼントであることぐらい重々承知しておりますとも。大切そうにトランクスを握りつつもオレの匂いを嗅ぎ回す訓夏を抱きしめているんだからな。

でも、オレにも欲が出てくる。

匂いを嗅がせる代わりに、もっと何かしてもらいたいんだよ！

「……ん、い……あ、くふっ、……い、いい、……っ」

「トリップ中のところ申し訳ないんだけどさ、そろそろ顔を上げてもらってもいいか？」

「あ……、もう、……終わり、ですか……？」

何故そんな目でオレを見るっ！ あまりの可愛さに断れなくなっちまうだろうがっ！

「……くっ、今は我慢だ」

自分自身に言い聞かせ、強く自制する。そうしなければ変態を通り越して犯罪者へとレベルアップしそうだからな。……いや、この場合はレベルダウンになるのかな。まあ一般人から見ればどちらも同じようなものだろうな。

訓夏の肩を掴み、胸元から引つpegす。

まばたきを何度か繰り返し、訓夏はオレの顔を見た。

何故、もっと匂いを嗅がせてくれないのかと訴えているような潤んだ瞳を向けている。

「訓夏、匂いなら後でいくらでも嗅がせてやるから、今はオレの話聞いてくれ」

「……今の、ホントですか？」

少しばかり眉を寄せて、オレの言葉が真実か否か問いかける。訓夏にとつてオレという存在は、交わした約束をきれいさっぱり忘れてしまうような奴だと思われているんだろう。

それは間違いではない。記憶を欠落させられていたとはいえ、まさにその通りだ。

だが、今のオレはあの頃のオレとは違う。何もかも全てを憶えているからな。

「本当だ。約束するよ」

しっかりと頷き、肯定する。

「それじゃあ、これが二度目の約束ですね……」

すると、訓夏は安堵の表情を浮かべつつ、再びオレの胸元へと体を預けようと試みる。

「いやだからオレの話を聞いてくれて言うってんだけど」

「このままでも聞くことはできますよ」

顔を隠したまま、声を耳に届ける。実は恥ずかしがってるのかもしない。

ふるふると頭を動かし、更には鼻を擦り付けるような仕草を取る。……ちゃんとオレの話を聞いてくれるのか心配になってきた。

「……ふー、仕方ないな」

と言いながらも心の中でガッツポーズを取るのは変態紳士のたしなみだ。

表面上では常に紳士の振りをして、内面では欲望に忠実な変態野郎、それがオレです。

小さく咳を吐き、オレは訓夏の頭に手を置いた状態で話を始めることに――、

「あつ、……撫でてくれるんですか？」

「話が進まねえっ」

わしゃわしゃと強めに頭を撫で回してやると、訓夏は気持ちよさそうに声を上げる。

これ以上オレの邪魔をするなら今度は尻を撫で回すからなっ。

「訓夏がシャワーを浴びて洗面所から出てきた時、滑った拍子にオレと……その、キスをしただろ？ 既にあの時、オレは訓夏との約束を思い出していたんだよ」

「……でも、わたしが聞いた時、何も思い出してなかったみたいですよけど」

もつともな意見だ。しかしながらその時にはオレは胡桃の手によって記憶を欠落させられていたわけだからな。何も憶えていなくて当然なんだ。

でも、オレは胡桃から一つだけお願いをされている。

胡桃が持つ、記憶を欠落させる力について、誰にも言わないで欲しいとな。

その願いを考慮した上で、オレは訓夏との思い出について語らなければならぬ。たとえ訓夏に嘘を吐くことになるうとも、訓夏にだけは胡桃のことを嫌いになつてほしくないからな。だからオレは嘘を吐く。

「約束を思い出した後、オレはすぐにでも謝りたくて訓夏の姿を探したんだ。……で、見つけた場所が……トイレだったんだよな」

「……あ、もしかして……わたしが殴ったから……ですか？」

直訳すると、殴ったせいでまた忘れてしまったのか、ということになる。

実際、胡桃に記憶を欠落されなかったとしても、案外その通りになつていたかもしれない。だからこれはフェイクとして丁度いい。上手く利用させてもらおう。

「んー、まあそういうことに……なるのかな？ ……だ、だがな、ついさっき思い出したんだよ。訓夏がほら、オレのトランクスを……持つてるのを見た辺りで……」

「……ま、まさか昔のわたしの姿を思い出して……ですか？」

こちらでも直訳すると、九年前にも同じようなことをしていたのを憶えていて、その姿と今の姿が重なって見えたおかげで記憶を思い出したのか、ということになる。

おう、なんて都合がいいんだ。まさに伏線をこれでもかと利用している気分だ。

少々、というか随分と顔を引きつらせながら、オレは小さく頷いた。

それを見た訓夏は、嬉しそうに頬を緩ませる。

「じゃ、じゃあつ、わたしが比念のトランクスの匂いを嗅いでいたおかげで、比念は昔のことを思い出すことができたんですねっ？」

「お、おおおっうよー！」

もうどうにでもなりやがれっ。訓夏の顔が曇らなければどうでもいいぜ畜生がっ！

「やっぱり、匂いの力は偉大です……」

ほんわかとした表情を浮かべ、満足そうに微笑んでいる。

そしておもむろに、訓夏はオレのトランクスをオレの顔の前に翳す。……マジ止めて。

「あの日、比念に言われたとおりに、わたしはずっと比念の匂いを憶えていました。比念のことをずっと忘れずに憶えていました。……

……だから、ですね、その……、約束を……」

恋する乙女のような口調で語る訓夏は、今すぐにも約束を果た

してやりたくなるほどの輝きを放っていた。……トランクスさえ持つていなければな。

「あの日、オレは訓夏と約束を交わした。……訓夏のお嫁さんにな

——」

「お婿さんです！」

訓夏のツツコミを受け、オレは苦笑する。

だが、これでオレが全てを思い出したことを証明できただろう。

ぶくつと頬を膨らませ、訓夏はオレを睨みつけた。でも、目は全然怒っていない。早く続きを言えせがんでるように見える。……

なんだろうな、イジワルしたくなってくるのは訓夏が可愛すぎるからかな。

「すまん、昔のことを思い出したらつい嬉しくなっただけな」

「比喩は変態のくせにズルいです」

何がズルいのかお尋ねしたいところだが、ここは我慢しておこう。
「次に再会した時、訓夏がオレの匂いを憶えていたら、結婚しようって決めたんだよね」

「っ、……そ、そうですよ」

何の躊躇いもなく、オレは？結婚？という言葉で訓夏に伝える。

その言葉に反応し、訓夏は何度も瞬きを繰り返した。……きつと緊張しているんだろう。取り繕ってはいるが、オレも心臓が飛び出そうぐらいドキドキしている。胸の音が訓夏に聞こえていないか心配だ。

「まあ、訓夏がオレの匂いを憶えていなかったとしても、既にその前にお婿さんになるって宣言してる時点で同じなんだけどな」

あの頃はまだ若かった。同じことを二度に渡って伝えるなんて度胸がありすぎるぞ。

告白は一度でいいんだ。そうじゃないと恥ずかしいからな。

「……あの、それで比喩は……約束を……」

緊張した面持ちで、訓夏がぼつりと呟く。

その顔を見つめたまま、オレは満面の笑みで返事をして——、

「ああ、勿論無理だ。結婚なんてできない」
訓夏の約束を反故にした。

「……………え、……………ひぐつ」

と、ここで訓夏がしゃくり上げる。

今にも大声で泣き出しそうなぐらいに瞳を潤ませているじゃないか。

泣き出した後になって今のは冗談でしたと言ったらチンコもが
されそうな気がしたが、

さすがのオレも空気は読める……………と思っている。こんな大事な場面で冗談なんて言えるわけがない。自分自身の想いをしっかりと伝えるのが男であり、変態紳士であると言えよう。

「——今は、な？」

しん、と静まり返る。

しゃくり上げていた訓夏も、一瞬、息をするのを止めた。

「……………今は……………ですか？」

これ以上酷いことを言われたら本当に泣き出すぞ、と訴えるかのように潤んだ瞳を向けて、恐々と問いかけてくる。そしてオレは、その期待には応えない。

「ヒント、その一。今のオレは十五歳で、訓夏は十四歳……………なのかな？」

「一月十九日が誕生日ですから、まだ十四歳です」

「おお、そっか。そんじゃあ来年の一月には誕生日プレゼントを贈るから楽しみにしておいてくれよ？」

「え、でも……………比念のトランクス以外に欲しいものなんて——」

「普通のプレゼントを貰うつもりはないんかいっ!？」

もう嫌だっ、この子どうにかしてくださいっ!

「……………あっ、まだわたしと比念は年齢的に結婚できないってことですか」

「そっだよ、その通り。話が少し脱線したけど、オレはまだ十八歳にはなっていないし、訓夏も十六歳にはなっていない。だからオレ

「たちは法的に結婚が許されていないんだ」

「別に法律なんて——」

「そこは守れっ、せめて守れよっ」

経済的に考えてみても、今のオレには訓夏を養っていくだけのものが備わっていない。

そんな状態で結婚なんかしてもお先真っ暗だ。愛があれば他に何もいらなとか抜かす奴もいるかもしれないけど、やはり最低限のお金は必要だ。訓夏を幸せにするには、まずはゆとり教育……じゃなくてゆとりのある生活を目指したい。

それに一応、高校生活も楽しんでおきたいし、訓夏にも高校生としての経験しておいてほしいからな。

「だからな、訓夏。もう少しだけ待ってくれ。オレが高校を卒業するまで……」

そこまで言い終え、オレは訓夏の返事を待つ。この対応で果たして許してもらえるのか否か不明だが、これが今のオレにできる限界って奴だ。

「——待ちますよ」

しかしだ、口角を上げて笑みを生み出しかと思えば、一切の迷いや躊躇いもなく、訓夏は口を開いた。まるでそれが当たり前のことのように、とても嬉しそうに……。

「九年以上待ったんですから、あと三年ぐらいなら余裕です」

訓夏は、許してくれた。オレのわがママを容認し、あと三年は待ってくれる。

こうなった以上、この三年間で必死こいて頑張らなくちゃいけない。

「……あ、でもあと三年経てばわたしは十七歳……熟女になりますけどいいんですか？」

「世の中の十七歳に失礼だから謝りなさいっ」

十七歳なんてピッチピチで最高じゃないか！ それを熟女だなんてとんでもない！

オレのツツコミを気にする様子もなく、訓夏はもう一度オレの胸元に鼻を擦り付けてくる。正直なところ、鼻水をつけられているんじゃないだろうかと不安になるのはオレだけではないはずだ。……勿論、鼻水なんか屁でもないけどな。むしろウェルカムッ！

「やっぱり、比念はいい匂いがしますね」

オレの思考を読めなかったのか、一人満足げに鼻をひくつかせるのは訓夏だ。

またオレの匂いを嗅いでトリップしかけている。オレの匂いってそんなにいいのかな？

「そういえば結婚の約束以外にも思い出したことがあるんだが……あの日、訓夏は真っ裸だったからそっちに注目してたんだけどよ、洗濯機の中からオレのズボンを取ってたよな？ ……あれって何をしてたんだ？ 匂いを嗅いでたのか？」

「はっ、あ、えと……。そうじゃなくてですね……。いや、でも確かにその通りでもあるんですけど、あれは成り行きというべきか……」

「うん、まずは落ち着いて話そうな？」

しどろもどろになる訓夏を、優しい口調で落ち着かせる。

ゆっくりと深呼吸をして、訓夏はあの日のことを口にし始めた。

「あれはですね、わたしがお風呂に入る時、脱いだ服を洗濯機に入れようとしたんですけど、その時にたまたま洗濯機の中が見えてしましまして、……で、比念のズボンのポケットからデッキケースがはみ出ているのを発見したんです」

悪事を暴かれてしまい、申し訳なさそうに眉を八の字にする子供のように、訓夏は縮こまっている。それがまた可愛いから許します、とか言えば胡桃みたいに図に乗るんだろうか。ちょっと試してみたい気にもなるが、我慢だ。……ここ半日だけで我慢すぎだろ。

「デッキケース？ ……あー、なるほど、あの日はオレが訓夏にカードゲームの遊び方を教えていたんだっけ」

「デッキケースを取ろうとしたんです……けど、間違ってズボンを

手に取ってしまいまして、それですね、その……、匂いを嗅いでいるうちに、頭がくらくらしてきて……比念に見つかってしまったんです……」

「あれはそういうことだったのか……」

だからか。オレの家にあったデッキケースの中身が水に濡れたようにしわくちゃになっていたのは……。いや、だがおかしい。訓夏はデッキケースを見つけてくれたはずだ。それなのに何故、そのまま洗濯機は回ってしまったんだ。デッキケースはズボン共に洗濯機から出してくれたはずなのに……。

「……比念、わたしは変態です。……失望、しましたか？ 嫌いになりましたか？」

そんなオレの思考を遮るのは、不安に喉を震わせる訓夏の声だった。

訓夏は、どうやらオレの匂いを嗅ぐのが好きでたまらないらしい。そしてそれをずっと悩んでもいたんだろう。

当然のことながら、それは杞憂に過ぎない。不安がることは何一つ存在しない。

「いや、全くおかしくなんてないぞ。逆にもっと好きになるよ。匂いまで好きになってくれるなんて嬉しすぎるからな」

そう、何を隠そう、というか訓夏と胡桃には全く隠すことができているんだが、オレは変態だ。変態紳士だ。今更、訓夏に変態宣言されたところで驚くわけもなければ失望や幻滅なんてするわけがない。

オレと同類なんだからむしろ嬉しいに決まってる。変態カップルが誕生するぞ。

「……だがな、訓夏はオレのことよりもオレの匂いの方が好きなのか？」

そこだけが唯一、心配なところか。オレがオレの匂いに負けたなんてことになれば、オレはこれから先どうやって生きていくべきか真面目に検討する必要があるそうだ。

そうだな、たとえば一生お風呂に入らないとか……。

「そつ、そんなことないです！ 比念の匂いが好きになったのは、そのつ、比念のことを好きになったあとですからっ！」

「ってことは、……カードゲームで遊んでた時には、もう……？」

「う、……はい」

恥ずかしそうにそつぽを向いて、本音を告白する。

訓夏の想いを聞くことができ、オレはようやくと安心することができそうだ。

「ふーん、なるほどね……。そつか、そつかそつか……」

それがまた嬉しくて、オレは口元がにやけるのを抑えることができない。

勿論、抑えるつもりなんて毛頭ない。だってオレは変態なんだからな。というわけでほんの少しだけ意地悪なことを言ってみよう。

「不公平だな、訓夏だけオレの匂いを嗅いで。オレにも訓夏の匂いを嗅ぐ権利がある！」

「いつ、いい意味不明です！」

オレに抱かれたまま、訓夏がもがき始める。オレの匂いを嗅ぐのは好きでも、オレに匂いを嗅がれるのは恥ずかしいらしい。だが、その態度がオレを本気にさせる。変態を舐めてもらっては困るぜ、訓夏ッ！

「じつとしてて、訓夏の匂いを嗅ぐから」

「あ……っ」

耳元に囁き、ゆっくりと鼻を近づける。

たったそれだけのことで、訓夏の体は委縮してしまう。羞恥によって真っ赤に染まる。

はすはす、と匂いを嗅ぐ音が岩屋神社に奇妙な音を与え、静まり返った空間に変態の存在を認知させる。やがてその音は二つになり、くんかくんか、という音に混じり合う。

対抗意識を持った訓夏が、オレの匂いを嗅ぎ始めたんだ。

もうなんていうかダメだな、オレたち二人は。変態道を突っ走る

しかないみたいだ。

「……ん、あつ」

匂いに身を任せた訓夏は、両目を閉じていた。
だからオレは不意を突き、訓夏の唇にキスをする。

「これでおあいこだな、訓夏」

自分で言っておいてなんだが、いったい何がおあいこなのかお尋ねしたい。

警察に突き出されたら百パーセントの確率でオレが負けるような行為だぞ。

「ひ……比念は、変態ですね」

「そして訓夏も、だろ？」

うつうつ、と唸り、悔しそうに白い歯を覗かせる。

「比念みたいに心の底から変態というわけではありませんから」

「そういうことを言う人が、オレのトランクスを片手にハアハア息を切らしながら神社まで逃げていくとは思えないんだが？」

オレの意地悪は絶賛継続中だ。どうやらオレも胡桃と同じタイプの性格をしているらしい。将来が不安だよ、全く。

「……っ、だつて、それはその……っ、うつうつ、比念は……意地が悪い変態です……」

変態にとつてそれが最高の褒め言葉であるということを訓夏は理解しているのだろうか。

まあ、そんなことはどうでもいい。少しばかり怒った口調で反抗する訓夏ではあったが、最後の最後に一言だけ、満面に笑みを咲かせながらオレの耳元で仕返しとばかりにデレた。

「——でも、そんな比念のことが大好きです——……」

『あれから色々と考えてみたのだがね、たとえくんかたんがキミと結婚することになろうとも、キミが婿養子となり我が架織乃家に住むことになれば、私は一人ぼっちにはならず済むわけだよ。だからキミ、くんかたんとの夜の営みがマンネリ化してきたら、いつでも私の部屋に来るといい。私の体で解消してあげようじゃないか』

という非常にありがたいがたくないお言葉を頂戴したのは、訓夏と共に神社から戻ってきた後だ。訓夏がお風呂に入っている隙を狙い、オレの耳たぶを甘噛みしながら呟くのは、明らかに訓夏に対する挑戦状と言えよう。知らぬは訓夏のみ。本妻は訓夏で、愛人が胡桃、こんな図式が出来上がりつつある。

「比喩、どうしましたか？」

あの日の出来事を思い返し、溜息混じりの声を上げていると、隣に座る訓夏が小首を傾げて反応する。穢れの無い瞳を一身に受け止め、オレは浮気だけは絶対にしないと心に誓おう、と考えてみたけどやはり相手があの胡桃となればそれも正直難しいかもしれない。なるべく、訓夏の顔を曇らせることだけはしないように心がけよう。

「いや、なんでもない。ちょっと妄想してただけだから」
「変態ですね」

華麗な対応で難なくやり過ごし、手のひらを見せて会話の続きを促した。

今現在、オレは架織乃骨董屋の店内にいる。訓夏や胡桃、そして推拿も一緒だ。

「いかがわしい妄想話は置いておくとしてだね、とりあえず私は？ごみ屋敷同好会？を作りたいわけなのだよ。高校生活を順風満帆なものへと確立するためには、校内において自由に振る舞える空間が必要なのだからね」

「つまり自分の部室が欲しいだけだろ？」

オレのツツコミに対して、胡桃は「その通りだよ、ワトサンくん」と言葉を返す。

「中学時代は生徒会室を我が物にしてはみたが、如何せん嘉須賀が鬱陶しくて困ってね、それならば何処か別の心休まる空間を手に入れるべきであると考えたわけさ」

今、此処にいない幼なじみは、今頃くしゃみでもしているに違いない。もう少しでいいから、幼なじみの扱いを優しくしてやってくれ。似非お嬢様が子供みたいに泣きじゃくる姿が浮かんできからな。

「コトネー、ごみ屋敷同好会ではどんなことをするのー？」

「ふむ、倉紫屋……キミはいい質問をする子になったじゃないか。アメちゃん上げよう」

「ホントにつ？ ありがとうっ！」

子供の扱いには慣れている胡桃と、子ども扱いされる推拿。

こいつらのやり取りも見ていて飽きが来ない。まあ、たまに子供の逆襲を受けることもあるけどな。無垢な子供ほど胡桃の天敵になりうるってことだろう。

「ちよつと貴方たちっ！ わたくしを除け者にするなんていい度胸をしていますわね！」

ガラランガランツ、とドアに付けられた鈴の音を鳴らして店内へと入ってくる人物が一人。

昨日、オレが出会った奴らの中で？ 貴方？ なんて呼び方をする奴は一人しかいない。

「おー、名季じゃんか、どうしたんだよ？」

来店者の名前を呼ぶと、名季は思いつきオレの顔を睨みつける。
「貴方……っ、ひ、比奈さん……でしたわよね……っ」

「お？ ……おお、そうだけど。今、名前で呼んだな」

名季に名前で呼ばれるのはこれが初めてだ。なんだか新鮮な気分になってきた。

これであとオレの名前を呼んだことないのは、推拿だけになったな。

「べつ、別に……っ、これは、そのですわね……、貴方との……じやなくて、比念さんとの勝負に負けたから、無理矢理言わされているのであって……他意はなくてよ？ そのことだけはしっかりと理解しておいて頂戴ッ」

「つまり嘉須賀、キミは釣枝の犬となることを認めたわけか」

「どこをどう解釈したらそうなるのよっ」

口を挟まれて激怒したのか、名季は幼なじみと両手を掴み合い、ギシギシと力比べを始めてしまった。こいつら二人とも、昨日から全く懲りてないみたいだな。

「あはは、プロレスごっこ？ ボクも参加しよっかな！」

そしてその取っ組み合いの喧嘩に発展しそうなところに参戦を試みるのは、やはりというべきか推拿だ。各々の性格がよく表れている。……ぶっちゃけ、楽しそうだ。

「……比念」

「ん？ ——ッ」

すると、胡桃たちがじゃれているを見計らったかのように、訓夏が服の裾を引っ張ってきた。それから僅か一秒にも満たない微かなタイミングで、オレは唇を奪われる。

「他の女の子を見るのは、禁止ですよ？」

すぐそばで戯れる三人の隙を突き、訓夏とオレはキスを交わした。ほんの僅かな感触にも関わらず、たったそれだけのことでオレの思考回路はショート寸前と言えよう。……だからかな、無意識に接触反応を行使しちまったとしても、決して責められることはないはずだ。……だよな？

訓夏は、右手と左手の人差し指でバツ印を作って頬を膨らませる。その表情から察するに、ご機嫌斜めなようだ。

「……は、はい」

浮気は、ダメ。愛人は、作るな。少し残念な気もするけど、これ

が当然で、当たり前だ。

それに今のオレは決して不幸なんかじゃない。自分の顔を鏡で見
てみれば、すぐに理解することができはらずだ。訓夏にキスをされ
ただけで、これ以上にならないほど幸せに頬を緩ませる顔が映っている
に違いないからな。

……そうさ、たとえ訓夏がとんでもない変態的な思考の持ち主だ
ったとしても、オレの訓夏に対する変態で紳士的な愛情が消え去る
ことはない。

だってそうだろう？

オレは誰もが認める変態紳士なんだからな。

だからいつか訓夏自身の口から言わせてみせようじゃないか。

くんかたん劇場へようこそ、ってな？

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7529x/>

あなたの匂いが嗅ぎたいっ！

2011年11月8日17時02分発行